

正月十五日

内松田御門番  
牧野備前守内  
陶山八郎左衛門

封廻状

一卜通尋之上  
揚屋江被遣候、

一ツ橋付  
近習番

山本繁二郎

四十八

同断

戸田越前守家来

大橋順藏

四十七

同断

順藏養子

大橋燾次

二十七

同断

同人家来

松本鎮太郎

二十七

右於黒川備中守御役宅、<sup>(盛泰)</sup>浅野伊賀守立会、<sup>(氏祐)</sup>備中守申渡之、

右封廻状は昨日之訳ニ而は無之由御座候、

御老中

安藤对馬守様

右御自用方御用人川島助之丞宅江、今夕差越面会之上、

昨年来之御挨拶旁取膳申述候上、昨日は御登城之時分

御行列江致乱妨候者有之、悉御打留之由風聞仕候、如何之御事候哉、对馬守様ニは御怪我も不被為在候哉、兼々御懇意被申候事故、御機嫌之程奉伺、

御国許江可申上越旨申述候処、御懇切ニ早速御尋被下、忝御聞及之通乱妨人有之、悉打留候と申様ニも無之、三四人位は打洩し候哉も不相知、六人打留申候、兼而少々は増供も有之候得共、不意之義ニ付、未熟成者共無面目次第、主人ニも乗物之外より突候と相見得、腰江幅一寸程突疵有之、深サは左程ニは有之間敷、面体江些細之疵請候得共、是は誠之かすり疵ニ而、小サ成膏藥ニ而相濟候氣分等相替候儀も無之、昨夜も少々痛ミは有之候得共、致安眠も候程之儀ニ付、御心易思召可被下旨、且又鉄砲を打掛候哉ニも承申候、如何候哉と相尋候処、右鉄砲は供頭之両股打貫相倒候得共、直ニ起上り兩人打留、其身も諸所江疵請、其内後より頭を切付候疵深、何分死生之程難計、其外三人重疵請、数か所薄手請候而、右四人は死生何分無覚束存候旨、其外薄手負候者は多人数有之候由、

承申候、勿論対馬守様ニも御乗物より御出、御手合も被成候由、夫より坂下御番所迄被成御出候得共、御出血も致し候儀ニ付、御登城は不被成、御迎供御取寄御退散被成候旨、包置候体無之、万事懇ニ物語仕候儀ニ御座候、此段申上候、以上、

戊正月十六日

西筑右衛門

登様

写

三郎懐中

決心平欲掃榛荆 一剣直当百万兵 成否元来皆天耳

欲留報国尽忠名

斃れてもまた起ぬらん我心

〔本之原、血染不知〕  
しこのたはれと尽る時まで

文書原寸 縦一五・五種 横二一六種（表裏）

### 三三 真木和泉ノ討幕上中下三策

二三三ノ一

方今天下貴賤尊卑の差別なく、尤思へく又尤恤ふへき事

ハ、

玉体の御事なり、如何なれへさほと思ひ恤ひ奉るへき主上御事、聖徳ハ神明にも優させ給ふといへとも、血氣ありて知覚運動セさせ給ふ事ハ平人にもかわらせ給はすされハ、御台に渡らせ給ふ時あり、又御不予に渡らせ給ふるあり、是人としてハ上下の差別なく皆然る事なり、丑年已来外夷の事にて一方ならず、

宸襟を悩ませ給ひ種々と仰下されけれと一として受奉らす、奉受らぬのみならず 英略を奉輔たる近衛公を奉始辭職入道までさせ奉り、外夷の申立たる事うつゝにとり用ひ、今日に及てハ天下の政事をも夷虜さし図を受けるに至れり、和の宮など御難波に 思食たるを、公武一体の勅(マツ)を以て安し奉りたるに、其後さして公武一体のしるしもなく、況て彦城中には云にも忍ぬものなども作りて、頻に 讓位をも議せるよし、御口をしくも御憂鬱にも思食させ給ふ事ハ、恐なから推て知へき事なれハ、万一御憂に堪させ給はず、御病氣をも御させ給は、天

下蒼生何を頼むへき、方今神州の人民ハ天地にも神明にも棄られたる様にて、只

主上御一方御盛に渡らせ給ふはかりの頼みなるに、もし左様の事もあらは盲の杖を失たらん様とも、何とも譬へん方なかるへし、憂を以て病を得るもの賢愚の差別はなきものにて、既に澹空公・順聖公・烈公之如きも天下の憂に堪かねて薨逝し給へり、是愚昧の過裂にて、さるへき道理もあるまじけれと、僥倖を頼にて日月を推送るは臣子の分にあらずと思なり、扱左程

宸襟を悩し給へる事ハなき事にて、彼の夷狄の事、夷狄を攘ふハ征夷府の任なれハ、ケ様の時節ハたとへ正統ありても幼なけれハ、宗室の中より年長して有徳人を択へき事なるを、近き三卿に一橋卿あるをさしおきて、幼主を立たるなど全く奸猜どもの己か便利を計りての事也、征夷府の職なり、その征夷の職を正さんとなれハ、其才徳を扱はされハかならずその才徳其職に叶ハは、東照公の成法嚴然と立て、夷狄かならず無二念打払へし、打

扱たらは

宸襟ハ直様ゆるませ給はん、ゆるませ給はよもとの太平に立かへりて、いよ／＼めて度御世たるへし、扱又ケ様の時節ハ征夷府に堂々たる世継ありても、幼なけれハ宗室の中より年長して有徳人を択へき事なるを、近き三卿に一橋卿あるをさしおきて、幼主を立たる事など、全く奸猜どもの己か便利を計りたるもの也、されとも既に立たるを其臣下より廢立するハ、容易らぬ事なれと、

天朝よりの御はからひにて前なるを致仕せしめ、前將軍と号し、其添に一橋卿を挙て幕府の任を下し、又尾州・越前の如きも烈公の例によりて、大儀に預らしめ閼老小老各其人を得て一筋に其祖宗の法を復せしめたらは、更に又めて度事に至るへし、ケ様になし侍らんとならは、かならず

天朝に大権を握らせ給はずしてハかなはず、其大権を握らせ給ふハ、俄に六衛府などおき給ふ事もならねハ、最大の藩より大兵を擁して入衛し、一旦ハ激烈に出て、幕

府の奸夷とも一々逐ひ退け、或ハ討伐し、終には幕府をも族滅すへき勢を見せて股栗寒胆せしめ、然る後に大使を遣して其君を召しよせて罪を謝せしめたらは、一旦権を収められて

天朝よりの御処分大小にかきらす必ず従ひ奉るへし、

然る後に前条の如く征夷の任を始めし府の有司小吏まで天下の公議に従ひ、覽能を用ひたらは、後日ハ一橋卿の

賢明にて、上には恭順を守り、下には仁恩を施し、内ハ

武備を設け、外夷賊を攘はせ給はん事疑あるへからず、

是則時によりての妙策なり古にもきかず、後代にもある

へからざる大切なるへし、即今一世眠りに眠りたる世界

にて、大諸侯と唱る諸侯多しといへとも、上ハ

天朝を尊ひ、天下を大切におもひこみ、下ハ蒼生を愛養

する心深き事他に比類なき国にあらざれハ、仮初にもお

もはぬ事なり、苟も

宸襟をおもひはかり、蒼生を救ひ給はんとならば、一樣に人の意外に出給はんそよかるへきとかしこけれとも、

おもひ奉るなり、吾孀に下らせ給ひての御策ハいか様ともはかり知り侍らねとも、正議を聞けるへき事もなき諸侯を合従するには往後類教の患あり、とかうするうちにはかならず情見れ勢応ニする事にも至りなん、あなかしこ、老婆心のあまりにつたなき筆をとりぬ、

冊子原寸 縦二六・七糎 横一八・八糎 三枚

一三三ノ二

三策

○拔条城以靖 輦下、北屠彥城、以絶覬覦之心、東火武城、以褫賊胆、南取華城、移 蹕于此、以收天下金穀之權、乃移檄徵諸侯、率之東巡、封霸主於北越之地、使之奉其祀安其衆、以武城為安東將軍府、親王鎮之、乃北巡、置寧北府、還御華城、駐于此十年、徐當于養德之地、此為上策、

○拔条城以靖 輦下、取華城、移 蹕于此、以收天下金穀之權、乃移檄徵諸侯、々々集矣、遣使徵霸王、諭之致仕、立其宗室之賢者、尽誅其奸臣、而進退左右由我

制之、此為中策、

○大兵衛 闕、移檄徵諸侯、々々集矣、巍然養威、乃

詔霸主、使之誅其奸臣、有其宗室之獲罪者、相与讓議  
盡復其祖宗之法、此為下策、

○舉事本起乎夷狄陵犯、我三策於彼如何、保臣窃謂、我  
出乎上策、則彼將相謂曰、日本果有道焉、皇帝御政、  
未可与爭也、必相率而去、戒不航東海矣、

○我出乎中策、則彼將相謂曰、彼皇帝何為者、霸主我之  
所和親、不可不援也、必相率而來、東西侵寇矣、

○我出乎下策、則彼將相謂曰、日本果拙矣、此資我耳、  
必陸續而來、一舉吞噬矣、

○彼相率而去、則吾修我內政、簿斂時役、使民厚生、建  
學校、興礼樂、使士知方、僧尼還俗為兵卒、寺觀毀之  
充船材、沿海築城、辺要有守、稍收朝鮮・琉球、以為  
外藩、乃援漢土、使之固其圉、又使之出兵、与我踰角、  
擠洋夷于南島、又航東西諸州、弘 皇化于宇内、以報  
天祖之貽謀、

○彼相率而來、則必假繼絶與滅之名、以援霸主矣、所謂

譜代諸侯者、雖或知順逆、疾叛主之名、且相周旋、而  
武城猶在、可以拋之、權勢猶存、為積威所押、人心不  
遽嚮我也、於是乎天下始分、復致元龜天正之變可知也、

○彼陸續而來、則必繫大艦數十于華海、以為根拠、內掠  
金穀、外妨運輸、以時擊入衛之虛、又硬勤 王之路、  
或媒講和、以撤兵備、或說曲直、以阻軍機、而我未得  
土地人民之權、有功不可賞、有罪不可罰、浮浪之聚者  
不可食、器械之弊者不可繕、內自罷弊、力不能戰、於  
是乎虜時空虛、大兵一舉、刺刃于我咽喉上、則事既去  
不復可如之何也、

○大都事有為之不如不為之者、兵其尤者也、故非利之十  
倍乎害、則不可舉焉、今我上策、有万利而無一害者、  
而其用力也、与中下策無損益、特要于神速耳、其中下  
策、害不掩利、而兵一動、則不復可戢、致南北之變、  
亦不可知也、今苟舉之、則宜為第一等之事也、何可捨  
此利而用彼害哉、亦勿使世謂為之不如不為之焉、耳人

一三三ノ三

謹而奉申上候、保臣義兼而御国之御建国御制度等承り、  
欣慕仕居候処、此節風と罷出、阿久根より御城下迄之間、  
一々心を付罷通申候処、山海之形勝ハ勿論之義、所々都  
城之御布置、士民之御制法等、御行届候御事、就而人情  
等朴実ニ而義を守り、只々国有を知て天下有を不知、御  
家有を知て幕府有を不知、宛然として一寔区を為し候様  
ニ相見申候、実々又天下封建同様ニ而、一百二十之都城  
大小相維持し、中々健固之御事ニ御座候、殊ニ御城下ニ  
於而大家小家邸宅魚鱗之如く、御館を相衛り、浜手ニ於  
而御台場之御布置、夫々所を得候事ハ、保臣乍不及御周  
密と奉存候、然ニ其数之莫大ニ候事、沿海如何程ニ御座  
候哉、誠ニ驚愕仕候、此御台場之設け一ヶ条ニ而も相考  
候ニ、方今天下中幕府を始め列国海岸有之國も多く、其

内ニは衛固ニ意を留候國も可有御座候ニ、ヶ様迄御大造  
之義行届候藩決而無之、是一ツニ而も御国之天下ニ超逸  
仕居候義ハ相見申候、然れハ御藩士之義勇天下を睥睨致  
し、他よりも相恐申候義当然之事と奉存候、近年夷狄等  
数ヶ國相参候ニ、御國人と水府人を殊之外相恐、長崎ニ  
而之嘶ニ、夷狄等酒肆茶店等ニ罷越候ニ、双刀を帯候者  
先立て有之候得は、先ツ薩摩人ニ而は無之哉、水戸人ニ而  
ハ無之哉と相尋、弥右両藩人ニ無之と申義聞届申候上ニ  
而立寄申候由、右ニ付茶店之人等双刀之人を殊之外嫌申  
候由、去々年保臣友人長崎江参り右様之事ニ而酒肆茶店  
等終ニ参り得不申趣ニ御座候、実ニ御藩之義ハ七百年來  
深き根入有之、内ニ所頼御座候而自然と義勇外ニ発達仕  
候者ニ而、他藩一時之振作とハ霄壤之相違ニ御座候、其  
上神州を大切ニ相心得候事と、  
天朝を尊敬致候事とハ、御家従來之御風習とハ乍申、頓  
と外々と違ひ、乍失礼一丁字を不相弁人も同一枚と相見  
是等ニ於而ハ誠ニ如何様之訳ニ可有之哉と思慮も不及事

共ニ御座候、勇武ニ此忠義を加へ申候義ハ、成程一時之鼓動杯ニ而出来候事ニ無之、何れ御藩祖様以來御代々様御鼓舞之所致と、乍恐奉存候、然るに此節罷出候而御大挙之義密々奉伺候於而、殊之外御遠慮被為遊候様被相伺申候、勿論二百年來太平偃戈之世之中ニ兵を奉候事、如何ニも審詳に論議可申義ハ申ニも不及義ニ御座候得共此節之義ハ元龜・天正年間英雄之我一々天下ニ目掛候杯と違ひ、上ハ

叡慮を奉慰、下ハ士夫之憤怒を晴し、庶民之塗炭を可救之為ニ而、事体大ニ違ひ申候得は、二百五十万口之人誰一人ニ而も相怪申候人可有之哉、必侯伯士夫ハ下風を慕ひ、直ニ馳參、農工ハ簞食盃漿起て道路を塞候様可有之義ハ、眼前ニ御座候、殊ニ

天子ニ於而ハ立坊已來御聖徳天下嘖々相唱申來、近年已來外夷之義ニ付叡慮を被為惱候事ハ、婦人小兒ニ至迄も難有も又美山ニも奉存候事ニ有之、且夷狄等之義、丑年已來江戸始め長

崎・箱館其外之所ニも上陸仕候所ニ而ハ自由ニ横行、我人民と相交申候得共、未タニ彼を禽獸と見下候事ハ不相止候間、此時節ニ乘し、上

天子之大命を奉受、下士民之怒氣を漏し可被遣御事ニ於而、何之遠慮も会釈も可有之哉、大凡人情遠慮会釈等仕候得は、自然と手前ニ虚を生し申候者ニ御座候間、只管手前之胸中何之意趣も無之、天地神明ニ質し候而も恥敷事無之所を以て、御打出し被為遊候へハ、孟子之所謂浩然之氣満溢仕候而、猶更天地鬼神も相佐候様ニ可相成事と奉存候、保臣義物知貌ニ奉申上候義ハ深く恐多奉存候得共、都而之事勢と申者御座候、世の中打代り目ハ猶更之者と奉存候、就てハ此節京都御乘込、即夜事を被為奉、第一玉体大切之義ニ付御馬廻丈ニ而御所御警衛被遊、義徒ニ御供之内可然人兩三人と二三十人を御分ち、三千計之将卒ニ被遊、一時ニ取掛り、二条城近辺火消、屋敷ニ三所計も火を放ち、是ニ而奸賊を逐出し、且我之勢を添其内ニ少々鳥銃を放ち、騎馬之十騎計も乗廻し差迫り、幾

万人有之哉も不相分様仕掛、平明ニ至り候而ハ一枚(一枚)御所ニ打寄り、旌旗を多分ニ押立健固ニ相衛り、直様詔を配り檄を移し、折節差急交代之諸侯も有之候ハ、摺紳或ハ地下之諸大夫杯を勅使として京撰ニ引留可申、元来近畿ニ於而ハ寺社百姓町人等、自然と

王室尊奉仕居候得は、吾先ニ相集り、一時之間京撰中人數相増、同志せりにて大八洲の生氣一所ニ充滿仕候様に、其勢中々不可犯相見可申事必然之義と奉存候、此勢と申者人爲には出来不申者ニも御座候得共、主将の心次第ニ而惣体之仕掛ハ必ケ様ニ相成可申道理ニ御座候、勿論前以之手配ニ而東方ニも少々賊胆を破りケ様致置、華城之義は京都同様彼之健固之城を乗取可申義ニ付、東来之者も西来之者も彼地ハケ様、此地ハケ様と針ハ棒ニ風評仕り、且又東方ニ而ハ京撰ハケ様なり、華城ハケ様なりと是等針ハ棒之風聞ニ相成申候而、奸吏ハ從來吾身を大切ニ致候事而已相計候者ニ而、天下之事も主人之事も思慮致候ニ違あらず、自身在所采地等ニ引籠候工夫計可

仕候得は、一諸侯方ニは伺候役所も無之、尋候役人も無之吾一々国元ニ被引取候様ニ相成、其内ニは仙台等之様なる有志之國も有之、不待

詔候而上京も可有之と被察候、左候得は東方ニも意外之勢生し、沸湯ニ水を沃掛候様ニ一時淋しく相成候義ハ、是所必然之義と奉存候、何れにも此勢を生し候様之御工夫御肝要之義ニ奉存候、

一東方擾乱仕候様取計候義ハ別断可奉申上候、  
一華城同様取城候義ハ、東地人熊沢右馬之助之説御用被為遊候得は、御手易之事と奉存候、

一金剛山摩耶山等之形勝ニ拠候事、東地人永島三平之説御座候、御用被為遊度候、此二ケ条ハ此節御道中より御一人御踏越候而、熊藩ニ御遣為御聞被為遊候様奉存候、何れも天下之為、從來講究仕居候義ニ付、満足可仕奉存候、

一彦城之義、東西御手届候上ニ而は有之候共、邪魔ニは相成申間敷候得共、城中不祥之物も有之由ニ付、早々

取除申候事臣子之分ニ於而可尽事と奉存候、

一 平安城ハ兵糧之運輸致苦候間、一時相集候人数ニは差支も致間敷候得共、時日経候得は手揃悪敷、其内ニ不都合之義も有之候ハ、勢ニ於而不可然事ニも及可申と奉察候間、早々華城ニ移 躰候事肝要ニ御座候、一 举無程移候得は函簿等之事、式之通不被為遊候共取紛中と申訳ニ而旁以便利ニ可有之、且直様天下金穀之權を押候而、天下人心聳然仕候義、勢之沙汰ニ於而も格別之便利ニ御座候、

一 保臣義此節上り掛ニ宇和島・土州等ニ罷越、差統兵を出候様相勤度、可相成ハ御藩士一二人御遣被成下而ハ如何ニ可有御座哉、至懇奉存候、

一 大和十津川ニ長勝差と唱候而、四千家御座候由、勿論無免地ニ而人氣豪邁 玉室尊奉之風元弘以来相伝り居候由、是所罷越忠義を以て相倡百人計も催し出申度奉存候、此義ニ就而ハ少々別ニ奉願度事も御座候、何分右件々之願有之、御評議被仰付候様重々奉願候、惣而

人情と申者内より觀申候得は、瑣々之故障も有之、小々之不行届之事も御座候而、存念通り不參、他国之分も羨敷存候事有之者ニ御座候得ハ、御国ニ於而御斟酌被為思召候義も万々可有之義欵共奉察候得共、前条奉申上候通り、私共外より相伺候処ニ而は、御大藩御旧国当り前ニは御座候得共、御建國御制度共ニ他藩之所及ハ一ヶ条も無之、殊ニ士風之振居候事ハ格別之事、且他より御國を相恐候義ハ甚敷迄ニ御座候、右ニ付此節之事等御打出之上ハ、第一薩より之奉ニ候得は氣遣無之と、倚頼可申諸侯多く、第二ニは薩より之奉ニ候得は迎も手ハ付兼申候を恐怖可仕奉存候、是等之義ハ乍憚外より觀候者ニ無之候而ハ相分兼候様奉存候、畢竟天朝より御倚頼被為遊候事も外より御覽被為遊候而之御事ニ而、保臣ケ様申上候驗と被為思召度奉存候、何分ニも時機大切ニ御座候間、早々敷御駕御道中も随分御急被為遊候義、早く叡慮被為慰、草莽憤鬱之心をも漏し被遣度、偏ニ奉願

候、以上、

冊子原寸 縦二六・七糎 横一八・八糎 四枚

一言 近衛忠房卿より島津和泉殿へ 二通ノ内

朝廷之御模様

又候巨細申入候、前左府ニ茂參

内被止置候次第、右ハ関東ハ勿論、当地ニテモ閑白其余役人且ハ近臣之中ヨリ種々外事ニ寄せ言上之事共在之、

夫よりして前左府并ニ青蓮院宮・鷹司前右府公存不寄災難ヲ被蒙、唯今ニ兎角色々ト

上ニモ御疑心不被為晴候御模様ニテ、何共御悲歎不一方候事ニ候、乍去今度修理大夫殿より之御劍伝猷ニ付御満足様御模様ニテ、不存寄

宸筆御製可伝様拝領被 仰付、深以畏々候事、乍去是ハ誠之

叡慮ニテ被出候義、何分前左府忠房より言上ニテ、何カ程克被 聞召候辺如何ト心配候、是ハ全恐多茂

叡慮ヲ奉迷人体多在之、夫ヨリシテ誠ニ不存寄 御疑心

共被為在、甚以歎息仕候、右之辺尚之介上京之節ハ巨細ニ申入兼候事ナカラ、最早今度ハ在体申さすハ何カ

御聞取之辺も如何と打明申入候間、巨細厚御察之程御頼申入度候、実々御誠忠之程ハ当然之義、是ハ有志諸藩折合、

叡慮ヲ被為安候様良策モ候ハ、免モ角モ何分右之次第厚御組取御勘考之様頼入存候事、

且亦実々前左府ニハ一昨々年御隠栖後何カ御根氣薄ク迎モ〳〵御再勤之御懸念毛頭不被為在義、忠房ニハ其

辺深悲歎ニ存候事ナレ共、何分當時之御模様ニテは御遁世之方安心之場合ト存候事ニ候、且亦自然九条閑白(老)辭職之次第ト相成候節ハ、當時一条左大臣至テ(老)矛盾之

性質、迎モ当今之職ハ難被勤哉ト被存候、二条右大臣ニハ可然人体と被存候、當時之処九条家親族之義旁全

付合之様ニ被存候、何分右之公ニ候へハ(危)諛ト閑白職可被相勤哉ト愚察候事、何茂御賢考御頼申入候事、

此二通書取乍乱書市藏心覚之迄ニ染筆候、決而他見  
無用候、入覽後投火ノ、頼入置候事、

文書原寸 縦一七・七糎 横八五・七糎

一三 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 二通ノ内

内勅降下困難ノ件

市藏江被申越候条実以御誠忠厚情之程至極御尤千万勘要  
之事と存候、然処旧冬尚之介被指登候節ニも委細申入之  
通、公武御一貫と申表ハ御訳故、唯今他向へ

勅諭杯被出候御場合ニ而は決而無之哉ト被伺候、

朝廷御模様柄、殊ニ於忠房右等之義商量毛頭致かたく、  
実以当惑仕候、就而は

朝廷之御力ニ茂相成候程之警衛も在之候ハ、

勅諭も可被出哉ト、種々御遠察之御誠実、当然之義至極  
御尤、頼も敷義ト存候へ共、仮令数千万之衛護周備在之  
候共、即今之処只無益之騒ニ相成候而已之義ニ而遠察符  
合之時節ニ無之、唯今達而取行候而は志願之筋ハ不相通、

かへつて事之破ト相成、忽 御膝元及混乱候義ハ眼然之  
事ニテ、

天朝之御為ニも不相成、被惱

宸襟候一ツト相成候而ハ、是亦不容易恐入候次第ト存候、

乍去有志之諸藩合体シテ不被惱 宸襟候様諸藩ニ所置之

在之候事ニも候ハ、

皇国之御為不被惱

叡慮候様良策頼モ敷候へ共、

朝廷御政事ニ不抱、忠房杯へ重キ

勅諭ヲハ被出候様可取計被申越候共、所詮其義ハ不能義、

何分御政事向商量難致義、撰家ト申せハ大小トナク

朝廷之御政事ニ可抱ト一通り被存候処ハ至極御尤ニハ候

へ共、何分撰家ハすへて太政官之事ハ

勅問ニ從商量仕候事ナカラ、今日之御政事向万端ハ撰家  
之内ニテ関白唯一人事ヲ執候義、仮令左大臣・右大臣タ  
リ共内覽宣旨無之ハ御政事ニ不預義、既ニ當時之左大臣  
始ハ内覽ニ無之候故、更ニ商量難致義、前左府ニハ内覽

之被蒙

宣旨候事故、專御政事ニ抱り候御事故、是迄すへて言上  
モ出来候義、何分内覽ニ無之大臣、始ハ當時之処商量難  
致義ニ候、尤前左府御勤仕中元来

天朝之御大事ヲ被存候より事起、終ニ不量之御隱柄ト相  
成候御次第ニ而、今以参

内モ不被許、元々御合体之御旨趣及懸隔、當時之処ニテ  
ハ

御時宜之程モ甚如何ト難被計、乍蔭

朝廷之御大切之御念慮ハ御間断無之候御事被申越候条、

忠房ニ茂当然之事ト御尤ニ存候へ共、前文之通御政事商  
量不仕身分、迎モ言上抔其義ニ不能、正親町三条ニモ役

人ナカラ新役、殊ニ彼是ト九条関白へ随從之役人中夥數  
在之候事故、迎も度々御前へ茂難被出次第、何か〳〵六  
ケ數候事共故甚痛心候、何分御政事向すへて之事商量難  
致義故、右之辺御推察勸弁之程厚頼入存候事、

此書外市藏江申含置候俣御聞取可給候也、

文書原寸 縦一八糎 横二二六・五糎

二五 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ

久光公ノ参府ヲ賛ス

入覽後、急速〳〵〳〵火中〳〵〳〵頼入候也、

市藏より承候御趣意御尤ニ候、兎角ニ不穩時節御参府ニ  
而、何卒

天朝之御為、徳川家之御為、誠忠之程良策可然哉ニ被存

候事、

修理大夫殿

(忠義)

和泉とのへ

文書原寸 縦一六糎 横二七糎

一七 鶴木孫兵衛上田三左衛門ノ報告書

永井清左衛門聞合書

(以上) 久光公手写一卷

春日社神鏡墜落破損、和宮降嫁

(端裏朱書)  
「壬戌」

京都其外他藩之形勢細々承合、且当正月初、南都春日社御神鏡御破裂之御変事并淀・膳所等より洛外新規固場之出来有之候様子承得申候付、手を入承合候形行別紙之通御座候、外ニ別段ニ御届申上程之儀無御座候間、御披露被下度、御頼申上候、此段及御掛合候、以上、

京都詰  
横目

鶴木孫兵衛

二月七日

上田三左衛門

田畑平左衛門殿

東郷源左衛門殿

彦根表動静探索として、山本金三郎方江赤坂太兵衛差遣申候処、旧冬よりは掃部頭様 上使として御上京一条ニ付、色々混雜之儀も有之由ニ而、当分專其一条計ニ而、異説も無之由御座候間、此段申上候、以上、

戊二月

服部政次郎

長州御手入之儀、当時之振合承合候儀、左ニ申上候、

一旧冬新興侍様より長州方御吹拵之儀、強而大典侍様江被成御頼候処、段々御異見之上、些御叱り之口氣ニ而、

新興侍様も余程被成御心配、勸修寺様江御迷惑之段、

御不足被仰遣、勸修寺様も初御堂上方江御頼被成候事

故、今更右様都合不宜義杯御咄も難被成、長州方江は

猶更色合も被仰兼、其上誰々御取持被成候杯との風聞

も有之、右御手組之堂上方彼是御心配之折柄、伝奏坊

城様より御内々御問合被成候由ニ而、進退御難被成

居候由、就而は立入加賀守も別而心痛仕居候由御座候、

右勸修寺様雜掌立入加賀守江問合申候、

一右長州一条ニ付、伝奏より広幡様江御問合相成候由、

一長州御手入堂上方御取持之次第相響候由ニ而、日野様

御違変之様子御座候由、

右吉岡泰助江問合申候、

右は赤坂太兵衛を以探索為仕申候処、右之通承得申候

間、此段申上候、以上、

戊二月

服部政次郎

先達而以来堂上方不時御參

内等之儀、大典侍様御筋合、其外非藏人等江承合申

候処、左之通御座候、

一 正月二日南都春日社御神殿江相懸り居候ハツ花形之神鏡、無故して落破れ損候ニ付、社家惣代より

御所江御届申上候由御座候、

一 右ニ付堂上方御記録御調へ、御内々被 仰出、諸家御調相成候処、往古より五ヶ度御破鏡之例有之、都而兵革又は長者之變ニ而、凶兆計ニ御座候由、

一 右一条ニ付、社家惣代式人御呼立ニ而、致滞京居候由、

一 此度は乾元元年御破鏡言上之例ニ而、

奏聞相成候由応永・保元年間ニも御破鏡為有之由、

一 右御一条は別而御秘密ニ而、不洩聞様との御事ニ御座候由、

一 此節京都御固膳所・淀江被仰付候哉之儀は、右御破鏡長者之凶兆、其上江戸ニ而安藤様一件も有之、旁ニ而関白様殊之外恐怖被成、其辺より守衛出張為相重儀ニ而可有之哉之由御座候、関白様は氏長者ニ而御座候、但淀稻葉様・膳所本多様等は、京都七口之御固先手

被仰付置候、

一 和宮様弥御下向ニ付而は、其以前品々御約定之事有之御老中方御証文御差上相成居候由、就而は

和宮様江戸 御着之上 御上洛之 御引合相成候処、

御違約之筋有之、 御入城も御隙入相成候、其外御約束ニ相振候件々、御局宰相典侍様より御引合被成候得は、江戸大奥御年寄等多人数ニ而無理押ニ之返答、其上被致嘲哂、御残念之次第杯 宮中江被仰上候由ニ而、去冬より

御逆鱗御甚敷、此等之儀ニ而御近臣之御方被為召、

御密談被為在候御様子ニ御座候由、

一 安藤様一条は、正月十八日所司代より伝奏江御達相成、天聴相成候由、

右之通承得申候間、此段御内々申上候、以上、

戊二月 服部政次郎

一 彦之事何も異変不相聞候事、関東使二月廿八日比京着之由ニも風聞有之候へ共、領分ニ而は十五日之騒動ニ

而延引ニ相成候様、専風説之由、

一正月元朝、南都春日神鏡故なくして三ツニ破裂いたし有之候由、

奏聞ニ相成御記録御しらへ有之候得共、往古より破裂いたし候事は不相見候由、併落之事ハ治承之比有之候よし、

一内侍所神璽之御間雨もり之由、右は去年

和宮御門出之日と申事ニ御座候、極々秘し有之候事之由、十五日之関東騒よりふと洩れ候半乎、此比相聞得申候、

一御所御車よせへ落書いたし候由、関白之首髓ニ落手仕と有之候由、右ニ付九条殿ニは又々御門出入等格別厳重之よし、正月廿八日無抛御参 内相成候よし、其節 守衛之武士多分有之由、

一何やら東之事ゴテ、いたし有之乎之由、御役家辞退有之方ニも有之由ニも風説いたし候、

一正月廿一日膳所警衛場所大久保雄之助目付之由、稲葉

長門守巡見いたし候由、尤是迄白川辺ニ仮陣所有之候処、百万遍之辺へ急速陣所相建候乎之よし、其外洛西ニも相建候乎之よし、

一関東御婚礼最早相濟候由御座候、万事何ニも不相分候時節ニ相成申候、歎息のミニ御座候、

右数通正月末飛脚便到来、

一京都之御都合何分ニも評説斑々ニ而、何共難計、先公武御合体とは難被申、其訳は 京地之 思召と関東之 思召第一振合相替居候事而已之由御座候、

一京地之 思召は

和宮様御事は別而

当今様之 思召ニ被為叶候、

御愛方様ニ而京地ニ而は御縁ニ候得は、何方江成共被遣候御事ニは御座候得共、遙ニ関東江被下候 思召は

全不被為在御事之由、関東よりも最初ニは強而御懇願も不被為在候処、関白様と御所司代様御相談之上、夫

々御取計相成候哉、勝光院殿勝光院殿と申は、家慶公、家定公御二方上藤彼相勤候姉小路殿

事ニ而、家定公薨去之後、雜髮被致候、故橋本前大納言様御妹当宰相様之為ニは又伯母之御統之由御座候。

一昨年上

京、橋本宰相様江御咄ニは

和宮様を御縁与之儀、訳而致承知候趣有之、態々致上

京候、就而は御局様方は勿論、殿下江茂追々及御相談

候間、其御方よりも達而御願有之度、遮而御内話有之

候由御座候処、勝光院殿事江戸出立之時分は、鎌倉江之島參詣と

して御出有之、直様東海道伊勢路江御越付候之面々も、全不存程之事之由、然処石部宿より表向之御用ニ而、御所司代様御方より迎之人も有之、先弘等も相付京着、大丸屋本宅江旅宿相成

凡半季程滞京有之候由、其内毎々 是は迎も我々より願出候事

殿下亦は若州候江被差越候由、

も出来不申、且は 御承知被遊候訳ニも無之段御申切

被成候処、態々上京是程迄及談候ニ、右返答之趣、甚

以存外之至、御調談相成候得は、其御方も御双方江対

し美目ニ而、如何程之大慶可有之儀は案中、自分ニも

其功相立候ハ、大悦満足可致、左候ハ、皆其御方之

御縁不被為整候ハ、自分は自害ニ而も可致、左候ハ

、其御方は不首尾ニ而、何様之難題到来可致も難計、

乍恐

御讓位も可被為在様成立可申、連日打統御咄有之、橋

本様ニも御当惑ニ而不容易事ニ而、卒尔ニ申出ス事も

不出来、能々勘考可被成旨被仰聞候得共、弥手強被申

募、無抛御承知ニ而、左候ハ、俱ニ御肝煎申上候様可

致と之趣ニ而、夫々江御内々御咄相成候処、素より関

白様若州候御存之訳ニ而、橋本様之掛念なから御申出

之儀余程御都合宜御座候由ニ而、

八十宮様之御例も有之、江戸表より御縁与再三之御願

之趣、

御所江被仰上候由御座候、

一右通ニ而段々御媒介申上候向々御双方江能様ニ御取成

終ニは乍御不承知無抛

御聴届被為在候筋承得申候、

一右ニ付御媒申上候向よりは、関東江は

御所よりは是非

宮様を被下と之 思召之旨、

御所江は達而関東江被下度旨、御懇願之趣被仰上候向

ニ御座候由、右通御取成之向は、関白様と若州侯之由相聞得申候、

一御縁与相究候後、

御所より地下官人江御達書

和宮縁与之儀、此度再三関東より懇願ニ付、正徳年

中

八十宮并東福門院之例も有之、其上深思召も被為在

候付被下候、此旨為心得申聞置候事、

八十宮縁は、東福門院様之御腹御降誕之  
院様は、台徳院様御女  
宮様御座候、東福門

後水尾帝之中宮様ニ御座候、

右通御達有之候上は公卿方ニも為何異論被仰候御方

も無之候得共、深 思召之儀は御合休之廉ニ可有御

座候得共、関東表被成向等相違ニ付、今程風評等相

止不申由、

一前文通御取究相成候得共、当二月

御先帝様御十七回忌御法会ニ付、右被為濟候上 御下

向之筋御相談有之候得共、夫迄御猶予相成候ハ、此

御縁は難被為整と之御事ニ而、是非昨年

御下向之筋被 仰上候得共、昨酉年は星御廻り不宜、

和宮様御年は丙午ニ而午月丙午ノ日午刻御誕生被遊候故、  
御聽届  
酉年は関東江御下向ニは悪年之由申上候向御座候由

被遊候由御座候処、先此涯 御下向被為在、当二月迄

ニ一往 御上京、其上改而 御下向、御婚姻被為在

候筋被仰上候処、漸 御承知被遊候御事之由、

一昨年

宮様為御迎江戸御本丸表使上席村瀬殿<sub>御旗本</sub>上京有之、

於

御所江戸表之思召等、程能取繕

御下向之上は、

御所之 思召通ニ私共御引受申上、何も御都合宜様御

取成可仕、尤関東は田舎風之事ニ而不宜、

御所之御風を不被為替様申談可仕と之趣、其外是迄江

戸之仕来不宜候付、此節より

御所風ニ一統相改候積坏と取繕、程能御局様方江被申

上候処、皆々御悦ニ而何も宜相頼候趣ニ而、折角饜心

等有之候由ニ而、供奉之女中方も別而御安心之事ニ御座候処、

宮様京都御立、木曾路 御通行之処、俄ニ狂氣之様子ニ罷成、迺も御供も出来不申、御先キ江歸府いたし度願之趣有之、御道中之半途より御先江出立相成、別而不相勝趣ニ而、差急江戸着被成候由、然処、

宮様板橋宿迄 御着相成候処、夫江御出迎之女中一所ニ村瀬とのも差越、京都ニ而御約束申上置候通とは何篇相替、京都より之御手当事等、別而相違いたし候付、是は如何と段々御評議中、早クくと江戸より御せき立ニ而、清水御館江被為 入候由、

但村瀬と申女中は、中途より作病ニ而、

御所之御模様相伺、態と取繕候而程能取成置、御先江踏越都而之事共申上候而、右通御手当事確と致相違候半と、いづれも心外と申事之由、

一江戸御着被為在候砌より、品々区々いたし候付、宰相典侍様并能登と申者、別而弁舌宜キ方之由、段々訳筋

被仰候得共、多勢ニ無勢ニ而、頓といたし方無之と御咄之由、

一和宮様御下向之節、木曾路戸田川御船渡之時、向之岸ニ至極能染し紅葉有之、暫 御船を停メ御眺望、一枝折らせられ、御手ニ被為取候而御歌を被為添候而、此川江流せと御沙汰、

御製

もみち葉の落行身とはしりなから

人なつかしきいろにそありける

一和宮様清水御館江 御滞在之砌は、別而 御威光高被為在、十二月十一日

御入城被遊候而も、矢張同様ニ被為入候由、御見送之御方ニも難有狩被居候由、

一当正月四日

御内婚被為済候当日より打替り、江戸女中方江別而御丁寧ニ而、殊ニ御和合ニ被為成、翌日より毎朝

(家庭雜室)  
天璋院様江

公方様御同道ニ而御機嫌伺ニ御出、其次ニ本寿院様等(家慶御室・孝定生母)

江も御伺ニ御出被成、別而御睦敷被為成候由、

一御所より被相付候御方ニ、江戸之御様子相伺、都而御  
帰京之上御申上可被成筈之処、江戸表ニ而は、御入城

以後は、いづれも様 御対顔不相成、御翠簾を御、一  
間を差置、御対顔御言葉計ニ而、何様之御取扱ニ候哉、  
全体御様子を相窺帰参之上、

当今様江被 仰上筈之処、御咄も御出来不相成、橋本  
様丈御残、其外は一統御帰り相成御咄之由、

一供奉堂上方御帰之上、江戸ニ而は段々御丁寧之御取扱  
も有之候由ニは御座候得共、夫程ニは御怡も無御座、  
却而関東之悪口計御咄之由、

一橋本様も

宮様御上京迄御残、其節供奉ニ而御帰り被成筈之処、

御上京之儀は表向御婚姻被為整候上、 御上京可被仰  
出と御延引相成申候由、左候而二月六日之 御法事ニ  
は為 御代香、

宮様江

御所より御付之上藤おふち様并御年寄玉島、其外正月  
廿七日上京、同晦日参 内ニ付、江戸之御様子御聞被  
成度迎、

御所ニは前以より御待受之由、

一晦日おふち様并玉島朝五ツ過より参 内ニ而、翌晝八  
ツ時過迄段々御咄有之、我もくくと御寄合之由、

一晦日夜土佐守宿番ニ而、

御所御鎖口之内ニ夕方より相詰、何欵之様子窃ニ相伺  
居候処、京・江戸御相談ニ相成候向とは都而相違いた  
し居、以之外成御事ニ而、至極御不都合、

御見送之御局様其外、御広敷之末ニ被召置、関東之女  
中方何も引受、

宮様江御付人も同様之向ニ而、何一ツ

宮様江申上候事も出来不申、

御言葉を被下候儀も出来不申由、  
一橋本様は

宮様之御様子等日々御伺被成、

御所江御申上之筈候処、御一間を置、御簾之内より

御言葉計ニ而、御内咄も難被遊、双方ニは

宮様御付御用人相詰居、日々

御機嫌御伺而已ニ而、何様御申披被成候而も、関東江

被為入候上は、寄易 其御方様方は

御対顔不相成と之事之由、橋本様ニも御当惑ニ而、猶

又勝光院殿江御逢被成候而、右之趣御咄有之候得共、

是は急度不相成旨被仰、誠御込り被成候由、

一 弥二月十一日、表向 御婚姻之旨被 仰出候由、奥向

計江被仰渡、未表方江は不被仰渡候由、

一 右 御婚姻被為濟候上ニ而御見送り、宰相典侍様始御

帰京、橋本様并中山撰津守も帰京之由、

一 右之向帰京之上は太体之様子相分り可申哉と申事之由

一 宰相典侍様其外御広敷之末江被召置、橋本様・中山撰

津守は御用屋敷江被召置候事ニ而、奥向之御様子も分

り兼可申哉、橋本様は格別成御訳柄ニ而被召付候処、

前書之通何も被仰上候廉無之、頓と無申訳と之御咄ニ

御座候由、

和宮様御腹 橋本宰相様御妹

上藤 観行院様

土御門家御娘

おふち様

外四人 少進

御乳人 御年寄

玉島 御中藤

六人 御小姓

両人 御次衆

四人

右和宮様江御付人ニ而被差越候、江戸表ニ而は御広敷

江被罷居候得共、江戸女中都而御用承居、右之向は御

用無之、却而心配之様子ニ御座候由、

御局

故庭田一位様御娘  
宰相典侍様

下藤

加茂銀杏新三位娘  
能登

御下モ

三仲間之内  
むめ

おちや

まつ江

和宮様御叔父

観行院様御兄  
橋本宰相様

禁裏奥医師  
和宮様御七

中山撰津守

右人数は

御婚姻被為濟候上御帰京

一和宮様 御内婚被為濟候迄は、別而 御威勢強、江戸

女中方を眼下ニ御取扱被遊、流石ニ

宮様と御付之衆も難有狩被居候処、 御内婚後は兎角

関東之方御付被成、是亦打替候御事ニ而、全江戸女中

方より教上候事ニも御座候半と申事之由御座候、

一関東之御威勢中々以難尽申、

京都よりは何も御遠慮被遊候向ニ御座候由、実以

仙洞御所之被成方之由、

一右通

宮様ニも関東風ニ御成被成候へ、

公武御合体と申向も御座候得共、兎角表裏之所も有之、

中々 御合体之所ニは至間敷と之事御座候、

一右通彼是之儀、都而殿下と若州侯之由、京地より掛而

御心配有之、是非

御合体有之、穩ニ不相成候而不叶事と、折角御働之

由、

一中山撰津守事江戸江着之上、 公義奥医師格ニ被仰付

候由、

禁裏之奥い師を関東之奥い師格ニ被仰付候儀、甚以不

相当ニ而心外之由、

一右撰津守事、老ケ年ニ三十人扶持ニ金五十兩被下候趣御達有之、別而怡居申候処、於京地は家来一人・御栗箱持一人ニ而出勤いたし候儀御座候処、江戸表ニ而は乗物ニ而出勤、家来兩人・中柄・草履取・栗箱持・挾箱・合羽籠手人七人も入用、駕籠人足四人召抱置不申候而は、急ニ被召候節は不都合ニ付、誠存外成物入多、中々右之宛行ニ而足合不申候由、最初は難有と悦候処、後ニは案外之次第ニ而、却而迷惑之由御座候、

一橋本様御事、

和宮様御下向ニ付、諸御道具掛被仰付、諸御取入物は都而御見分之上、御用ニ相成事候処、江戸表ニ而は不依何品、倍增之代銀為書出、弘方有之事候間、爰元ニ而も其通取扱候様、御道具掛之是社御蔭と勝光院殿類ニ進めニ而御座候得共、其儀は難取計御断被成候由、是非其通被成候様ニ被仰聞、諸品倍增之売上書為致差出候様被仰聞候由ニ而、追々差出、勘使・買物使方江差廻相成候得は、速ニ何程ニ而も弘方相成申候由、橋

本様ニも最初掛念之訳も有之、終ニは勝光院殿之差凶ニ而欲ニ御迷被成、此比ニ至り売上人より及露頭、売上人も迷惑いたし居候由、

一御法事ニ付、二月四日

御所清涼殿江出、

御焼香御導師梶井宮様ニ而、叡山派僧都而罷出、

和宮様御代香も被為濟、同六日泉涌寺ニ而右御同断被為濟候由、

一右通 御代香被為濟候上は、

和宮様御上京之儀は御六か敷、当秋亦是来春なと追送り、終ニは御延引切と申事御座候、

一右御代香ニ

宮様御付之御方々を能社御登セ有之候と申事之由、

一右通之次第ニ而何分 京都を輕蔑被成候筋ニ付、往々

御合体之程六か敷御模様之旨 御所之噂之由御座候、

一右ニ付此節迄は

主上之 叡慮之程未奉伺候ニ付、此等之儀は橋本家其

外御帰之上、窃可申通旨内々承候付、追而可申上候、  
一全体

和宮様御事は、近衛大納言様江被遣候筈之処、故  
維字心院様御遺言ニ而、尾州御姫様御貰受之御内約相  
成居候間、御断被仰上候ニ付、

有栖川宮様江 御縁与被仰出置候由、然処関東江 御  
縁与相成、尾州御姫様は井伊掃部頭様江縁与相成候段  
井伊様より 近衛様江為御知有之、御違約相成候哉、

内々尾州様江 御尋相成候処、公辺江対し諸事御遠  
慮ニ而、近衛様御方は御断之積、左候へ、右之御妹  
様有之、其御方を御貰受之筋、段々御世話申上候向も  
有之候得共、是は極内之噂ニは、公辺御養女ニ而

有栖川宮様江被為入候御内約欵之由、未疋とは難分候  
得共、右等之様子ニ相聞得候旨、右は竹腰兵部少輔殿  
之計之由、近衛様御方ニ而も御機嫌不宜、此御方

様よりは非御貰受被遊度 思召之由、極内承知仕候、  
一近衛様江兼而若州侯も御心易、右之趣等被成御承知、

其儀は別而不人情之御取扱とて、私よりも折角御取持  
申上候間、是非 此御方様より御貰受之筋被成度被仰  
上候由、

右之通承得、亦是書状を以申越候付、此段申上候、  
猶追々可申上候、以上、

戊二月十日

右大坂永井清左衛門方より之聞合書

一当正月朔日例歳之通、南都

春日社江御供物を受台江盛上候に、如何様ニいたし候  
而も盛上ケ不相調、甚不審ニ存、社人も大概ニ取締置  
備置申候由、翌二日朝 御神供備方ニ社務罷出候処、  
御内陣ニ而別而音高ク石類ニ而も落候哉ニ相響候ニ付

社人共打寄早速御扉を開見候処、  
御神体御鏡央より下割れ落有之、一統相驚仰天仕候由、  
尤内々ニ而召置候得共、其假ニ而も不相成、終ニは奏

聞ニ相成、一七日之御神楽被 仰付と之御事ニ御座候  
由、未御法事等ニ而も其所迄は不参候得共、藤家之宗

廟ニ而御一統御慎之由、右は当時藤家ニ而は、御嫡家

は、陽明家近衛様、御二男家は、陶化家九条様ニ而、央よ

り下ニ而割落候ニ付而は、陶化家ニ何そ厄之起る儀

ニ而も可有之哉之噂ニ而、誠不容易大變、往古常陸鹿

島明神より御移之節之、御神体之由、於

御所も深、御慎も被為在候由、未極内々之御取扱ニ御

座候由、

右之趣蔭山伊勢介より内々承候付、申上候、以上、

戊二月十日

一 関白様御参

内之節、御供廻り之外ニ百五十人程も前後ニ取締參り

候由、右は酒井雅楽頭様御方江御頼相成、守衛方之人

数罷出候由ニ御座候、

但酒井候は九条様御統柄ニ而御座候、

一 酒井若狭守様右同断、亦は脇方江御越之節も、前後百

人計も参り申候由、其外道路に小店等の買入候姿ニ而、

諸所ニ多人数相集居申候由、御通行濟ニは追々罷帰候

由、

一 右御同人様事、陣所之外地面御拝領有之候由ニ而、別

段ニ御住居向立派ニ出来上り申候由、元来若狭守様ニ

は御妾腹ニ而、京都ニ而御出生之由、

王城を何々迄も守護可仕、最早帰府は不相望、都之土

ニ可相成迎、御隠居所御出来之由、関白様其外伝奏方

ニ而、別而評判宜御座候由、

一 大坂御城代松平伯耆守様町奉行所江公事聞ニ御越、亦

は仏參等之節、御供廻り別而相重、其外前後ニも差越

候由、御駕籠之脇劍筒五挺ツ、左右ニ而十挺、尤西洋

流ニ而は無御座由、皆和筒ニ鑓を仕掛有之、且陸尺銘

々八角之檉棒を持、皆筋金入之由、駕之跡先ニも手替

り之者同様ニ而參候由、是は去ル十五日、江戸騒動之

一件相聞得候而より之事之由、出逢候人之咄之由承得

申候、

右乍序奉申上候、以上、

二月十日

一 禁裏御奥医師西尾土佐守方江二夜止宿仕、緩々世間咄

等仕居候処、彼方より申出し候ニ付、追々承申候処、

別紙之通御座候、左候而 近衛様御用人蔭山伊勢介方

江も二夜止宿仕承得候成行も同様御座候ニ付、別紙江

書載置申候通御座候、猶亦伊勢介同役林日向介方江も

差越承申候処、皆々同様之向御座候、乍然伊勢介方ニ

而は、若州侯は悪クハ不申候得共、関白様事は一向不

宜風聞ニ御座候、土佐守方ニ而は、関白様・若州侯も

宜キ方ニは不申居候儀ニ御座候、土佐守方ニ而は追々

内密之事可相分候付、窃ニ可申越と之事御座候ニ付、

追々申上候様可仕候、別紙三通相添此段申上候、以上、

戌二月十日

永井清左衛門

文書原寸 縦一六・五糎 横七一・九糎

三 鹿児島ニ於テ真木和泉ヨリ久光公ヘノ和

漢文両様ノ上書

草案共四通

迅速出兵発駕ト義挙方策

一前以 奏問可致置件々

。三神器 御手近ニ被召置、何そ手輕箱ニ被為入、義

徒之内より負担可致事、

。御子宮様方御膝元被為召呼候様之事、

。内親王并准后様一同御出ニ相成候様御工夫之事、

。御重宝之品小長持様之物ニ入込候様御工夫之事、

。可然堂上当直有之度候事、

一 三百人御所ニ馳参、三百人二条ニ取掛可申候事、

一 御所ニ馳参可申人数之内式百七十人二門打破り、直ニ

公家門より打入、五十人二品親王盗出、式十人宛四門

打破り、暫時警固致し、公家衆之外入込申間敷候、百

人ニ而御支度差急ぎ、上様方肩輿ニ而御忍岳ニ引率

可致、余り式百人御所警固、公家衆皆集、夜中募候人

数参り候上ニ而 鸞輿御行列形之如く相揃御登岳可有

之事、

一 二条ニ取掛候三百人之内五十人、若州を襲可申、式十

人宛二手ニ而御付兩人を門前ニ要し刺殺、三十人之者

五人宛六ヶ所ニ馳廻り放火、且所々之鐘を撞き与力を刺殺し、其馬を盜取、方々高声ニ而此度 勅諭ニ而關東之逆賊打取可申之為、西国大名打入候、京中ニ而角夫ハ勿論町人ニ至迄志有之者ハ、只今 御所ニ馳集り御差図を受可申、恩賞ハ望ニ可任と云触可申、尤角夫共出候者ニ直ニ申付、寺々之鐘つかセ可申事、

一百八十人無二無三ニ条城ニ乗入、番士討取可申、尤逃去候者追打致間敷候、

一条城門番所ニ最初火器、擲入放火可致候事、

一若州門右同様之事、

一乘馬ハ不差置乗取可申事、

一京地警固薩国之外勢州・讚州等ニは直ニ御文箱ニ而中將卿より、此度

勅諭ニ而西国大名一統關東之逆徒打取可申為ニ打入候間、警固之人数一同繰出し、大津口・伏見口・丹波口ニ罷越、逆徒同様之者ハ愾而御手当承り居候者ニ而も差留可申旨、地下官人を使者として可申渡候事、

但勢ハ大津口、讚ハ伏見口と申様部署致し可申付候番衆并与力様之者ハ出京候者ハ構江ニ不及候事、

一条城乗取候上ニ而直ニ彦国陣所ニ向放火致し、遠卷ニ而戰爭ハ不用、逃去候様之術ニ可致事、

文書原寸 縦二六・七横 横三八・八

謹按、神州之衰、於斯為極矣、方今親王・公卿之家有一百五十焉、侯伯之家有三百焉、自大夫士至農工商賈、大都有二千五百万口焉、概而觀之、得称人者有幾人耶、無一人也、夷狄之輕侮乎我宜矣、其不逞吞噬為幸矣、今英雄之慨然奮起、而上率

天子之明詔、下率草之義勇、而拋天下之形勝、以拳義亦於斯為時矣、明公蓋有見于此、乃排俗論、退小人、納謙議而不挾当否、進君子而不挾貴賤、將不日而發、而一國士民之衆、無一人有枝梧之者、而義氣之振、反有不可防焉、遠在筑肥之間、而願付驥尾者、亦有不可防焉、此蓋明公見時之驗也、詩曰、一日不見如三秋、明公將發而未

発、乃其士民之振者、願付驥尾者、翹首企跂、一日三秋、  
俟而不待、將不堪其憂也、況

主上之英烈、自即位之始至今日、下 詔數矣、而不直無  
承之、戾之不一、而至逆鱗不亦鮮矣、今聞明公之舉、而  
俟之亦必矣、

主上之聖德、雖有異乎人、其於人情、未嘗不同也、然則  
其俟之不待、而不堪其憂者、亦何異哉、若使

主上有此憂、則明公忠義之心、亦將有堪大憂矣、方今天  
下無人彼奸猾者、亦非北条足利之比、雖然、奸猾為事、

莫所忌憚、而常出乎君子之所不慮表、彼万一先乎我而発、  
則所謂我之時者、反為彼之時也、此保臣之所以為明公眷

々也、兵法曰、兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、  
願明公察旃、

二月念九作于鹿兒島城下

文書原寸 縦二六・七糎 横一八・八糎

一三 久光公宗家復帰ニ関スル古実調草案

但前文欠ク

御情義

御斟酌之上、越前家御家督又次郎様江被 仰出周防様江

は本来之御子様ニ而、重富御棲居之所ヲ以、屹と

御会釈被

遊度

思召ニ付、名義中否之所吟味仕、極内可申上趣承知仕候

誠ニ以無

御拋

御情合、

御国家之 御大礼不容易御儀、古今之事實典故勘校仕候

処、大略左之通御座候、

儀礼喪服令

孟子舜条并註

漢宣帝 漢哀帝 後漢光武

宋英宗濮議

右一条馬司光呂晦大 歐陽修諸彦議論斟酌、歐陽修服

可降、父母之名不可改、義ニ基キ

明興獻帝

右数条斟酌、然後ニ

本朝ニ於ては

文武天皇

御実父様草壁皇子岡宮天皇と

御追尊

光仁天皇

御実父様施基皇子春日宮天皇と

御追尊御座候、右は

御世統様御同様之会釈ニ而、

大統之名義ヲ害し候、訳而典故ニ難仕候得共、是は

御孝道之

御手厚より出候

御過と奉存候、右旁致斟酌、御情義之間程篤と勘考仕候

処、至当之習論と奉存候得共、乍恐表立ハ

御会釈は

御正統様江被

遊 御差別、

御家よりは 御子様

御前よりは

御実父様と

御唱被遊候、越前家御家督之義ハ又次郎様も被 仰出、

二之丸ニ而も御棲居相成候ハ、名義

御情合共ニ可被為揃儀と奉存候得共、無御扱

御訳合被為

在候ハ、御棲居之義ハ重富ニ而も名義ニ害申候義は有

御座間敷奉存候、

文書原寸 縦一三・五糎 横一五八・五糎

180 近衛忠房卿より島津和泉殿へ

内勅降下困難の件

(包紙ウツ書)  
極密揃ニ返納候事、

島津中将殿 忠房

ノ

┌

書取ニテ内密巨細申入候、勅誼願之義ニ付段々熟考心配  
 仕、勿論不打算、去ル廿七日ニ參 内正親町三条江内談  
 ニ及候へ共、何分辛酉御祈於内侍所廿七八九三ヶ夜御神  
 楽被行候御神事中故、他事之義ハ言上モ難成日合、仍空  
 敷退朝ニ及候、去ル朔日又候參 内仕候へ共、折悪敷正親  
 町三条依所勞被引籠、談合ニ不能、其後度々參朝仕候乍  
 事、出仕モ無空敷一兩日ハ熟考心配已之仕合、其後正親  
 町三条義出仕被致、段々心配内談ニ及候後、密々正親町  
 三条言上ニ被及候処、何分ニ茂不容易義、其上当節御扱  
 無御次第ト相成、

和宮御縁約御整ト相成、頃日御入城も可被遊御時節ト相  
 成候御次第柄ニテ、最初御縁組被 仰出候節、各之上書  
 之内ニ茂一条左府公初深被申立候義ハ、此御時節ニ応じ  
 弥夷賊退散、兼々之被安

叡慮候様ノ所置ニ趣候様、関東江被 仰立候様達而言上  
 モ在之、且元来

主上ニ茂其辺厚被 思食候御事ニ而、今度以 和宮并宰  
 相典侍局大樹公江厚御伝言ニ茂、

宮御縁組之義ハ御望ミ通りニ相成候義、此上ハ奉初 天  
 照皇太神宮ヲ皇祖御代々江被対、且於関東ハ東照宮江被  
 対御不忠御不孝ニ不成候様夷賊ヲ退ケ、皇国安全・公武  
 御一貫之所置ニ精々改革可在様、厚 叡念之御趣意共具  
 ニ被 仰含候辺モ被為在候処、未如何御返答可被申上哉  
 モ難計、仍唯今之処勅誼被出候而ハ二道ノ御趣意ニ茂被  
 為当候御事故、迫も唯今ハ難被出、先当節関東之所置振  
 如何可相成哉、俗ニ申高見ヨリ御見物ト申御趣意ニテ、  
 自然從関東暴政ヲ行候節ニハ、格別当節ニテハ御縁組辺  
 も被為濟、御一貫之御趣意、且夷賊之義ハ速ニ被退、皇  
 国安全之良策可在様被 仰立中故、旁外道へ勅誼ハ難被  
 出御模様ニ伺取候、且故中将殿誠実之御趣意ヲ被統、島津  
 和泉ニ茂専誠忠之程末頼敷被 思食候 御沙汰、内々伺

取レ候事、

且此義、和泉御一分限り深被 相舎、先他江不洩様偏  
ニ御頼申入候事、

文書原寸 縦 一六・二纏 包紙原寸 縦二七纏  
横 一三五・七纏 横四〇纏

二四 島津登ヨリ堀次郎へ

堀、江戸出発ニ付面会要談ノ件

(封紙ウツ書)  
一 堀次郎様  
当用

島津登

尚々先刻汾陽より入来品々、承る趣共御座候、

既ニ明日は御出立ニ付而は、御取込御察申入候、先刻は  
御見舞被下、忝奉存候、御礼申上候、扱あまり度々御面  
働之至奉存候得共、今晚何時ニ而も、明朝まで之間、一  
刻御出被下度、無抛御口答申上置度儀共御座候間、只今  
ニ相成、不勘弁ながら御願申上候、以上、

三月四日

文書原寸 縦一六纏 横三三纏

二五 久光公御首途ニ付御内輪御次第

(包紙ウツ書)  
一 御首途付御内輪御次第  
(封紙ウツ書)  
一 御首途付御内輪御次第

明九日

御名代ニ而就

御首途御内輪御次第御手当

来成院  
一 稻荷社  
亀之甲  
一 稻荷社

御名代  
小松帯刀

一 御庭諸社江茂

御名代

一 於 御居間

御熨斗

御茶

御盃

御押

御銚子

一 御名代之御家老江御盃被下

御肴被下之、畢而大奥江

御入於大奥

御惣方様江御寄合

一 御熨斗

一 御茶

一 式御三献

一 長柄之御銚子

御加

一 御雜煮

一 御吸物御掛盃

一 御銚子

一 御肴

一 御銚子

一 御盃

一 御押

一 御銚子

一 御盃事

一 御菓子

一 御茶

以上、

文書原寸 縦一八・七糎  
横 八五糎

包紙原寸 縦二九・五糎  
横 三七糎

二三 久光公御上洛発途ニ付御次第

(封紙ウラ書)  
「御発駕ニ付御次第」

(朱)  
一二九大奥御書院江

御着座

御熨斗白木三方

御茶

式御三献

長柄之御銚子

御加

御雜煮

御吸物御掛盃

御銚子

御肴

御銚子

御盃土器白木三方

御押右同

御銚子

一 太守様

典姫様二丸江被為

入御対顔

御熨斗

御茶

御煙草盆

一 御盃事

一 御料理二汁五菜

但周防殿・楽水殿・図書殿  
英之進殿并御子様方御寄合

御台引

御引肴 共引年寄

御吸物

御肴

御菓子 二 通

御後段

御吸物

御肴

御銚子

御茶

一 御庭御堂社江

御参詣御盛塩  
御神酒

右畢而

御休息所江

御着座

御熨斗

御茶

二丸

御休息所江

御出座

島津岩松殿儀幼少故相除、

御家老

若年寄

大目付

右御家老は三之間上御敷居より三疊目、若年寄・大目付は同四疊目江一列ツ、罷出

御目見、御側御用人御取合有而退座、

一御堯駕屏重御門

御出

一太守様御書院迄被遊

御送候、

島津周防殿(久光)  
島津讚岐殿(實政)  
島津安芸殿(忠敬)  
島津凶書殿(久治)  
島津英之進殿(忠敏)

右二之間江一同出座、被着座

御目見恐悦被申上之、御家老御取合

御意有之、又御取合有而被退座、

但

島津周防殿  
島津讚岐殿  
島津安芸殿  
島津凶書殿  
島津英之進殿

御家老

右屏重御門外江被罷出

若年寄  
大目付

月番  
御家老

月番  
若年寄

月番  
大目付

御側御用人

御側役

奥向人数

右御書院三之間江相詰、

以上、

文書原寸 縦一七・五糎 横八八・三糎

一冊 小松帯刀ヨリ堀次郎へ

諸方引合等いたし候趣は、追々相聞得候之処、佐土原江

茂掛合之趣有之由ニ而、態々彼御方御家老御当地迄被差越、実否聞糺之趣有之、

上々様ニ茂別而御不都合被 思召上候、今形被召置候而は、詰り御難問到来は案中之事ニ而、言語道断之次第ニ候、右は出立前茂内達之趣有之、諸方引合等一切不致様、堅申趣有之候処、汲受も不致、右時宜驚入事ニ候、仍而表向御家老衆より御問合相成筋、内々相決候得共、左候而は未然発露之懸念も有之候付、拙者より御方迄及御懸合候条、登殿江被相同、早々御下之方之儀可被取計候、陸地ニ而は旁懸念之訳茂有之候付、当分居合之船有之候ハ、右江乗せ付、被差下候様可被取計、万一居船無之候ハ、着船迄之間、御方賢慮を以何となく被宥置、着船候ハ、直ニ御乗せ付被成候様、旁御熟考之上、宜被取計候、此段極々御内用を以申達致候条、可被得其意候、頓首、

三月十六日

小松帯刀

堀次郎殿

文書原寸 縦一五・六糎 横一一・五糎

二聖 久光公発駕ノ吉日吉時ノ卜定

(包紙ウツ書)  
一御首途

御発駕

吉日

一三月朔日 巳刻

一同月三日 午刻

一同月六日 午刻

右

御首途

一三月九日 午刻

一同月十三日 巳刻

一同月十六日 巳刻

右

御発駕

右之通吉日吉時相撰申上候、以上、

御曆者勤

二月十八日

水間喜藤太

文書原寸(折紙)

縦一六・一 種

包紙原寸

縦二八・五 種

横四六・五 種

横四一・五 種

一真木和泉入薩中ノ詩歌

阿久根にて

旅衣なくさめかねてさつまかた

阿久根の浦にたふてをそひらふ

真帆片帆ゆきかふ船のめうがしも

あなおもしろの浦の気色や

国沿南溟山岳崇 人資忠義貴英雄 封疆一百二城裡 認

得 天孫創業風

さつまの海あまのたく火のかよりとハ

おもひなからもおとろかれけり

桜島をめぐりて福山の溱にあかり、通山といふ所まで

行けるに又立かへりて

春なれハことわりなれと幾日へし

かすむさくらのしまめぐりして

書懷

匈胥出発意忠酸 客青三句恥素饗 跛鼈豈無千里志

霜禱河投一枝安 天公不佑憂時切 人事反卻得便難

夢焉枕頭驚座起 風燈閃々白龍寒 白龍者朝籍別名

旅衣おもはぬかたに日数へて

いそく心そまつ迷ひける

頭戴秋霜無所為 如会千歳一時期 冥頑不待人而晒

天下独行鉄面皮

擬家懷大島某

同郷同世今同国 一夜無由従下風 咫尺門閭千里雨 数

行涕儀百花散 亡人素志君聖議 仙詠精認夢空通 不得

寸義言情事 聊將詩句露夜哀

箏をかへすとて

琴の糸の心ほそさにすかゝきも

かつかきまよふ旅衣哉

偶成

閑庭鶯去易殘露 茗荷三句歎井蛙 任地華海春潮晚 已  
後嵐山第一花

保臣

三月廿八日

文書原寸 縦一七・五種 横二一六種

一三〇 久光公二丸住居ニ付茂久公ヨリ家老中へ

ノ諭書

久光公上洛ニ付藩士へノ諭書

家老中江

和泉様御儀、何篇是迄国政向御内談申上、且先度

公義より御内沙汰之趣も有之、我等実ニ多幸之至リニ候、

就而は此度二丸江

御住被遊候付、猶又表向御介助奉願置候間、以来

仰出等弥蔽重相守候様可取計事、

戌三月

和泉様御儀何篇御国政向

御内談被

仰進、且先度

公義より御内沙汰之趣も被為 在

御幸ニ被

思召上候、就而は此度二丸江

御住被遊候付、猶又表向御介助之儀

御願被

仰進置候間、以来

仰出等弥嚴重相守候様も取計旨御別紙之通

御筆を以被

仰出、誠に難有御事候条、此旨謹而被奉承知

仰出之趣聊無緩疎誠実ニ被相守、家来末々迄も急度可被

申付候、

右之通組中江可被申渡条、

文久二年壬戌

三月

筑後

大蔵

撰津

但馬

式部

去ル午年外夷通商御免許以来天下之人心致紛乱、各国有志と相唱候者共尊

王攘夷を名とし、慷慨激烈之説を以四方ニ交を結び、不容易企をいたし候哉ニ相聞得候、当国ニも右之者共と私

ニ相交、書翰往復等致候者有之哉ニ候、畢竟勤

王之志ニ感激いたし候処より右次第ニ及候筈ニは候得共

浪人輕卒之所業ニ致同意候而は当国之禍害は勿論

皇国一統之騒乱を醸出し、終ニは群雄割拠之形勢ニ至り

却而外夷之術中ニ陥り、不忠不孝無此上義ニ而、別而不

輕事と存候、拙者ニも

公武之御為聊所存之趣有之候付、以来当国之面々右様之

者共と一切不相交、命令ニ従ひ周旋有之度事ニ候、若又

私之義を重んじ絶交いたし難き者共有筋ニ申出候は、其

訳ニ応し何様共可致所置候、尤此節之道中筋、且江戸滯

留中右体之者共致推參候共私ニ面会致間敷、乍然無拋訊ニ依り致応接候共敢て不致儀論、其筋之者江談判いたし候様返答可致、乍此上不勘弁之族於有之は天下国家之為実以不可然事候条、無遠慮罪科可申付候事、

戊三月

御名乗御判

外夷通商御免許以来天下之人心致紛乱、各国有志と相唱候者共四方ニ交を結び、不容易企いたし候哉ニ被

聞召上、御当国ニも右之者共と私ニ相交り書翰往復等致候者有之哉ニ付、以来一切不相交、勿論此節御道中并江戸御滞留中右体之者共致推參候共私ニ面会不致、無拋訊ニ依り応接いたし候共、其筋之者江談判いたし候様返答可致乍此上不勘弁之族有之候は無遠慮罪科可被仰付旨御別紙之通委曲

和泉様御筆を以被

仰出、何共奉恐入事ニ候、右付而は誠以不容易事候付被仰出之趣誠実ニ相貫、聊異心有之間鋪候、乍此上万々一心得違之者も有之候は、不差置御取扱可被仰付候、

右之通組中江可被申渡候、

三月

筑後

大蔵

撰津

但馬

式部

文書原寸 縦一四・三糎 横三七九糎

○三頁 茂久公ヨリ久光公ニノ丸御住居ノ通達

○四頁 久光公東上ニ際シ藩士ヘノ訓諭

○五頁 久光公ヨリ藩士ヘノ諭達

三 久光公ニ之丸居住ニ付茂久公ヨリ家老中

へ再出

家老中ヨリノ令達共

二通

一五二ノ一

家老中江

和泉様御儀、何篇是迄国政向御内談申上、且先度

公義より御内沙汰之趣茂有之、我等実ニ多幸之至リニ候

就而は此度二丸江

御住被遊候付、猶又表向御介助奉願置候間、以来仰出等

弥蔽重相守候様可取計事、

戌三月

文書原寸 縦一六・三糎 横三六・三糎

一五二ノ二

和泉様御儀、何篇

御国政向

御内談被

仰進、且先度

公義より御内沙汰之趣茂被為 在

御幸ニ被

思召上候、就而は此度二丸江

御住被遊候付、猶又表向御介助之儀

御願被 仰進置候間、以来 仰出等弥蔽重相守候様可被

計旨、御別紙之通

御筆を以被

仰出、誠以難有御事候条、此旨謹而奉承知

仰出候趣聊無緩疎、誠実ニ相守候様無格江申渡、諸組与

力、諸郷、私領江可被申渡旨、向々江可申渡候、

三月

筑後

大蔵

摂津

但馬

式部

文書原寸 縦一六・三糎 横六五糎

一五三 久光公ヨリ家老ヘノ諭書

当時世上之状態云々

家老ヨリノ令達共

二通

一五二ノ一

去ル午年、外夷通商御免許以来、天下之人心致紛乱、各

国有志と相唱候者共尊

王攘夷を名とし、慷慨激烈之説を以四方ニ交を結び、不容易企をいたし候哉ニ相聞得候、当国ニも右之者共と私ニ相交り、書翰往復等いたし候者有之哉ニ候、畢竟勤

王之志ニ感激いたし候処より、右次第ニ及候筈ニは候得共、浪人輕卒之所業ニ致同意候而は、当国之禍害ハ勿論皇国一統之騒乱を醸出し、終ニは群雄割拠之形勢ニ至り却而外夷術中ニ陥り、不忠不孝無此上義ニ而、別而不輕事と存候、拙者茂公武之御為聊所存之趣有之候付、以来当国之面々右様之者共と一切不相交命令ニ従ひ周旋有之度事ニ候、若又私之義を重し絶交いたし難き者は有筋ニ申出候ハ、其訳ニ応し何様共可致所置候、尤此節之道中筋且江戸滞留中、右体之者共致推參候共、私ニ面会致間敷、乍然無拋訳ニ依り致応接候ハ、敢而不致議論、其筋之者江談判いたし候様返答可致候、乍此上不勘弁之族於有之候ハ、天下国家之為実以不可然事候条、無遠慮罪科可申付事、

戌三月

文書原寸 縦一六・一糎 横二二七・二糎

御名乗御判

一五二ノ二

外夷通商御免許以来、天下之人心致紛乱、各国有志と相唱候者共四方ニ交を結び、不容易企いたし候哉ニ被

聞召上、御当国ニ茂右之者共と私ニ相交り書翰往復等致候者有之哉ニ付、以来一切不相交、勿論此節御道中并江戸御滞留中右体之者共致推參候共私ニ面会不致、無拋訳ニ依り致応接候共、其筋之者江談判いたし候様返答可致、乍此上不勘弁之族有之候は無遠慮罪科可被仰付旨、御別紙之通委曲  
和泉様御筆を以被

仰出、何共奉恐入事ニ候、右ニ付而は誠以不容易事候付被仰出候趣誠実ニ相貫、聊異心有之間敷候、乍此上万々一心得違之者も有之候ハ、不差置御取扱可被仰付候、此旨謹而奉承知、支配下、下役等江茂可申含候、

三月

筑後

大蔵

摂津

但馬

式部

文書原寸 縦一六・一種 横八六・一種

一五 久光公ヨリ藩士ヘノ諭書

再出外夷通商云々

家老ノ令達共

二通

一五三ノ一

拙者より書取を以申渡候事遠慮ニ相考候得共、当時世上之情態何欵不穩之趣相聞得候ニ付、不得已事先日被為相達事ニ候、其後猶又致熟考候処、畢竟上威之輕キ処より群下類を引ニ至り候儀ニ而、当主は勿論、於拙者茂心痛至極之事ニ候、士風沙汰之儀は此前より追々被仰出置、近比ニは再往申渡為相成事候得共、方今之模様ニ而は非常之変事到来候節致一和候処無覚束存候、

皇国ニ生れ候者誰ととも

王朝を尊ひ、夷狄を惡ミ候情意は有之管ニ候、若其志操無之者ハ禽獸同然之事ニ而別ニ勤

王家之誠忠派之と可申様更ニ無之事ニ候、然るニ右通之名目相唱候由、別而不可然事ニ候、殊ニ年若之面々容貌異様にして放恣之者共有之哉ニ候、是以先年より追々為被仰渡事候処、近比は其節とわ相變り候風儀と相成、弥以不宜次第ニ候、士は行跡律儀ニ廉潔を專としてこそ本意之事と存候、何程武文研究いたし候共言行不正、異様異風ニ而は武士とは被申間敷候、且郷士以下家来末々ニ至り候而は、右様之者共有之哉ニ而猶以不可然事候条、右之趣奉行・頭人能々相心得、支配下江丁寧ニ申諭、父兄又は同郷年長之者共より茂心得違無之様、屹と教誡有之度存候事、

戌三月

御名乗御判

文書原寸 縦一六・一種 横一一四・八種

一五三ノ二

當時之情態

和泉様被遊

御熟考、御筆を以御別紙之通被

仰出、乍恐御尤御事ニ候、右ニ付而は別而

御厚配被為

在候趣、何とも恐懼之至候、依之弥被 仰出候趣謹而奉

承知、以来夫々之分を相守、士風廉直ニ相行れ、一統一

和いたし奉安

尊慮候様誠実ニ可相励候、就中郷士以下末々者共ハ分限

ニ随ひ謹慎第一之事候条、聊超過之儀共曾而有之間敷候、

右之通謹而奉承知、支配下、下役等江茂屹と可被申含候、

三月

筑後

大蔵

撰津

但馬

式部

文書原寸 縦一六・四糎 横五八・五糎

一區 鹿兒島郡元村砂糖黍植付ニ関スル本払調書

(表紙) (墨印)

㊦

㊦

文久二年戊三月より同十二月迄

砂糖黍御植付方ニ付手入拵より煎仕廻迄本払一紙総帳

伊集院五右衛門

池田源左衛門

川口万次郎

本立

一錢五拾三貫弍百三拾五文 ㊦

金ニして六兩弍歩弍朱と錢弍百三拾五文 ㊦

兩ニ付八貫文替 ㊦

右奉行砂糖黍御植付地面開御普請方御入目料一紙総

払残りニ而戊五月七日本立、

戊三月九日

一金五拾兩 ㊦

錢ニして四百貫文 ㊦

兩ニ付八貫文替 ㊤

戌三月廿日

一金貳拾七兩貳歩 ㊤

錢ニして貳百貳拾貫文 ㊤

兩ニ付八貫文替 ㊤

戌四月朔日

一同三拾五兩 ㊤

錢ニして貳百八拾貫文 ㊤

兩ニ付同断 ㊤

戌五月十七日

一同貳拾兩

錢ニして百六拾貫文

兩ニ付同断

戌七月廿四日

一金三拾兩 ㊤

錢ニして貳百四拾貫文 ㊤

兩ニ付八貫文替 ㊤

戌八月十五日

一同三拾兩 ㊤

錢ニして貳百四拾貫文 ㊤

兩ニ付同断 ㊤

戌十月三日

一同三拾兩 ㊤

錢ニして貳百四拾貫文 ㊤

兩ニ付同断 ㊤

戌十一月十八日

一金三拾兩 ㊤

錢ニして貳百七拾貫文 ㊤

兩ニ付九貫文替 ㊤

一錢四貫三百拾貳文 ㊤

右卷行戌十一月十一日、金壹兩ニ付錢壹貫文ツ、直

増被仰渡、戌十月三日被渡置候金三拾兩之内四兩卷

歩式朱残り居、右江相掛増分として本立、

合錢貳千百七貫五百四拾七文、

右之私

一 錢貳百七拾八貫貳百文 ㊤

雜魚貳百拾四盃 ㊤

壹盃貳斗入ニ而壹貫三百文ツ、 ㊤

右 右行黍養用トして谷山和田村より御買入相成候、

一 錢貳貫五百文 ㊤

右 同断ニ付運賃分 ㊤

一 同拾八貫七百文 ㊤

四尺樽四本

内

三本 ㊤

壹本ニ付四貫八百文ツ、 ㊤

壹本 ㊤

四貫三百文 ㊤

右 右行養入用

一 錢三拾貳貫四百文 ㊤

煎返し四尺樽八本分 ㊤

壹本ニ付四貫四拾八文ツ、 ㊤

右 右行養用

一 同八貫四百文 ㊤

馬八拾四駄 ㊤

壹駄ニ付百文ツ、 ㊤

右 右行西田町より煎返し負届賃

一 同貳拾八貫八百貳拾六文 ㊤

右 右行養入用小屋壹軒調代 ㊤

一 錢八拾貳貫八百壹文 ㊤

黍苗拾五万八千九百七拾九本 ㊤

壹本ニ付五字ツ、 ㊤

右 右行垂水より御買入相成候、

一 同拾貫文 ㊤

右 黍苗積船五艘 ㊤

右 同断ニ付運賃分 ㊤

一 同貳拾壹貫三百七拾文 ㊤

黍苗三万貳千五拾七本 ㊤

百文ニ付百五拾本ツ、<sup>㊤</sup>

右老行新城より御買入相成候、

一錢貳貫五百文<sup>㊤</sup>

右黍苗積舟老艘<sup>㊤</sup>

右老行同断ニ付運賃分<sup>㊤</sup>

一同拾六貫八拾六文<sup>㊤</sup>

黍苗貳万四千百三拾五本<sup>㊤</sup>

百文ニ付百五拾本ツ、<sup>㊤</sup>

右老行華岡より御買入相成候、

一錢三貫文<sup>㊤</sup>

右黍苗積船老艘<sup>㊤</sup>

右老行同断ニ付運賃分<sup>㊤</sup>

一同四百九拾五文<sup>㊤</sup>

黍苗九百九拾三本<sup>㊤</sup>

老本ニ付四字九毛貳ツ、<sup>㊤</sup>

右老行牛根より御買入相成候、

一同百三拾貳文<sup>㊤</sup>

右老行同断黍苗運賃分<sup>㊤</sup>

一錢六拾老貫三百三拾七文<sup>㊤</sup>

黍苗九万貳千七本<sup>㊤</sup>

百文ニ付百五拾本ツ、<sup>㊤</sup>

右老行桜島より御買入相成候、

一同六貫文<sup>㊤</sup>

右老行同断黍苗運ちん分<sup>㊤</sup>

一同三百五拾貳貫七百貳拾老文<sup>㊤</sup>

油粕百三拾八占貳合七夕八才<sup>㊤</sup>

老占ニ付貳貫五百四拾八文七字九毛ツ、<sup>㊤</sup>

右老行養用として御買入相成候、

一錢四拾貫百三拾貳文<sup>㊤</sup>

日数三百老日<sup>㊤</sup>

老日ニ付百三拾貳文ツ、<sup>㊤</sup>

一同三拾五貫六百六拾四文<sup>㊤</sup>

日数貳百六拾七日半<sup>㊤</sup>

老日ニ付百三拾貳文ツ、<sup>㊤</sup>

右式行郡元村并谷山宇宿村黍番人賃分

一 錢拾三貫三百三拾式文 ㊤

馬糞四百俵 ㊤

沓俵ニ付三拾式文ツ、 ㊤

右沓行御厩より御買入相成候、

一同五拾式文 ㊤

右馬糞代御厩江上納ニ付掛り分 ㊤

一同式貫三百文 ㊤

明俵九拾式俵 ㊤

沓俵ニ付式拾四文四毛三ツ、 ㊤

一 錢四百拾六文 ㊤

俵繩式拾五房 ㊤

沓房ニ付拾六文ツ、 ㊤

右式行御厩江馬糞入用

一同式拾六貫六百六拾四文 ㊤

馬式百駄 ㊤

沓駄ニ付百三拾式文ツ、 ㊤

右沓行御厩より馬糞負届ちん分

一同老貫百六拾四文 ㊤

堅木七拾本 ㊤

沓本ニ付拾六文ツ、 ㊤

一 錢式百四拾八文 ㊤

小から竹式束 ㊤

沓束ニ付百式拾四文ツ、 ㊤

右式行番人小屋外廻垣用

一同四百七拾六文 ㊤

五部板四枚 ㊤

一 錢九百式文 ㊤

七部板沓間沓枚 ㊤

一同百拾六文 ㊤

棧六本 ㊤

沓本ニ付拾八文六字六毛ツ、 ㊤

一同百六拾四文 ㊤

三寸釘八拾本 ㊤

一同老貫四百文 ㊦

大工四人三合八才 ㊦

老人ニ付三百貳拾四文ツ、 ㊦

右五行日記所角行燈并棚付用

一錢三貫七百拾貳文 ㊦

種子油貳拾七盃 ㊦

老盃ニ付百三拾六文ツ、 ㊦

右老行日記所入用

一同拾八貫六百文 ㊦

疊新床四拾三枚 ㊦

老枚ニ付四百三拾老文貳字五毛ツ、調方より差代

込候 ㊦

一錢九貫五百八拾八文 ㊦

尺筵四束 ㊦

老束ニ付貳貫三百九拾四文ツ、 ㊦

一同六百文 ㊦

右同三枚 ㊦

老枚ニ付貳百文ツ、 ㊦

右三行日記所并番人小屋敷付用

一同貳百四拾八文 ㊦

棕呂繩貳房 ㊦

老房ニ付百貳拾四文ツ、 ㊦

右老行養丹荷結付用

一錢老貫八百八拾七文 ㊦

五寸打込釘五拾本 ㊦

掛目八百四拾目、百目ニ付貳百貳拾四文ツ、 ㊦

一同貳貫五百七拾五文 ㊦

柚子八人、四合老夕八才 ㊦

老人ニ付三百六文ツ、 ㊦

一同貳貫三百拾貳文 ㊦

野芝千百拾枚 ㊦

老枚ニ付貳文ツ、 ㊦

右三行山谷宇宿村水道調用

一錢百六拾四文 ㊦

三寸釘六拾四本 ㊤

右老行水車相損取繕用

一同老貫七百元 ㊤

溜桶式ツ ㊤

老ツニ付八百四拾八文ツ、 ㊤

右老行黍汁入用

一錢式百元 ㊤

洗物桶老ツ ㊤

右老行日記所入用

一同老貫六拾四文 ㊤

馬拾六駄 ㊤

老駄ニ付六拾四文ツ、 ㊤

右老行谷山宇宿村迄養負届ちん分

一同老貫式百元 ㊤

馬三疋釜土負 ㊤

老疋ニ付四百文ツ、 ㊤

右老行砂糖煎釜調用

一錢五貫四百年 ㊤

杣子拾七人、六合三夕三才 ㊤

老人ニ付三百六文ツ、 ㊤

一同式貫四百年 ㊤

木挽七人、八合三夕七才 ㊤

老人ニ付三百六文ツ、 ㊤

一同七貫文 ㊤

牛拾五疋 ㊤

老疋ニ付四百六拾四文ツ、 ㊤

右三行砂糖車木錦崎より取下シ用

一錢老貫文 ㊤

油おり八拾袋 ㊤

老袋ニ付拾式文ツ、 ㊤

右老行砂糖車付用

一同八貫八百年 ㊤

砂糖釜之釣金老間 ㊤

火棒老本 ㊤

砂糖へら 老本 ㊦

老文物貫四挺 ㊦

合掛目三貫式百目、百目ニ付式百七拾式文ツ、 ㊦

右三行水車小屋取繕用

一 錢 老貫七拾八文 ㊦

一 同 四貫八百文 ㊦

中斧 老本 ㊦

平木式拾四わ ㊦

一 同 九貫九百文 ㊦

老わニ付式百文ツ、 ㊦

砂糖釜之釣金 老間 ㊦

一 錢 九拾五文 ㊦

火棒 老本 ㊦

棧五本 ㊦

砂糖へら 老本 ㊦

老本ニ付拾九文ツ、 ㊦

合掛目三貫六百目、百目ニ付式百七拾式文ツ、 ㊦

一 同 老貫文 ㊦

一 同 老貫三百九拾老文 ㊦

四寸釘四百本 ㊦

八部板四枚 ㊦

百本ニ付式百四拾八文ツ、 ㊦

右老行水車より黍汁溜用之箱式ツ調用 ㊦

一 同 式百四拾八文 ㊦

一 錢 四百三拾六文 ㊦

三寸釘式百本 ㊦

四部板老間 ㊦

百本ニ付百式拾四文ツ、 ㊦

一 同 百文 ㊦

一 錢 三百七拾式文 ㊦

棧四本 ㊦

老寸五部釘五百本 ㊦

一 同 三百六拾四文 ㊦

百本ニ付七拾式文ツ、 ㊦

一同五百文 ㊤

卷寸五部釘六百本 ㊤

百本ニ付八拾文ツ、 ㊤

一同六百七拾式文 ㊤

六七寸廻唐竹九本 ㊤

卷本ニ付七拾式文ツ、 ㊤

一錢貳貫七百文 ㊤

屋ね大工八人、三合八才 ㊤

卷人ニ付三百式拾四文ツ、 ㊤

一同四百式拾四文 ㊤

竹釘七升五合 ㊤

卷升ニ付五拾四文五字ツ、 ㊤

右九行大風ニ付日記所并番人小屋取繕用

一同九百文 ㊤

白灰貳俵 ㊤

卷俵ニ付四百四拾八文ツ、 ㊤

一錢貳百四拾八文 ㊤

原良土貳斗 ㊤

卷升ニ付拾式文ツ、 ㊤

一同百文 ㊤

塩卷升 ㊤

右三行砂糖煎釜上土掛用 ㊤

一同卷貫六百元 ㊤

にれ木一切垂水より御買入代 ㊤

右卷行砂糖車方入用

一錢貳拾四貫八百九拾式文 ㊤

金輪車式切 ㊤

卷切ニ付拾貳貫四百四拾六文ツ、 ㊤

一同四拾五貫五百五拾式文 ㊤

金輪車四切 ㊤

卷切ニ付拾卷貫三百八拾五文ツ、 ㊤

右式行砂糖車用

一同貳拾七貫三百文 ㊤

三枚入鍋拾四枚 ㊤

壹枚ニ付壹貫九百四拾八文ツ、㊤

右壹行砂糖煎用

一錢壹貫四百拾六文 ㊤

雜柴八拾わ ㊤

壹わニ付拾七文ツ、 ㊤

一同八百九文 ㊤

打流竹式拾壹束 ㊤

壹束ニ付三拾七文ツ、 ㊤

一同九百三拾貳文 ㊤

井抗六拾四本 ㊤

壹本ニ付拾四文ツ、 ㊤

一錢六百四拾文 ㊤

柵竹拾壹束 ㊤

壹束ニ付五拾六文ツ、 ㊤

右四行水車江相掛用水井手闕用

一同壹貫七百四拾八文 ㊤

石切五人、七合壹夕五才 ㊤

壹人ニ付三百六文ツ、 ㊤

右壹行水車江相掛ル用水溝落調用

一同三百四拾八文 ㊤

熊手壹ツ ㊤

右壹行右落戸明立用

一錢壹貫貳百文 ㊤

鎌六刃 ㊤

壹刃ニ付貳百文ツ、 ㊤

右壹行黍刈用

一同五百文 ㊤

草器四ツ ㊤

壹ツニ付百貳拾四文ツ、 ㊤

右壹行黍汁こし用

一錢四貫五百文 ㊤

斤量壹竿 ㊤

右壹行砂糖入樽掛占用

一同百三拾貳文 ㊤

曲柄杓式本 ㊤

杓本ニ付六拾四文ツ、 ㊤

右杓行砂糖煎方入用

一同四貫六百元 ㊤

式尺五寸樽式本 ㊤

杓本ニ付貳貫三百文ツ、 ㊤

右杓行黍汁溜用

一錢老貫八百文 ㊤

油桶式本 ㊤

杓本ニ付九百文ツ、 ㊤

右杓行砂糖車より黍汁入用

一同老貫五百文 ㊤

丹荷三荷 ㊤

杓荷ニ付五百文ツ、 ㊤

右杓行黍汁入用

一錢三百文 ㊤

尺柄杓式本 ㊤

杓本ニ付百四拾八文ツ、 ㊤

右杓行砂糖汁扱用

一同百貳拾四文 ㊤

棕呂皮貳拾枚 ㊤

杓枚ニ付六文ツ、 ㊤

右杓行黍汁こし用

一錢老貫文 ㊤

焼印式ツ ㊤

杓ツニ付五百文ツ、 ㊤

右杓行砂糖樽押用

一同四百四拾八文 ㊤

蠟燭老斤 ㊤

右杓行砂糖煎方入用

一同老貫九百元 ㊤

鋤れん式ツ ㊤

杓ツニ付九百四拾八文ツ、 ㊤

右杓行水車より下溝筋砂揚用

一 錢九百四拾八文 ㊦

白灰貳俵 ㊦

老俵ニ付四百七拾貳文ツ、 ㊦

右老行砂糖製法用

一同五百四拾八文 ㊦

火かき老ツ ㊦

右老行砂糖煎釜方入用

一 錢六百元 ㊦

馬三駄 ㊦

老駄ニ付貳百文ツ、 ㊦

右老行金輪負届賃錢

一同四拾七貫文 ㊦

大工百四拾四人、六合老勺六才 ㊦

老人ニ付三百貳拾四文ツ、 ㊦

右老行砂糖車調用

一同七拾五貫九百文 ㊦

日記所番人貳百五拾三人 ㊦

老人ニ付三百文ツ、 ㊦

一 錢百八拾八貫四百四拾八文 ㊦

夫六百貳拾八人、老時 ㊦

老人ニ付三百文ツ、老時四拾八文ツ、休なし ㊦

一同四百拾五貫三百三拾貳文 ㊦

夫千六百六拾老人、貳時 ㊦

老人ニ付貳百四拾八文ツ、老時四拾文ツ、 ㊦

右貳行黍草取手入拵より砂糖煎仕廻迄

一 錢老貫貳百文 ㊦

弓張桃灯貳張 ㊦

老張ニ付六百文ツ、 ㊦

一同老貫百拾六文 ㊦

鉄茶家老ツ ㊦

右貳行日記所入用

一同貳拾四貫文 ㊦

砂糖樽六拾挺 ㊦

老挺ニ付四百文ツ、 ㊦

一 錢貳貫六百元 ㊤

大綱貳拾六房 ㊤

老房ニ付百文ツ、 ㊤

一同三百文 ㊤

半繩五房 ㊤

拾房ニ付六百文ツ、 ㊤

一同七百四拾八文 ㊤

素ふた拾五枚 ㊤

老枚ニ付四拾八文ツ、 ㊤

一 錢老貫四百年 ㊤

馬七疋 ㊤

老疋ニ付貳百文ツ、 ㊤

右老行砂糖樽并大綱類負届ちん分

合錢貳千貳拾五貫七百六拾四文

差引残り

八拾老貫七百七拾九文

右は鹿兒島郡元村并谷山宇宿村之内江砂糖黍御植付方ニ

付、草取并手入拵方より砂糖煎仕廻等迄御入目料一紙総  
右之通御座候、以上、

戊十二月

掛郡見廻

川口万次郎 ㊤

掛地方検者

池田源左衛門 ㊤

右同

伊集院五右衛門 ㊤

掛郡奉行

猿渡彦左衛門殿

東郷吉左衛門殿

冊子原寸 縦二八種 横二二種 二五枚

一 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ

久光公ノ近衛家訪問ノ件

〔付札〕  
四月八日

忠房公より

薄暑催云々、過日は堀治郎入来ニテ面謁、何カ関東之次第具ニ  
承云々、其方上洛候ハ、入来之事と待入候、中山尚之介、大  
久保市藏等ハ其方入来之義留置候得は、最早当時之模様ニ成行

候ハ、御上洛云々、何分即今穩便ニ御誠忠有度存候云々」

〔包紙ウツ書②〕  
島津和泉とのへ  
内密々

忠房

〔朱藏〕

〔付箋朱〕  
『壬戌四月八日』

〔包紙ウツ書①〕  
内々

乱書推覧

〔朱藏〕

〔封紙ウツ書〕  
内々

乱毫御免

忠房

尚以大久保市藏咄ニ、中山前中将より之条々承、甚々是ハ不人物無論之人ニ候也、

薄暑催候、弥平安令賀候、抑毎々御実情被申越、何茂珍重  
〳之事ニ候、過日は堀治郎入来ニ而面謁、何方関東之  
次第具ニ承、珍重〳之義と存候、其方上洛候ハ、入  
来之事と待入候、中山尚之介・大久保市藏等へハ、其方

入来之義留置候得共、最早当時之模様ニ成行候ハ、御

上洛候ハ、必御入来之様存候、尚面謁と待入存候事ニ候、

何分即今穩便ニ御誠忠有度存候、仍何も申入置度存候事、

四月八日

文書原寸(折紙)

縦一六・四糎  
横 四六糎

包紙原寸

縦 三二糎  
横四三・五糎 二枚

付札原寸

縦 二六糎  
横 七糎

○二 酒井所司代ヨリ議伝両奏へノ届書

一 酒井所司代ヨリ浪士鎮静ニ付朝廷へノ上

申

其他京師ニ於ケル風聞書

所司代 酒井様より御届等ニ付 御所向御達書写

頃日遠路之風説を承り候処、西国筋之浪人共多人數、兵  
庫大坂辺へ参り、彼是不容易暴論を唱候趣有之、尤支配  
国外之義ニ付、巨細之義ハ相分り兼候得共、全ハ虚説の  
ミニも有之間敷ヤ、就而は官家之方々諸藩士等へ御直談

之義ハ、兼而御規則も有之候事御承知之義トハ奉存候へ共、万一御行違之廉も出来仕、自然去ル午年八月八日之覆轍を踏候様之義有之候而ハ、以外御次第ニ可至と、深々御案思申上、不堪苦心内々申上候、既に此度格別之御縁組も被為在、公武之御中御一和之上之御一和ニ被為在候処、唯今聊ニ而も御異論之筋相生候てハ、実以公武之御為不宜候義ハ勿論、東西諸臣ニ有之候而も、深々恐入可奉存候事ニ御座候、必々卒尔之御所置無之様仕度奉存候、此度之浮浪之輩、暴戾之説を唱候由ニ候得共、奉対天朝動干戈候様之義ハ、普天之下率土之浜如何様之卑賤之者といへとも、人心之固有する処、決而有之間敷義ニ御座候間、必々御驚動被遊間敷奉存候、乍併反逆野心之徒有之、万々一於玉城地動干戈、腦宸襟候者於有之ハ、私所司代役相動候限りハ、若州一国之力を尽候ハ勿論、諸家御警衛之者共を指揮いたし、誅伐可仕候間、御安心被遊、必々御輕易之御取計無之様仕度奉存候、全く公武之御為尽微忠候義ニ御座候、

右之段決而表立申上候義ニハ無御座候へ共、全く御為筋を存上、御兩役限り内々申上置候義ニ御座候事、

四月十日

別紙之通酒井若狭守より兩役迄申越候間、為御心得入見參候、尤武家御直談有之間敷ハ御規定之事故、申迄も無之候へ共、尚又為念申入候、且右ニ付而ハ自然御役向先ニ而、武辺者御出逢、夫より御親御咄合之義出来候而ハ不宜候間、御心得も可有之欵、吃度(吃)なく可申入候旨、関白殿被命候事、

夷狄月々猖獗、御国威日々辺刃之儀、深く被惱

宸慮、段々関東御往復有之、終ニハ八ヶ年乃至十ヶ年内には、是非々々以応接征伐之内何れも必可及拒絶旨言上、依之暫

御猶予有之、右期限に付、断然可有掃攘ニ付、武備完実海軍訓練は勿論之事、第一全国人心一同に不相成候而は蛮夷正倒せられかたき義ニ付、先々江開國中一和之土台深

度叡慮に付、願之まゝ、以

皇妹、大樹ニ被配偶、

公武御合体を宇内ニ被表、御深重之

聖慮遐置に布告し、海内招如御国威更張之機会不相成様、

<sup>(叱)</sup>吃と可通達、略旨被

思召候事、

四月廿六日付京都より来状、五月四日朝相達、

右拔書也、

一御台様御事於 御所向は被称

和宮様と候旨、被 仰出候、

一久世大和守様御用之儀ニ付、早々御上京之旨、去ル十

六日被 仰出候由、致承知候間、御地御出立御座候て

被 仰下度、

一去ル十五日夜、御所可代酒井様御屋敷何事ニ在之哉、

御家中俄ニ奇合、大鼓鉦等打候ニ付駆付、鑓刀拔身之

俣罷出候も在之、甲冑着致候も有之、銘々武器携へ直

詰、夜廻騒々敷御座候由、翌朝御所可代屋敷は混雜罷

在候旨承候得共、左様成事トハ我々も不存、兼而多武

峯南都より例年御祈禱申参、則日罷出候約定申置義ニ

て罷出、私出立仕候処、帰路南都ニ而承候得へ、京都ニ

而兩三日中ニ合戦初り可申も難計旨風説有之候間、差

急帰宅仕候処、何事も無之、十五日夜御所可代屋敷之

儀右様相違無之候得共、右何之訳ニ有之候ト申儀不相

分、同所御家中之向々ニ而も同様不相成事ニ而申居、

騒々候得共、間違事有之旨、不軽訳ニ被存候、

一薩州島津和泉上京、右御当主之御実父ニ御座候由、何

か、公辺江御礼向等も有之、為御名代参府之由、十六

日上京ニ而 近衛様へ参 殿ニ相成候旨、直様伏見江

翌朝引取ニ相成候処、亦々上京致ニ相成、逗留御座候、

尤同所屋敷ニ而御当主も同様扱ニ御座候段、兼而承居

同勢等夥敷人数ニ御遣し、世評ニ而ハ

御所向江願筋之義有之上京之事致風説候、然るニ彦州

家ニ而も同所屋敷江夥敷人数上京逗留罷在、御家老も

登、同様ニ御座候而、長州侯通行に付而之訳ニ無之、右人数いつ之間ニ武器類取運ひ候事哉、全備有之、人数鉄砲大筒方等、夫々役々計り御座候由、追々土州・阿州・細川様よりも御人数上京ニ可相成旨、筑前侯同様御上京之筈、則御登ニ相成候処、是迄途中御心遣ニ而御引返ニ相成候杯申唱、西国方諸侯被 仰合、公辺御所置方不宜候ニ付、御所向江手を組、十ヶ国主方同意申立之義有之候と之次第杯、種々様々之風説仕候、何時騒乱も難計由申、騒々數御座候、虚実始末相分兼心配仕候、早速右申上度罷在候へ共、取留候儀成り兼右承り合等延々罷居候、漸々御所司代より御届之書写別紙御返申候、西国筋ニも浪人も多く、諸家様段々出奔人有之、此姿ニ而ハ御家来も減少、自然之節御差支ニ相成申候旨、尤薩州家江右浪人之もの参り歎願申立候故、取押有之候得共、右様之もの故召捕刑法殺害被仰付候罪も無之扱ひ難渋ニ而、其段申立之事御座候哉、出府之積ニ候処、

御所向より逗留罷在候様被 仰付、御老中様御登京被仰付候事ト風説ニ御座候、亦一説ニハ 関東江申上候ハ而も外夷御打払之儀御取上も無之候付、京都より御許容被仰出度願申出、御所限り被 仰出候義難相成、御老中御呼登、其段被 仰付候事とも申候、虚実は相分兼候へ共、右辺之事ニ而も可有御座候哉、今度之儀不容易次第ニ奉存候、御老中様も是迄御上京、寺町御逗留相成候処、今度ハ右御旅宿御城近御所司代裏手之方江、内藤豊後守様江被下候屋敷明居候処、右建物引移、此度急々造作罷在候、御上京有無未承候へ共、御上京無之候而は不相成候旨、来月七日頃御上着相成可申哉、其処ニ而御沙汰御返答次第ニ而、当地静ニ取り可申候得共、左も無之時は六ヶ敷事如何ニ相成候哉、難計、何分ニも異人御打払之事相成可申、左なく而は納り申間敷由風説御座候、当月十六日ニは 関白様より伝 奏衆三四度も御用召ニ而、夫より久世様御上京被仰遣候事ニ御座候旨、

九条様と御所司代様ニは大怒、先達而来諸浪人之御安  
怒計り本原被為入候処、此度彦根并ニ姫路へ御頼ミ警衛人

数相増居、御所司代は十五日夜之一条も何か不相分候  
得共、御国元江人数増、十五歳已上不残罷出候様被

仰付候由、若州ニ而は京地合戦も初り居候様心得候由、  
大混雜ニ御座候由、同所江道中筋町人とも止宿も出来

難く、若州より家中上京夥敷混雜至極御座候由、其後  
此節而ハ静ニ相成候旨、去廿三日夜も伏見薩州家中刃

傷一条ニ而、亦御所司代屋敷十五日夜同様騒立ニ有之  
候由、則晚ハ兼而相凶之狼煙も伏見ニ而揚候て注進も

有之候由御座候へ共、十五日夜之義ハ何事も無之騒動  
ニ有之候旨、

御所向へ御達被成置候書付トは大相違氣之毒ニ可存候  
御役か条ニ不相成候ハ、宜噂も御座候、薩州屋敷ニ

而此節裏通東南町家買上ケ相成、屋敷取引ケ、普請取  
懸居、上京同勢千人ト申事ニ御座候得共、上下夥敷町  
家借上、止宿断申出候而も承引なく、奉行所江ハ此方

より申立候旨御用ニ付、止宿之旨申聞、御威光を以借  
上相成候、伏見屋敷ニ而も多人数町宿も罷在、大坂表  
ニも同様之事承、惣勢夥敷事ニ御座候、

御所司代近辺町家ハ、度々前頭ニ付、自然之義有之候  
ハ、焼払ニ相成候哉も難計事町々申唱、家財取運右

往左往ニ候得共、其外町々ハ静ニ罷在候、色々噂有之  
候得共、市中相替候儀無御座候、米価も右等ニ付俄ニ

引上候得共、又少引戻り候体、追々如何可相成候哉、  
冊子原寸 縦二四糎 横一六糎 七枚

一 松平美濃守大蔵谷ヨリ帰国ノ件

外雜件七通

合八通

一五八ノ一 略系

奥平美作守定家二男

当時大膳太夫十八代之祖

定直

正定

吉定

義次

定次

先祖以来軍功多ク、殊ニ上條・羽黒・関ヶ原

数度之軍功ニ付、

東照公之命ヲ蒙リ、子孫ニ至ル迄

御目見被仰付候、

時重

良雄

守雄 争論之事是レ有リ家断絶

二男

正頼 関ヶ原等軍功有り、生国三河

俗称奥平武兵衛

家老職被申付、俸禄千二百石、

家康公・秀忠公御目見被仰付、子孫永ク本家之通り

御目見被仰付候、

是ヨリ第十代之孫小生ニ相成リ申候、

当時俸禄七百石

中葉幼小二代相続キ減禄シ七百石ニ相成ル、

文書原寸 縦一七・三糎 横三六・五糎

一五八ノ二

備中 備後

能登 近江

美作 石見

伊賀 播磨

佐渡 壹岐

対馬 安房

文書原寸 縦一六・五糎 横二七・七糎

一五八ノ三

横浜新聞

一薩摩ノ軍兵江戸中ヲ責シカ為ニ江戸ニ行キ、薩摩屋敷

其外三ヶ所ニ火ヲカケタリ、

一市橋ノ兵士江戸ヲ襲来リタル多クノ薩兵ニ出向ヒ、或ハ追返シ或ハ殺シタリ、

一薩摩ノ小蒸気船、戦ヒヲ遁レタル兵士ヲ積ミ出船シタル跡ヨリ蒸気船四艘ヲ以テ追カケシニ、終ニ何ノ手シルシモナク帰港シタリ、

一江戸政府ニ於テハ無双ノ所置振ニテ薩摩ト戦ヲ成シ能ハス、

一薩摩ノ軍士大概市橋兵士ニ打レタリ、

文書原寸 縦一四・五種 横三五種

一五八ノ四

今般英夷軍艦横浜江渡来重大之事件申立、於幕府御許容難被成趣之由、畢竟去秋生麦一条と相聞得候、就而は彼皇国之御大難

文書原寸 縦一六・五種 横二二・五種

一五八ノ五

松平美濃守様去ル十三日大蔵谷迄御通行、御持病被為差起候由ニ而、御引返相成候旨、当所間屋場役人共より申出候事、

文書原寸 縦一五・三種 横二〇・五種

一五八ノ六

一小銃 八挺

本込

一短銃 二挺

一袂時計

一セシマイ

右之通御注文相成候事、

文書原寸 縦一六種 横四〇種

一五八ノ七

答古知幾学

本庄新之允

同断

松崎健二郎

城峯陣營炮台  
攻守築造字

脇田 政一

町田 呈藏

文書原寸 縦一八糎 横二三・五糎

一五八ノ八

津田山三郎

山県典次郎

臼杵亭助

上野賢五

町奉行副役

木村徳太郎

右十月七日着

御家老

小笠原美濃

右十月十九日立

文書原寸 縦一七糎 横二七・五糎

一覽 近衛忠房卿より島津和泉殿へ

四月十六日近衛家訪問の件

(包紙ウツ書)

一島津和泉とのへ

忠房

極密急用

(付箋未)

『四月一四日』

イ

イ

(封紙ウツ書)  
一島津和泉とのへ

極密早々

忠房

此書付所司代より伝奏へ差出し候写ニ候、草々、  
是も御返脚之様伏而頼入存候事、

弥勇健珍賀候、明後十六日面会ト楽シミ待入候、正親町  
三条ニも面会之事申入候処、尤承知之趣、乍去酒井若狭  
守より伝奏へ、此通り之書付差出し候ニ付而ハ、全武士  
へ面会杯差留メ候様成次第、乍去其元サへ嫌疑不被存候  
事ニも候ハ、大磐石之至、何時成共面謁可仕旨ニ候候  
何卒唯今直様ニ、右否御報頼入度候、御報次第ニ而面謁

被仕候由ニ承候間、以急便早々申入候間、早々御報頼入

候、呉々其元御誠忠之義ハ、何迄も頼敷存候事ニ候、乍

去唯今御膝元ニ而騒々敷不相成様、事穩便ニして関東改

革在度事ニ候、呉々於御膝元人氣立、騒々敷相成候而

ハ、<sup>(マツ)</sup>脚而誠忠も難立、先以穩便之手段ニ而被為安

宸襟候様、良策在度事ニ候、長州ニも誠忠決当之趣ニも

候ハ、一致ニ而良策勘要ニ候、呉々大磐石之賢慮專ニ

而、精々誠忠被尽候様、偏ニ仰処ニ候、乍去帝都戦場地

と相成候而は、不容易大乱、呉々御膝元静ニして被為

安

宸襟候様、長藩杯一致良策勘要之事ニ候、呉々卒事ケ間

敷次第在之候而ハ、事成就難成候間、何分御如才ハ無之

哉とハ存候へ共、静ニ被為安

宸襟候様、良策伏而頼入候、先は大急々正親町三条へ

面謁被致候否ニ付、態々申入候、大乱書々、推覧々

ニ而何卒唯今直様ニ御報頼入度候事、

四月十四日

文書原寸(折紙)

縦一六・四糎 包紙原寸 縦三一・八糎  
横四六・二糎(二枚) 横 四三糎

二〇 酒井忠義ヨリ広橋坊城へノ答書

久世大和守上洛ノ件

<sup>(端裏書)</sup>  
「御返報写」

御用被為有候間、久世大和守早々上京候様可申入、関白

殿被伝 仰候由、関東江可相達旨致承知候、早速関東江

相達可申候事、

四月十六日

忠義

広橋一位殿

坊城大納言殿

文書原寸 縦一六糎 横四四・五糎

二一 久光公ノ意見書草稿

近衛家ニ於テ提出

<sup>(包紙、ワ書)</sup>  
一戊四月十六日初而近衛家江御参殿之節御差出ニ相

成御書付御草稿

〔端裏書〕  
「戊四月十六日初而近衛家江參殿之節差出候書草稿」

口上之覚

〔付箋〕  
「此節ノ下蠹蝕セルハ、「私儀」ノ二字ナリ」

此節

〔虫損、私儀カ〕  
関東江出府仕候趣意、

表通は去々年来修理大夫参

府、兩度迄御猶予之御礼、且は屋敷焼失後、下知不仕候

而不相叶用向有之筋ニ御座候得共、内実は

公武御合体

皇威御振興、幕政御変革被為在候様建白仕度所存ニ御座

候、尤此儀は一朝一夕之事ニ無之、去ル午年以来幕役共

勅諭ヲ遵奉不仕、外夷通商免許仕、剩正義之 親王・公

卿ヲ奉始、一橋・尾張・水戸・越前其外有志之大名禁銅

仕、庶人は死・流之刑ニ取行候処より、乍恐被為惱

宸襟候由伝承仕、諸国之人心致紛乱、浪人共尊

王攘夷ヲ致主張、慷慨激烈之説ヲ以交ヲ四方ニ結び、或

ハ大老ヲ刺シ、或ハ夷人ヲ戮シ候より、幕役共取締之嚴

令ヲ下シ候処、弥奮発仕、近比ニ相成候而は、殊ニ致増

長、終ニは不容易企ニ及候哉ニ伝聞仕候、右通ニ而は  
皇国一統騒乱之基ト相成、勤

王之趣意ニモ不相叶、却而外夷之術中ニ陥リ候儀ニ而、

実以不可然事ニ御座候、私儀家督之者ニモ無之候得共、

三百年來 徳川家之御鴻恩ヲ蒙リ、殊ニ亡兄薩摩守臨終

之節、国政之儀は勿論、

天朝 幕府之御為、宿志致継述、精々尽力仕候様、分而

遺託<sup>〔託カ〕</sup>之趣も承居候ニ付而は、右次第傍觀猶予仕候而は、

不忠不孝之罪難遁存詰、修理大夫申談、是非関東江出府

所存十分言上仕候含ニ而、去月十六日国許発足当月六日

播州姫路江着仕候処、諸浪人共追々上坂仕、私通伏相待、

事ヲ起シ候趣ニ相聞得候ニ付、道中差急候義モ出来兼、

漸ク去ル十日大坂江着仕候処、浪人多人数滞坂仕居、紛

々之次第御座候而、迎も無事通行難仕候ニ付、家臣之内

内々差出、其方共実ニ勤

王之志有之候ハ、此方致上京、

叡慮可奉伺候間、暫時潜居可仕旨、精々理解為仕候処、

乍漸承服仕候ニ付、去ル十三日伏見江着仕、今日參 殿  
仕、

叡慮奉伺所存建白仕候、更ニ龜暴ニ事ヲ破リ候義ニ無御  
座、天下之心安堵仕候様御所置被為在度所存ニ御座候  
間、不惡御聞取、委細奏

聞被成下候様、伏而奉希候、誠惶謹言、

四月十六日

別紙

趣意書

一粟田口宮 左府公・鷹司公御父子御慎被為解、且於関

東一橋・尾張・越前等御慎解有之候様被 仰出度事、

一右御慎解之上 左府公関白職被 仰出、於関東は越前

前中将殿大老職ニ被任度、此儀は家格ニ付先例は無之

筈ニ御座候得共、非常之時節、非常之処置有之候様被

仰渡度事、

一田安後見名有て実無キ事御座候ニ付、免許いたし候様

被 仰渡度事、

一安藤对馬守手疵平愈出勤仕候由、是は第一天下之心

ニ関係仕、不可然事御座候間、速ニ退職仕候様、被

仰渡度事、

一久世大和守早々上洛仕候様被 仰渡、前件之儀速ニ取

行候様、屹と被 仰渡度事、

一前件之儀被 仰渡候ニ付而は、乍恐

朝廷御威光不被為立候而は、幕役共遵奉仕候儀懸念ニ

奉存候間、大名二三家江

御内勅被相下、若幕役共違

勅之趣も有之候ハ、速ニ弁責仕候様被 仰渡度事、

〔朱〕 一此条御差支之儀有之、御取用無之

一此以後は

叡慮之趣浪人等江不相洩様、御取締嚴重有御座度奉存

候事、

一浪人共之説妄ニ

御信用不被為在候様、乍恐奉存候事、

一越前在職之上は上洛被 仰出、將軍未若年之事候ニ付  
非常之時節

御懸念被 思召候間、一橋江後見被 仰付、

朝廷御尊崇之道、於関東精々奉尽、邪正之弁明白ニ相  
立、外夷御処置天下之公論を以、永世不朽之明制被為  
定、

皇威海外ニ被為振候様罷成度、乍恐奉存候事、

右之条々至愚之身ヲ不顧、存慮之趣申上候間、厚御  
評議被為尽、若 御取用ニ被為成候御事ニ御座候ハ  
、一日も早く 勅命被為在度御事と、偏ニ心願ニ  
御座候、  
敬白

四月十六日

源久光拝

上

文書原寸 縦一七・二糎 横 一八一糎

包紙原寸 縦二六・五糎 横一九・二糎

二三 久光公京都滞在ノ朝命

〔端裏書〕  
「壬戌」

四月十六日承知」

浪士共蜂起不穩企有之候処、島津和泉取押置候旨、先以  
觀感 思召候、別而於御膝元不容易儀於発起は、実々被惱  
宸衷候事ニ候間、和泉当地滞在鎮靜有之候様、 思召候  
事、

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸 縦二七・五糎  
横 四九糎 横一九・五糎

二三 近衛家ニ於ケル久光公口上覚

同時ニ朝廷へ提出ノ趣意書 表裏認 合二通

〔本文書ハ一六一号文書ト同文ニ付省略ス〕

文書原寸 縦一九糎 横一六五糎

二四 久世大和守上京スヘク酒井所司代へ

ノ朝命

〔端裏書〕  
「御來書写」

御用被為有候間、久世大和守早々被上京候様可申入、閑

白殿被伝 仰候、閑東江可被相達候事、

四月十六日

(坊城) 俊克  
(広橋) 光成

酒井若狭守殿 (忠義)

文書原寸 縦一六糎 横三八・五糎

〇三三 短刀御下賜勅書写

近衛忠房卿添書

一六 久光公へ壮士鎮静ノ朝命

(端裏朱書)  
「壬戌四月廿五日承知」

浮浪之徒蛮夷之儀より彼是蜂起之趣、去十六日内々言上  
被惱

宸襟候処、鎮静之儀御受有之、被安

叡慮候処、又々一昨夜已来猛暴之形勢被

聞食候、元来右之徒為

皇国、赤心報国之志を以、投身命候段は

御惑之御事ニ候得共、攘夷一件ニ付而は、実々自先年深

被惱

宸衷候処、何分国中一致之儀第一と被

思召候ニ付、尚厚被廻

叡慮候御事ニ候、然処方今血氣之壮士等、不用理解暴論

を為主、奉

勅命を待すして猥ニ乱妨ケ間敷儀ニ及候段ハ、忠憤却而

違

勅之筋ニ相当、不埒之至候、右等違背之輩ハ早嚴可加制

止儀ニ被

思召候事、

文書原寸 縦一七・八糎 横九四・二糎

二七 尾張前中納言等赦免ノ幕命

(端裏書)  
「四月晦日」

尾張前中納言殿

先達而御慎御免被 仰出候節、御在国等御願被成候儀ハ

不宜、且又大納言殿江も度々御対面等被成候儀は、御酌

酌被在之、御親族方其他江御面会、又は御文書御往復

等之儀、都而御遠慮被在之候様ニとの御内沙汰之趣相達

置候処、思召御旨も被為在候ニ付、先年御不興之筋皆悉

御宥許被遊候間、以後都而平常之通御心得被成候様被

仰出候、就而ハ

御対顔も被遊度 思召ニ候間、近々御登 城之儀可被

仰出との 御沙汰ニ候、

徳川刑部卿殿

先達而御慎御免被 仰出候節、御親族方其他江御面会

又ハ御文書御往復等之儀、都而御遠慮被在之候様ニとの

御内沙汰之趣相達置候処、 思召御旨も被為在候ニ付、

先年御不興之筋ハ、皆悉御宥許被遊候間、以後都而平常

之通御心得被成候様被 仰出候、就而ハ

御対顔も被遊度 思召ニ候間、近々御登 城之儀可被

仰出との

御沙汰ニ候、

松平春猷

先達而御慎御免被 仰出候節、在所江罷越候儀ハ難相成、

且又親族其外面会、又ハ文書往復等之儀ハ遠慮致し候様

ニとの 御内沙汰之趣相達置候処、 思召御旨も有之候

ニ付、先年御不興之筋ハ、皆悉御宥許被遊候間、以後都

而平常之通可相心得候、

松平容堂

先達而御慎御免被 仰出候節、在所江罷越候儀等ハ難相成

且又親族其外面会又は文書往復等之儀ハ遠慮致し候様ニ

との 御内沙汰之趣相達置候処、 思召御旨も有之候ニ

付、先年御不興之筋ハ、皆悉御宥許被遊候間、以後都而

平常之通可相心得候、

右之通今日被 仰出候事、

四月廿五日

文書原寸 縦一七・五種 横一九四・五種

一六 大赦ニ付板倉周防守等五閣老ヨリ酒井所

司代へノ指令

(端裏書)  
「四月晦日 戊四月廿五日」

先般

御縁組御先例も無之、今古莫太之恐悦ニ付、一天下江別段之大赦被行度

思召之旨、旧冬千種(有文)少将・岩倉(具視)少将を以被

仰下、篤と取調、追而可申上旨両朝臣迄申達置候処、右大赦之儀は彼是御差支之筋も相見、容易ニは難被仰出、然ル処

思召

御旨も被為 在候ニ付、尾張前中納言殿始、先年御不興之筋は、皆悉 御有許被遊、以後都而平常之通被心得候様、別紙之通被 仰出候、其御地ニおいても、鷹司入道准后殿 近衛入道前左大臣殿 鷹司入道前右大臣殿 獅子王院宮御始、先年辞職落銜等被 仰出、当時御慎中之方ニも有之候間、

叡慮を以右御慎等、皆悉御有免被遊候様被 思召候、右之趣関白殿江可被申上候、尤右之外御咎其外御赦免等可相成者も可有之、追々取調之上可相達候間、其段も被申上置候様ニと存候、就而は御咎御免等ニ相成可然は其御地之分へ取調、御申越候様ニと存候、以上、

四月廿五日

板倉周防守(勝替)  
水野和泉守(忠替)  
松平豊前守(信替)  
内藤紀伊守(信替)  
久世大和守(広周)

酒井若狹守様(忠替)

文書原寸 縦一七・五釐 横一五三釐

二六 久光公ヨリ 近衛忠房卿へ二通 喜入撰津へ一通

一六九ノ一 寺田屋事変直後ノ諸件

御礼奉申上度、愚札拜呈仕候、先以益御機—— 扱私此節之心底、

合三通

天朝不淺御満足被為在、為御賞嘗從來御物之御短刀極密

拝領被仰付候、

叡慮ニ而一昨日、其御殿迄

勅書ニ而御下ケ相成候、仍昨日帶刀被召呼右之御儀委細

被仰含候由、同人罷帰詳ニ承知仕、誠以恐入候次第、何

共可申上様も無御座候、今般之儀未奉安

宸襟程之忠効も無御座候処、箇様之御品拝戴仕候事、武門

之冥加、当家之面目と幾久敷重宝伝来可仕と別而難有奉

存破損愈奉存候以赤心御国恩奉報度所存ニ御座候間、右之旨趣

上ニて難尽御座候間、唐渡上被下度、伏而奉希上候、且

勅書御写目出度御讓被下、是以御文面之趣恐入難有拝領

仕候、随而此品輕微之至ニ御座候得共、内密御礼奉申上

候、驗迄其御殿迄差上候間、不苦被思召候ハ、御披露

被仰上被下度奉願候、先は右御礼厚申上度如此御座候、

二白、為御礼私參殿仕候儀、相当と奉存候得共、唐渡

中ニ而參殿は却而不宜旨、帶刀江被仰含候由御座候

間、乍略義以愚札御礼奉申上候、以上、

(朱) 「近衛家」

一六九ノ二

一昨夜以来、浮浪之徒亦狂暴之形或成之儀

聞召候、元来右之徒、為

皇国赤心報国之念お以投身命候段は、

感候御事候得共、攘夷一件ニ付而は、実は自先年被愆

宸衷候処、何分國中一致之儀、第一と被

思召候ニ付、尚厚被廻

叡慮候御事ニ候、然処方今血氣之壯士等不用理解、暴論

を為主

勅命を待すして、猥ニ乱妨ケ間敷儀ニ及候段は、忠憤却

而違勅之罪ニ相当候ニ付、右等之輩は早敵可加制止旨、

承知仕奉畏候、

乍併私方江不罷居者は力ニ難及事ニ御座候、此段は前に

申上置候、

昨夜は從

朝廷御内々野宮宰相中将様為 御使其御殿江

御書付御持参之由私江浮浪之輩ニ理解可仕旨被

仰出、恐入難有奉存候、仍御請書別紙ニ相認差上申候間

よろしく御披露奉願候、以上、

追啓、御端書之趣、委細承知仕候、酒若儀ニ付御懸

念之儀共、御尤之至奉存候、乍併此義は誠ニ六ヶ數

奉存候、久大上洛之上は、私十分差はまり説破可仕

所存ニ御座候、酒若義、私一面会ニ而もいたし候者

ニ候得は、直ニ面会、得と事情申論様も可有御座候

得共、此義も出来兼、且久大と申而も同様之事ニ候

得は、書状又は人なと遣し候事も難相成、最早道中

致とも推察仕候、尤去年之様之暴政は当分之所ニ而

は、迎も出来申間敷候間、御安堵被遊候様奉存候、

若も右様之事、到来仕候得は、即日ニ変を生し候事、

只今より申上迄も無御座候、岩倉家江は決而相洩し

候義無御座候間、御安心被遊候様奉存候、

扱又申上兼候義ニ御座候得共、其御殿諸太夫杯之処、

酒若引合愚考仕候ニ付、右之者共より色々申上、旁御

配慮被遊候御事致と奉存候、呉々も当時之勢迎も、

午年之様暴政は無之事と奉存候、今大路丈は御退相

成候而は如何可有御座哉、乍併是も御都合次第之御

事 奉存候、先は御請旁此段申上候、以上、

〔米〕  
「右同」

〔破損〕 成下、難有謹而拜見仕候、先以益御機嫌能被遊

〔破損〕 恐悦御儀奉存候、然は昨夕は議奏衆より之御書付、

中左衛門被招呼、御渡被成下恐入難有拜戴仕候其節同人

より久世大和守引戻し候事申上候処、早速正親町三条様

へ被仰遣候由、右御返書拜見被仰付承知仕候、中山家江

は今朝堀小太郎次郎改名參上仕、委曲申上候処、能キ御都合

之由ニ御座候、乍併於爰許久世御差留之処、御六ヶ數御

事御座候ハ、勅使江被仰含、道中行逢候処ニ而御達

有之候而は、何様可有御座哉、右通之節は私ニも差はま

り尽力仕候所存ニ御座候、只今ニ相成私御当地江被召留

候而は、乍恐 朝議御変改無御定訳ニ而

皇威之程も如何と恐入奉存候、殊ニ多人數之家來共、且

被遊御案内之通、偏固短慮之者共ニ而、此末如何様暴発

之者無之とも難申上、別而懸念至極之事ニ御座候、屋敷

も手狹ニ而外宅之者段々御座候得は、取締方手ニ及かね

心配之事ニ御座候、就而是非滞留被仰付御事御座候ハ、

知恩院を借用仕度奉存候、左様無御座候而は、迺も取締

難相成儀ニ御座候、尤出家罷居候而は、旁混雜之事ニ御

座候間、是非御明渡被仰付度、強而奉願候、若此儀も不

相成御事ニ御座候ハ、無致方次第ニ御座候、折角天下

之御為、精々尽力仕候含ニ而、所存段々言上仕候得共、

今通ニ而は十分之成功無寬束奉存候ニ付、乍残念帰国仕

候より外無御座候間、何卒右之趣意深厚被遊御汲取、今

一往御勘考被成下度、泣血百拜奉歎願候、誠惶謹言、

二白、御頭病氣ニ被為在候由、折角被遊御保養候様

奉存候、毎度乱毫乍〔恐之〕御〔海之〕容〔磨滅〕

〔朱〕「近衛家江差出候書」

一六九ノ三  
態と一筆申入候、薄暑之候於其許

御本丸御初御揃無御障、大慶之至ニ候、小子ニも無異滯

京、可御心安候、小子事初は関東江差越存慮申出候含ニ

候処、去ル六日播州兵庫出立之途中、

陽明家より可致參殿旨 御直書致拜戴候ニ付、其〔破損〕而

着坂いたし候処、諸浪人共多人數滯坂〔破損〕之次第ニ付、小

子上京、内分

叡慮可奉伺候間、其中相静候様、精々為致理解候処、乍

漸承服いたし候ニ付、同十三日川上り伏見着津、登〔京之〕御

都合奉伺、十六日參 殿、垂相公江致拜謁候処、種々御

饗応被成下、御懇命被仰下、拜領物いたし、誠以難有次

第二候、依而小子此節上京之趣意、委曲書取を以申上候

処、別而能キ御都合、其上中山大納言様・正親町三条大

納言様、態々御來臨御面会申上、猶又存慮、遂一申述候処、

早速參 内被達

叡〔破損〕候処

〔破損、御満カ〕足被思召、浪人鎮静可致との旨、御書取を以承知

〔但陽明家より差出候書付写は〕

〔先度岸良便より〕

〔御本丸江差上置候ニ付、拜見〕

〔被願候而宣敷、是ニ而小子存〕

〔慮之程顯然ニ可有之候、〕

〔破損、御満カ〕

〔破損、御満カ〕

いたし冥加之程、幾重ニも難有次第ニ候、此儀は先便表  
通申越相成候筈故、令省略候、

一右通承知いたし候ニ付而は、いづく迄も浪人取鎮不申  
候而は不相濟事故、大坂江再三人差下シ、精々申論方  
手を尽し候処、当座は承知之体ニ而、更ニ心服之向ニ  
無之、殊ニ柴山・橋口・有馬・田中之四人主謀として  
色々龜暴之説申募り、誠以不忠至極之者ニ候、終一昨  
廿三日浪人は勿論右四人外守衛人数之内、且江戸より  
亡命之者、其許より亡命之者杯申合、大坂を暴発いた  
し、夜中九条家・所司代江可及乱妨企之旨、大坂より  
申越候ニ付、邂逅鎮靜之

御内勅蒙り奉り候身分、取押不申候而は無申訳次第と  
決心いたし、壯健之者相扱、伏見迄差遣、精々理解い  
たし、逆も承服不致節は存分ニ可相働旨、委細申付遣  
候処、終ニ及刃傷彼四人は勿論外ニも誅伐いたし、先  
は安心之事ニ候、乍併此方より遣候内ニも即死深手も  
有之、用ニ相立候者、呉々も残多次第二候、其段は小

松・谷川より細々可申越候、就而は其許之儀、定而色

々雑説相起り候半と致遠察候、最早此上異変も有之間

敷候ニ付、其地之処、精々取鎮、敢而动揺不致様被致

候義、專要之事と存候、小子其地江罷居候節之通、万

事一毫も無相替様、折角心掛可被致精動候、

一大島一件、如何相片付候哉、是も誠ニ心配之事ニ而、

誠ニ言語道断之曲者重罪之者ニ候得共、先一命は相助

ケ其地江差遣申候、最早処置為有之事と存候、

一右ニ付而は有川十右衛門・い東仙大夫・米良助右衛門

杯之処、色々異説申立候は案中欵と察申候、折角無油

断様簡要ニ候、若不忠之義有之候ハ、無遠慮罪料申

付候テ不苦義被存候、

一蓑田再勤之処申出候哉ニ承候、以之外之次第ニ候、し

かし其方不得心ニ而差留候由、至極よろしく存候、此

以後も右様之義有之候而も、一切取用不相成様有之度

候、

一江戸より大坂迄、菱刈・汾陽杯態々差越、折角伏見通

行不致、蒸気船より可参旨申出候得共、此方趣意違之

事故、兩人共面会、色々弁論いたし、取用不申候、此

義も於其地段々風評も有之筈と存候、小子存慮は、

陽明家江差上候書面之外、更ニ無之候故、其方能々御

心得候而、精勤專要ニ存候、

但佐土原よりも樺山舍人参り候、趣意同然之事ニ候

依而直書差遣小子存慮申越候、

一 汾陽之処、実ニこまり候者ニ候、打替り之早キ生質ニ

而、迎も当職は如何と存候、(高カ)自細事は後便小松杯より

可申越候、

一 爰許滞留も久世着之上ならてハ程合難分候、来月十日

前後ニは着之筈欵と相考候、

右之趣共其地之模様、別而懸念ニ存候間、乱毫を以

申越候、御推覽可被成候、以上、

猶々、其方初同席中無障出勤之筈、よろしく御伝

声頼入候、以上、

(朱)「壬戌年」

(朱)〔破損〕  
「撰津江遣候書状草案」

文書原寸 縦一七糎 横七・五糎

一 近衛忠房卿より島津和泉殿へ

浮浪輩取締ノ朝旨

酒井所司代辞職ノ件及副書共

二 通

(包紙ウツ書②)  
「島津泉州先生

極内密々

忠房

(朱)〔破損〕

(包紙ウツ書①)  
「島津和泉とのへ

極内密々

忠房

ノ

一七〇ノ一

(封紙ウツ書)

「島津とのへ」

入覽後急速投火ノ

忠房

緘

口述

唯今從

朝廷内々野宮宰相中將為(定功)御使被来、此御書付被出候

間、泉州より浮浪之輩へ理解ニ被及候様被 仰出候、仍  
御伝申入候事、尤議奏之心得ニ而被渡候也、

四月廿五夜

追申

誠ニ愚案ニ過日来懸念候へ、久世和州上京之上

叡慮御旨趣被 仰出候ニモ、何分酒井若州在役ニ而へ

甚何か如何之事ト、呉々心配仕候、唯今從

禁中退役之義被 仰出候事へ難相成事、旁甚心配仕候、

何卒和州上洛迄ニ辞役ニ相成候へハ、大ニ都合ト存候、

呉々若州ニハ不容易姦曲者故実々懸念仕候、其元達之

賢考ニ而、何卒和州入洛迄ニ退役之様、勘考在度候、

此義決而岩倉少将杯へ不洩様、呉々極内々申入置候事

乱書御推覽へ、

文書原寸 縦一六・五種 横八四種

一七〇ノ二

被

仰出之御旨趣、是ハ別段御受書被差出候様存候事、其上

可入

叡覽存候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第二十七号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・七種

横 二七種

包紙原寸

①縦三一・二種

横四二・五種

②縦 三一種

横 四二種

三七 酒井忠義ヨリ広橋坊城両卿へ

久世大和守上京ノ件

(端裏書)

「五月四日」

御用被為有候間、久世大和守早々上京仕候様、去十六日

被仰下候、御請未無之哉、御尋之趣致承知候、右は即日

以急使相達候儀ニ御座候処、未々御請不申参候間、尚又

以急便相達可申候、御答迄此段申上候事、

四月廿九日

忠義

広橋一位殿

坊城中納言殿

文書原寸 縦五・七種 横三六・五種

二三 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ

朝廷へ献金ノ件

(包紙ウツ書③)

一 島津和泉とのへ

極密々急用

忠房

(朱)緘)

□

□

(包紙ウツ書②)

極内密啓

島津泉州先生 忠房

御右

フ

フ

緘

(包紙ウツ書①)

内々

推覧

忠房

(封紙ウツ書)

一 島津和泉とのへ

極内密々

忠房

尚々一兩日逆上強頭痛困り入候次第、別して乱書  
〳、仁恕頼入存候也、

弥勇健珍重候、抑一昨日ハ拜領物御礼之書翰并ニ御請書  
等被差出、何も髓ニ落手仕候、帯刀よりも御口状之趣何  
も承候、則御礼之書翰内々

天覽ニ入候処、御満足之御沙汰ニ被為在候、扱為御礼  
ト極内密献金之義、一封ニ封込御直披ニ奉願献上仕候処、  
扱々懇志之程ハ幾重ニモ

御満足ニ被為在候得共、何分今度之一件、薩摩一国ニ限  
り候分ニ而ハ無之、皇国一体安危之堺、泉州ニハ不厭  
(久光)  
国費、薩日隅等之国ヲ以テ、忠勤專ニして御奉公申上候  
心底、不浅

叡感ニ被為在候ヨリして、屹と御賞賜モ被遊度、厚

叡念ナカラ、兎角時節柄ト申、思食ニ不被任、甚御不  
快ニ被為在候、旁常々御物之御短刀拜領被 仰付候義ニ  
而、唯々時勢献物杯ハ、実々不被為寄 思食候御事、献  
物杯ハ殊外 御心外ニ被 思召候御事、乍去厚情之程無

ニ不相成様、程克差心得候テ、可及返脚様とノ御内々

勅書拜領仕候事ニテ、其元ニ茂折角之御存旨、扱々御氣

之毒ニ候得共、叡慮モ御尤様成御事、達テ献上難仕義

故、御返納申入候事ト存候、呉々度々ノ御存旨ニ任セ、

忠房よりモ御献金之様御進メ申入候段、何共不都合ノ

と存候、何分泰平ニ事治り候上、恐悅ニ献金ハ屹と御

満足ニ可被為在哉ナカラ、唯今ハ脚<sup>(却)</sup>ツテ不敬ニ被 思食

候而ハ恐縮之事、先乍御氣之毒御返脚申入候事、扱亦酒

若之義、至極ノ御尤千万ニ存候、何分御賢考可然存候、

扱々御献金ハ折角ノ之義、脚<sup>(却)</sup>ツテ 御不<sup>(却)</sup>満之 御様子

仕方無之候、仍御返脚申入方、一向陸ケ敷、不日帯刀ニ

テモ入来、可及返脚存候事、呉々懇志之程ハ、決而ノ

御不<sup>(却)</sup>満ニ被 思召候訳ハ無之、其辺ハ不悪取繕ヒ、通達

ニ可及様とノ 御沙汰ニ被為在候事、自余ハ帯刀ニテモ

入来之節ニト存候事、

四月廿九日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第二一八号文

書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙)

縦 一六種

包紙原寸

①縦三一・七種

横四五・五種

横 四三種

②縦三一・七種

③縦三一・七種

横 四二・七種

二三 岩倉具視ヨリ堀小太郎へ

幕府ヨリ所司代へノ通牒?

口述

別紙二通内々入一覽ニ候、此運ヒニ相成候事、意味深長

と存候、昨申半剋早飛諸司代着、昨夜到来候、今朝入来

之旨得面談度存候、已半剋迄ニ而參 朝と存候、早々、

以上、

四卅日

富妍

堀とのへ

文書原寸 縦一六・二種 横二六・三種

二五 獅子王院以下御赦免ノ朝命

(端裏書) 四月晦日

入道准后

入道前左大臣

二五 京都長州邸(?) 在番人数調

家老 (勢之祐)

根来上総

右以深 思召関東江御沙汰被為在、自今參 内以下、万

事平常之通被心得、不及遠慮由被

元留守居ニ而相詰居候  
当分勝手方掛

仰出候事、

宍戸九郎兵衛

入道前右大臣

右之外中小姓格合之者計之由、人数百人余之由、

以深 思召関東江御沙汰被為在、自今慎解參 内以下、

文書原寸 縦一六・五糎 横一五・六糎

万事平常之通被心得、不及遠慮由被

二六 豊後岡藩士ヨリ薩士ヘノ書翰

仰出候事、

獅子王院宮

久光公ノ朝権回復ノ件

以深 思召関東江御沙汰被為在、自今被 免永蟄居、為

青蓮院門跡隠居參 内以下、万事平常之通被心得、不及

遠慮由被

仰出候事

文書原寸 縦一六・五糎 横七五・五糎

岡藩之義ハ都て尊藩を依頼仕度之志願ニ御座候ヘハ、何様共申上方ハ無御座、只々御指揮ニ従ひ申迄之覚悟にて、何も是迄其通相心得挙動仕候事ニ御座候、此段ハ深く御承知可被下候、扱私一己之私情、且は追々面会仕候列国義士之内情承候ふり等考、只聊申上度筋も御座候、既先日大久保一藏殿へ委細可申上筈之処、其砌子細有之さし扣候へ共、爰ニ至候てハ、乍恐有体ニ申上度御座候間、

心底千分之一も不尺候へ共、あら／＼認取貴所様迄入貴  
覽申候、

一均敷勤 王と申候ても自然大小軽重之処分さま／＼有  
之事と奉存候、乍併ともかくも大業ニ付、いかなる丹誠  
勤 王鉄場のものも独立候処分付不申処、和泉様ニハ勤  
王之御志深く、此節御上洛ニ被為成候へハ、十分之御尽  
力可被為在と見込申たるにて可有御座候、扱其十分御尽  
力と申もさま／＼可有御座候へ共、とも角も君臣の名分  
を被為正候ニ出候事かと奉存候、其名分乱れ給候数々ハ  
数へ難尺候へ共、細く見安き一端を申候へは、堂上之江  
戸御老中より之御取やう、御書翰御文面都而 禁裏様と  
公方様を同等ニ被為書候よし、又は関東之御領地を天領  
或御料とのミ唱へ候類、数限も無御座、扱甚敷ハ武家伝  
奏ニ被為成候公家方ハ、  
叡慮たり共、江戸の意ニ被為背間敷との誓紙を所司代へ  
被指出候由、ケ様之事様々可有御座候、是ハ其細事にて、  
都て其重大之名分を被為失候事、御推量可被遊候、是を

被為引返申へ、是非一旦国柄を 朝家ニ被為握候外無御  
座、其柄を被為握候と申へ、必王政ニ復と申ニハ無御座  
候、只事之始之御処置ニ可有御座様奉存候、併是ハ不容  
易事ニ付、先ツ一橋家・越前家を被為起、先年来之冤罪  
之人々を被為赦、関東弊政を被為改候より御運ひ相成候  
と申段へ、乍憚御殊勝之御手段にて、重畳奉感心候、乍  
併其通より運ひ申候へハ、天下一縁之人情ハ腹し可申候  
へ共、勤 王之義士ハ中々あきたり申間敷候ハ前々申上  
候、君臣之名分立候と、申ニ至りかね可申欵と奉案勞候、  
其名分を被為正候一端を申候へば、此節も速ニ一橋様・  
越前様を

朝廷へ被為 召、夫々被 仰出度事之処、一ト先久世様  
を被為 召候と申も、畢竟尋常平穩より被為出候事にて、  
関東ニ被為握候柄を被為抜候御手段ニハ至り不申候、是  
ハ

和泉様思召候者ニも有御座間敷候へ共、畢竟縉紳家いま  
た十分之御はまりニ成居不申故之御事欵と奉存候、此十

分御はまりニ成申処、今日之力を可尽処かと奉存候、夫ニ付て列藩之義士も種々心を碎候事ニ可有御座、追々承及候事も御座候へ共、何分筆頭ニ難尽、実ニ此節之御上洛ニハ、必共鎌倉以来被為失候、

朝柄を被為挽回、君臣之名分正敷相成候処迄之御処置ニハ可被為至と、是のミ渴望之処、只今之御運ひ振、乍恐私共式よりとやかかく可申上ニは無御座候へ共、天下一縁義徒之面々何程ニ安心可仕哉と、是のミ奉案勞候、只々此上天下義徒の心ニも奉感服、

王朝之御恢復御大業御成就之処のミ偏ニ奉願候、右之通申上候へハ、初より関東御取潰 王政ニ被為復候様との見込之様御聞取可被下哉と恐入候へ共、曾以左様ニハ無御座候、夫等ニ付て委細之事へ、私式見渡し付候程之事ハ迎も可有御座候訳ニも無之のミならず、聊存寄候事も筆頭ニハ何分難尽、御内訳申上候次第を以、万々御推量奉願候、以上、

文書原寸(折紙) 縦二・三摺 横三四摺 二枚

二七 大砲組什長其他姓名書

永田佐一郎組代  
町田孫一郎組

橋口覚之丞代

大山弥助代

柴山龍五郎代

是枝万助代

吉田清右衛門代

林正之進代

三島弥兵衛代

西郷信吾代

海江田武次代

外ニ岩下玄次郎代  
蘭牟田利兵衛組

仁礼源之丞代什長  
蘭牟田利兵衛

大砲組什長

小野強右衛門

右同

町田孫一郎

右同

蘭牟田利兵衛

得道具組什長

田代宗次郎

岩切八兵衛

高田十郎右衛門

撰銃組什長

鳥丸六左衛門

新納源左衛門

門松市兵衛

外ニ

菓丸半左衛門

貴島新左衛門

鈴木勇右衛門

文書原寸 縦一四種 横三七・六種 二枚

一頁 久光公ヨリ島津忠寛公へノ書翰草案

久光公上京出府ノ理由及家老処分ノ件

一筆致啓上候、不揃之季候御座候処、弥御堅剛被成御座珍重奉存候、小子ニも途中無悉通行いたし候間、乍憚御安慮可被下候、然は此節小子出府ニ付、諸浪人等多人数上坂、不容易企いたし候哉之風評有之、至極御懸念之故を以、樺山直記爰許迄被差遣御所存之趣、委細致承知、別而忝次第奉存候、小子儀毛頭右様ニ存慮ニ無之候処、家臣之中趣意心得違之者有之筋無儀申散候所より事起り聊ニ而も公辺御疑を蒙り候事と、誠以心痛至極之事ニ御座候、此上は浪人取鎮不申候而は、迎も無事通伏出来兼申候間、貴意ニは難叶候得共、暫時滯伏いたし候事ニ御座候、心配之程御遠察奉願候、且筑前・八戸之両君先年より小子工合不宣事故、去冬左衛門・壮右衛門一条より、猶更深く罷成候処、至此節候而は決而公辺江讒口を相申込候事と勘考いたし候、是は無致方義ニ而、今更可驚ニ無之候得共、於小子奉対 公辺何そ異心有之候義も無之趣共、貴君宜御汲取、何卒久世方江内密御通シ被下候儀は相叶申間敷哉先度堀次郎より大略申上候一条も、実以天下之御為と奉

存候趣意ニ有之、浪人同意ニは更ニ無之事ニ御座候、迎も當時通之形勢ニ而は、永久太平之姿ニ無之義は人心有之者誰も存付候事ニ而誓言ニ不及事ニ御座候、乍併小子家督之者ニも無之身分、余計之義と御考も有之管候得共、數百年來徳川家之御厚恩奉蒙か様之時節ニ相成、存付之義を不申出候而は、却而不忠之至と相考候処より相起り候事ニ御座候、修理大夫殿より建白被致候義、当然之事ニ御座候得共、御存慮未若年之義殊ニ当春參府も御猶予之故、右御礼旁として小子出府建白仕候含ニ御座候申ニ不及事ながら、左衛門再勤之義兩君御周旋候哉ニ伝承いたし候、若実事ニ有之候得は、以之外之次第ニ御座候、左衛門事権威漸相生し候趣共有之、年を重ね候ては弥増長いたし、終ニは動難き次第ニ至り候而は、迎も無詮方事御座候間、未然ニ所置不致候而は不相濟義と、決心いたし候事ニ御座候、上々威勢有之候が宜敷御座候哉、家老ニ権柄有之候が宜敷候哉、和漢歴史之趣是非顯然之事ニ御座候、貴君ニも勿論御案中之義と奉存候、壮右衛門

義は奸佞邪智、表裏輕薄之事共多々有之、迎も君側ニ召置候者ニ無之、当分之所置ニ而も輕過候と、色々申出候者も有之候得共、先君より勤仕之者ニ候得は、先今成ニ相濟セ申事ニ御座候、右等之趣厚く御汲取精々御尽力被下度、千万奉頼候、随而此品輕微之至ニ御座候得共、書信迄致進覽候、先は右旁以乱毫奉頼候、恐々謹言、

〔米〕  
「戊年淡路守殿江遣ス状」

尊書被成下、難有謹而拜見仕候、先以益 御機嫌能被遊御座、恐悅御儀奉存候、然は先度中山尚之介・大久保一藏等拜謁仕候節、私參殿御差留、関東江出府尽力仕候様との 尊命、拜承仕御尤之御事と奉存、奉從 尊命候所存ニ御座候処、此節堀次郎拜謁仕、関東之形勢委曲達尊聽、當時之模様ニ而は御差支不被為在候間、上洛參殿可仕との趣被 仰下、難有承知仕候、就而伏見着

以下欠

文書原寸（折紙） 縦一九・二釐 横五三釐

一五 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ

浪士逮捕ノ件

(包紙ウツ書②)

極内々

島津泉州先生 忠房

御右

(朱「緘三つ同じ」)

(包紙ウツ書①)

島津和泉とのへ 忠房

極密々

(封紙ウツ書)

例之乱書御推覧

島津和泉とのへ 忠房

極内密々

緘

尚以其元誠忠 御満足ニ而、不存寄愚拙へ厚御沙汰

之

勅書拝領仕候事ニ候、此義も一寸申入置候事、

追日薄暑催候、弥以勇猛珍賀不斜候、抑過日は光駕初而

面謁、段々誠忠之旨趣従両卿被及言上、深御満足之 叡

慮、就而は為鎮静滞留被 仰出候御事、且亦老中上洛之

上何カノ御都合ニも御安心之 叡慮、旁以両卿且於愚拙

心慥ニ存居候事ニ候、一昨夜は帶刀入来、何モ承知仕候

事ニ候、扱亦昨夜田中仲右衛門入来、何カ浪人共之義承

知仕甚心配仕候、折角厚 叡慮ニ而滞留被 仰付置候事

故、唯今浪人共不慮ニ騒乱ニ及候而は、実々不容易次第

其元御誠忠も急ニハ難立哉ト心配ニ存候、何卒精々分散

之浪人共被取押候勘考在度存候、呉々唯今は大事之場合

ト存候事故、乍御如才御座無哉心底之程申入置候事、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第二五号文

書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一六・三種 包紙原寸 縦三一・七種

横 四六種 横四三・三種 二枚

一六 久光公上洛當時守衛方姓名書

守衛方

差引人

北郷作左衛門

樺山休兵衛

伊地知正治

一三番

什長  
鳥丸六左衛門

伍長

木藤彦次郎

右同

肱岡五郎太

相良矢九郎

高崎猪太郎

曾山甚七

竹内三十郎

大野四郎助

伊東四郎左衛門

高崎善次郎

伊地知源左衛門

一四番

什長

岩切八兵衛

伍長

田中源兵衛

右同

前田十郎

関太郎

堀清之丞

溝口太兵衛

仁礼喜右衛門

永山清五郎

当分病氣磯永喜之助

橋口与一郎

橋口覚之進

樺山孫次郎

一五番

什長

薬丸半左衛門

伍長

飯牟礼斎藏

右同

鎌田十郎太

野津七二

一六番

高崎三七  
 本田謙助  
 山口孝右衛門  
 讚良清藏  
 飯牟礼喜之助  
 柴山龍五郎  
 代鎌田十郎太  
 大山弥助  
 是枝万助

什長  
 病氣鈴木勇右衛門  
 伍長  
 平田李右衛門  
 右同  
 大山格之助  
 上床源助  
 山内一郎  
 有川勘助

一七番

病氣鈴木昌之助  
 右同森元休五郎  
 毛利喜平太  
 石原清右衛門

外組伍長  
 被仰付候 前田十郎

什長  
 高田十郎右衛門  
 伍長  
 大迫喜右衛門

右同  
 奈良原長左衛門  
 四本源五左衛門  
 当分病氣内山伊右衛門  
 四本十左衛門  
 森田仲之丞  
 当分病氣八木新七  
 湯地休左衛門

一八番

迫田彦十郎  
古川直次郎

什長  
門松市兵衛

伍長  
加治木彦右衛門

右同  
伊集院徳四郎

門松喜兵衛

志岐太郎次郎

病氣谷川次兵衛

児玉喜八郎

川崎彦二

湯地治右衛門

吉田清右衛門

林正之進

一九番

什長  
小野強右衛門

伍長  
有馬万左衛門

右同  
中江直右衛門

浏览直右衛門

松田孝之丞

本田源吾

田原三之丞

黒田了介

当分病氣四本助八

田中勇右衛門

当分病氣八木十次郎

一十番

什長

貴島新左衛門

伍長

川上八郎左衛門

一十一番

- 右同 大脇正之介
- 当分病氣中村矢之介
- 右同 中山吉太郎
- 当分病氣種子田清八郎
- 右同 左近充嘉右衛門
- 右同 植村七蔵
- 右同 高城十左衛門
- 新納源四郎
- 当分病氣川北四郎次
- 仕長 新納源左衛門
- 伍長 日高軍次郎
- 右同 山田材介
- 山田材介
- 椎原助一郎
- 当分病氣岡村休左衛門

一十二番

- 御国許江岩下矢次郎  
被差下候
- 当分病氣石塚新之介
- 右同 日高次左衛門
- 右同 大脇弥兵衛
- 右同 大脇佑九郎
- 志和地新介
- 永田佐一郎
- 有馬新七
- 田中謙助
- 深見休蔵
- 有馬休八
- 岩元勇助
- 谷元兵右衛門
- 岸良三之介
- 橋口吉之丞
- 篠原冬一郎

一十三番

吉原弥次郎

什長

田代宗次郎

伍長

東郷四郎兵衛

右  
中小姓寄

上原三左衛門

病氣

仁礼新之介

病氣

竹内十郎太

病氣

谷山彦右衛門

病氣

黒田彦左衛門

病氣

川上彦二

井上直次郎

東条仁之介

三島弥兵衛

一十四番

什長

仁礼源之丞

伍長

定御供寄

野津七左衛門

右同

房村猪之次

神宮司助左衛門

大山十郎次

中村市之介

鎌田弥九郎

高島清右衛門

法元英介

吉井冲介

海江田武二

西郷信吾

取扱

志岐藤九郎

曾山九兵衛

赤塚源六

大田八郎

医師

東条玄伯

湯地養賢

二 久光公入京ヨリ寺田屋事変迄ノ風聞書

京都近辺之者より差越候書状之写 但当月七日認同  
十四日着

先月十五日伏見表江薩州御分家島津和泉殿と申方、数多  
之勢ニ而着ニ相成候処、伏見奉行之方ニ而大ニ驚入、如  
何之次第不相分候所、夜九ツ時火急ニて俄ニのろしを老  
本打上申候処、京地迄相見へ、千本之火之見は不及申、  
月番之青山屋敷火之見番迄も殊之外驚入、番頭迄火之見  
江上り、眺望致候所、只ならぬ火花ニ有之候而、用意可  
致と申付、屋敷内堅め居申候、千本之火之見番ヨリ、諸  
司代屋敷江注進致候処、若州ニは殊之外恐怖ニ而、搦米  
取集めに相成、屋敷内ハ不残小具足・陣羽織・後鉢巻し  
て、鎗・長刀拔身ニ而、鉄砲火繩ニ火を付、門口を堅め、  
千本之釣鐘式ツ宛打続け、早鐘打出し候ハ、我部屋々

々江火をかけ、直様入城可致様触流し有之、御城にも矢  
張上屋敷同様之用意有之、今にも敵寄来可申手当之由、  
御城井上屋敷之近辺を、火消一番組・二番組と敵重ニ見  
廻り候ニ付、上屋鋪近辺・町屋之分殊之外驚怖、太切之  
品、老人子供之類、外方江預ケニ参り、上を下へと騒動い  
たし候由、諸司代屋敷女子供之向は、西六条へ立退と申  
も有之、又加茂へとも上辺之寺院へとも申噂も有之候、  
薩州之御方十六日早朝ニ諸司代屋敷へ御出ニ相成、若州  
侯ニ直様面会之上、申入度儀有之趣被申入候処、俄ニ病  
氣之御断ニ相成候ニ付、家老江御申置ニ相成、直様近衛  
家江御出ニ相成候処、夜ニ入御退出、伏見へ御引取ニ相  
成申候、凡同勢百人位徒近習共袴も、だちを取、羽織ハ  
なく、下ニ着込を着し、大小落し指ニ而、一騎当千之有  
様、勇々數儀ニ御座候也、島津何某殿ハ四十二歳ニ而、  
当殿之御実父之趣、秀才賢明と申事ニ御座候、十六日ニ  
金紋先箱对之道具之御行列ニ而改め御上京之由、近衛家  
江御参上之趣、御供人数は京地へ千人、伏見へ千人、大

坂へ千人、兵庫之蒸氣船ニ三千人、都合六千人之趣、御上京之次第は今ニ相分り不申候へとも、風聞ニは交易不  
宜ニ付、公辺江度々申立候へとも、御取用ひ無之候間、  
公辺ニ而打払難出来候へ、国主之面々江引受払ひ退け  
可申候ニ付、何卒

御綸旨を頂戴之儀御願立ニ相成候由、

長州屋敷ニも殊之外多人数上り居り、急ニ屋敷内大造之  
家を立、追々人数并若者登り申候趣、兵庫辺ニは諸家之  
船沢山ニ参り有之趣、大坂屋敷ニは何れも多人数罷登り  
被居候趣、阿州侯伏見ニ御滞留之由、大坂より御迎ひの  
船度々参り候へとも、から船ニ而戻り候趣、阿州殿ハ京  
中を騎馬にて、大道せましと御通行数度ニ候、当時は薩  
州・長州両家ニ而外屋敷江ハ未上り不申候、

対州屋敷殊之外普請ニ而長屋沢山ニ立居申候、筑前之人  
数は播州明石大蔵谷ニ滞留ニ候由、異説ニは薩州様・近  
衛様御縁談之儀ニ付、御上京之噂も有之候へとも、是は  
違ひ申候、長州よりも多人数登り居、武器も追々白昼ニ

むき出しニ而登申候、

東洞院蛸薬師下ル町小森氏明家ニ御納戸方と表札有之、  
長持百七十棹有之、其向ニ旅方として金子七箱此分七長  
棹七島包(しつとごぎ)ニして有之、老棹凡二十貫匁余之様子ニ相見、  
当時の金目ニして凡一万両余も入れ有之候哉と見聞之者  
申居候、

十六日諸司代日夜敷敷堅メ居候趣

御所不残参内大評定ニ有之候由、夜九ツ時ニ退出之事、  
十七日早朝より宮門跡衆を始、公家不残惣参内也、

御所向々家来之者迄へも御触流し有之、右は比度薩州申  
立之儀は、諸司代方ニ而取静め可申間、決而心配致間敷  
候趣御触流し有之、大笑ひなり

薩州より申立之趣、十八日より八日之間諸司代より日延  
有之候趣、江戸表江伺ニ相成居候由、宿次急飛脚を以馬  
乗兩人早打参り候趣、十六日早朝より私門前を東下之早  
打三四度通行致申候、

十六日申刻より殿下急ニ参内之趣、先達而より中川と申

劍術者を被召抱、近習ニ致し被居候との由、  
江戸より長州侯出立ニ相成候筈之処、公辺より御引留有  
之、此度は宍戸美濃守と申人総大将ニ而登京之事、  
長州之京地総取締は、宍戸播磨と申人、先月より被登居  
候事、

廿一日より之風聞ニ 和宮様御台所之御取扱ニ相成候儀  
国守之面々一同不承知之趣、春御上洛無之儀なとも氣ニ  
入不申趣、

和泉殿近衛家へ御入之処、中山卿・三条殿其外両三人何  
欵御相談有之、暫御引留有之、即刻

勅使を薩州屋鋪江被下候との風聞之事、薩州・仙台・長  
州・肥後・筑前・肥前等也、同志之事外ニ阿州・土州其  
外沢山ニ候由、

筑前侯兵庫より御引返しニ相成候は、分家秋月表之殿様  
御死去之後、御家督ニ付国方大騒動致し申候ニ付、追飛  
脚参り候ニ付御引返と申尊ニ候也、

薩州此程諸司代江御越ニ相成、面会可致被仰込候処、又

々病氣之由断り被申立候へ共、押而面会有之候処、薩州  
より種々御訊問有之、右之返事若州侯相成兼、赤面閉口  
致し、万事久世氏存居候由被申聞候処、左候ハ、久世氏  
急ニ呼為登候様、京着迄致逗留居可申、其内ニは同志之  
諸家、登京可有之と申被聞候由、

近国之大小名衆も、追々堅めニ少々宛登京之趣、若州よ  
りも追々登り候由、昨日九州より登り候者ニ直々承り候  
処、兵庫表ニ而は蒸氣船数艘、諸大名之船数十艘、薩州  
船は殊ニ沢山ニ有之候、大阪城中も殊之外騒動之趣、伏  
見も同様之事、

しかし風聞は、兵庫は大、大阪は小、伏見は中也、京  
は大也と申候、以上は四月廿一日認、

廿三日九条村伏見之一件風説書也、伏見之者来り申聞候  
ニは、昨廿三日夕刻薩州家来之趣ニ而、凡七八十人計乗  
船ニ而登り、船宿江着致し支度致し被居候処、如何之事  
哉、拔身ニ而切合九人即死・二人深手之趣、残り之者は  
皆々登京也、右ニ付死人深手之者は薩州屋敷へ連帰り被

申候趣、其混雜之最中ニ大阪より伏見役所へ早打参り、  
尤夕前ニ一兩度参り申候、如何之事ニや一円相分り不申  
候、

薩州京屋鋪江は、夜五ツ時ニ大阪伏見之屋敷より早馬ニ  
而注進有之、又諸司代江も大阪伏見之役所よりも、早打  
早馬注進有之候処、早速薩州家江御掛合ニ相成候処、左  
様之者は一人も無之由申立被置、直様士分三十六人外ニ  
若党一人・提灯持老人凡百人計り、東洞院を下へ駆下り  
被罷越候ニ付、近所之町家ニ而は何事やらんと心配致し  
居申候、

九条村辺ニ而、何国之浪人共不相分候者五六十人出合候  
処、直様及切合、浪人之首六ツ打取候趣、薩州方は一人  
深手・六人薄手ニ有之候由風聞也、

此度は何国之浪人やら、又は内密やら、一向ニ相分り不  
申候へとも、洛中洛外さむらひにてつまり候も同前之事  
ニ有之、若州屋敷ニ而は愈恐怖也との事也、  
廿五日日光宮様御入洛之由、

廿七日は毛利殿同様之事、

去十五日伏見ニ而、のろしを上候一件は全く伏見役所ニ  
而は無之、元来諸司代屋敷ニ老狐住来り候所、何か普請  
事ニ付、右之老狐及び子供迄も殺し候ニ付、右之狐之所  
為ニ而、時々諸司代屋敷又は千本通り之辺ニ而、時之声  
を上、数千之松明を見せ、今や寄せ来る勢ひを变化致し  
候とも申候、

四月廿四日

四月廿五日京出之一信抄

偕此程より之京地之騒動、言語同断之事ニ御座候、薩州  
御人数追々相増、大坂表ニも夥敷詰合有之、伏見・京師  
都合人数四千五百人余ニ有之候由、然処当廿三日夜半、  
伏見薩州蔵屋敷之武士、同所寺田屋と申荷問屋方ニ而及  
刃傷、相手は何者とも相分り不申、薩州武士即死之者九  
人・怪我人四人何れも深手ニ而、当家師匠も伏見薩州屋  
敷へ治療ニ被参候、京・伏見薩州屋敷大混雜ニ而、早打  
杯は櫛之齒を引か如し、今ニも乱軍ニも可相成欵之様子

ニ相見へ申候。土州・長州人数追々登京有之候由、是は  
実説也、何事も後便ニ可申上候、

十六日薩州家近衛家江御上り、何欵御願事之ケ条等御聞  
込ニ相成、近衛家より奏聞有之候処、諸公家衆惣参内ニ  
而朝議有之、近衛家を以薩州江

勅答之次第は、即刻関東へ申遣候条有之、和泉儀暫時伏  
見江引退き、於同地滞留差扣可申との仰也とそ、

事、  
伏見へ退候様との儀ニ候へ共、実は京屋敷ニ滞留之

廿三日宿次早便を以被、仰遣候儀、但東海・中山両道出  
立登京可致、時宜ニ依り即答も可仕者任撰を以、差登可  
申候との御沙汰ニ候也、ケ様之由ニ而被申遣候由也、  
薩州より之上書は何も相変り候儀は無之、交易ニ付国弊  
之事を被申上候との事也、

一説ニは此頃公家衆一兩人割腹被致候との事も有之、  
薩州東洞院錦本屋敷近辺、凡四方三四町計りも町家不残  
薩州御家来之宿ニ相成申候、土州・長州屋敷も追々仮小

屋被立、混雜ニ有之候事、廿日頃より日々高瀬川を引船  
ニ而、薩州家武器を運送、其数を不知と現ニ目撃之者之  
噂也、

若州之評判も何分あしく、殿下殿も同様色々取留不申候  
風聞之、併京中は多分之武士ニ候へ共、皆々平穩ニ而町  
家之者も、今ニ而は恐怖も致し不申候事、

去三月中 和宮様御直書之一信有之候ニ付、直様入  
天覽、殊之外逆鱗ニ而、早速九条殿を被召候為とて、柳  
原殿

勅使ニ而、九条家江被参向候処、例之病氣を申立御断被  
申上候得共、柳原殿一向ニ承引無之、弥右様被申立候へ  
、寢所江踏込実否相札可申、時宜ニ依り手込ニ致し候  
ても、参内為致候杯と、堂上不似合之豪傑ニ而、居丈高  
ニ相成被申候ニ付、無抛九条殿参内、門迄姫路と若州と  
之柏土とも、両方ニ立ふさからせ参内有之候処、殊之外  
逆鱗ニ而、玉手を以九条殿之面上をしたたか御打擲有之  
候とも申候風聞也、

正月十三日頃ニ密々之儀なから、禁中不穩、日々惣參内同様之事有之、尤和宮様之一件と云、然して此度之事起り候ニ就而は、其頃よりの根さし有之候との事也との風聞也、

諸司代よりの兩伝奏江申上様、甚以西方之諸士ニ對して不束之事有之候故か、士氣弥増ニ震起いたし候との風聞、和泉殿とハ表立申候へ共、実は薩磨守殿(サマ)再生蘇生とも申、修理太夫殿とも申候風聞也と、以下道語不明了近國之探索使ハ一向ニ無之候由、迎も手本之周旋ニ迷惑候故、一向ニ掛合は無之候様ニ相成候との風聞なり、

宇和島・鳥取・浜田等も追々登京之由申候、

### 追続風聞

十七日島津殿近衛家へ御上り被成候処、中山殿・久我殿・三条殿御同席之処、別段建白も有之候へ共、右は一同御立会之上ならてハ開封難成旨ニ付、御口上ニ而被仰上候三ヶ条之事、第一は天璋院之儀は、何分卑賤之娘ニ而、一旦近衛殿御養女とハ乍申、一天万乘之至尊之御妹を子

と仕候儀、冥加ニ背き何共申上様無之、既ニ去春公辺江歎願致し、里方江引取隠居為致可申段申立候得共、取用ひ無之、和宮様御下向之儀は、主人修理太夫始一同、実以寢食不安、昼夜恐惶のみ苦心痛却不一方、此佯打捨置候而は、向後島津家相統之事件ニ相係り、後來之神罰空おそろしく、依之近衛殿へ御引取、其上拙者方へ御返被下度事、第二近来修理太夫身上不如意ニ而、必至之行詰り、其上諸色高直ニ而、上下參勤之路費莫大相嵩み、國元より大船を以運送人数等も、乗込み可申儀も歎願相叶不申、迎も兩三年此佯押張候而は、忽滅亡ニ及ひ、子孫断絶ニ及ひ候程之儀ニ而、向後は江戸參府は相断り、京都ニ四町余方之地面を拝領之儀、

勅許を蒙り、御当地迄無懈怠、主人常在京同様登京仕居、  
第一 天朝を守護仕

叡慮を安し奉り度、尤地面之儀は井伊先例も有之候事故、  
何分ニも

勅許を蒙り候而、江戸江は五ヶ年ニ一度、名代を以參勤

為致度事、第三ニは外夷渡来打払之儀逆も言路絶果、此上建白仕候所存無之上は、他家は不存候へ共、島津領分内江夷船渡来仕候へ、無二念打払仕度

勅許を蒙り度事、右は是迄領分内へ度々夷船渡来仕、奔命ニ疲弊、右ニ付而は百姓共へも多分難義を掛、農事之妨をなし候ニ付、此上是迄通り度々百姓共を驅使ひ候而は、御預り之民百姓とも各産を失ひ、忽ニ飢渴ニ及び候儀、前文之如く打払不申候而は、患之根切不仕候事故、此段

勅許を蒙り度段、願之事、右之三ヶ条ニ候処、御尤ニ被聞食、深き思召も有之候ニ付、先和泉儀は伏見江差扣可申趣、表向被仰渡候へ共、御内実ニ而は京地屋敷ニ而滞留、警衛第一ニ被仰付候由、

廿三日諸司代両伝奏之手を離れ、東海・中山両道へ宿次飛札を以て被仰渡候儀は、御用之次第有之候ニ付、年寄共之内兩人計り、即刻登京可致、時宜ニ依り、即答も仕候者、可然撰任致し、早速出立可致候事也との趣ニ候由、

廿三日夕伏見寺田屋と申荷物問屋ニ而、薩人刃傷有之、右は別紙ニ申上候へ共、後々承り候所正実之事故再応申上候也、

先年より諸方之浪士等、いづれも薩家を慕ひ参り居候処、見捨も不被致、心得違之段被解諭、向後改心致し、堅く慎ミ方出来候へ、御召抱ニも相成可申、先当分は改心御見届ケとして、大阪屋敷江被差越置、尚更改心仕候様堅く被仰付候、人数都而四十人也、此度和泉殿入浴ニ付、何れも歎願書差上ケ、御供被仰付度願込ニ候へ共、決而御聞届無之、右は一応国元主人江伺之上、召連可申間差扣居候様被仰示候へ共、是非共御供仕度由、再願申立候へ共、篤く和泉殿より教解有之、差扣罷在可申様被仰渡、各々遺憾ニ存し不耐堪忍、十八人亡命致し、上京之積ニ而各屋敷を出申候也、出奔之儀大阪町奉行江御達有之候処、スハヤ鬼神か出かけたると振ひ恐れて、早馬を以伏見役所諸司代江達す、諸司代恐怖畏縮して、取押之儀を京都薩邸江掛合有之候ニ付、取押之為メ多人数伏見江罷

向ひ、召連可申とて寺田屋へ参り、四方を囲み被申候処、十八之徒は同家之取押とハ不心得、公辺之召捕と聞違へ、元より望む所之奸賊とも粉菜(粉カ)微塵ニ致シくれんずと、夜陰と申及混雜候故、双方同志打ニ相成申候、即死手負人は其夜薩邸江連れ帰られ、寺田屋方之少も難儀ニ不相成様、神速希代之処置有之、壁・畳・建具・柱・天井・床等ニ至迄一時ニ仕替へ、以前ニ倍したる座敷となし被遣、当座雜作料として金百兩被遣、永代五人扶持ニ而御出入と相成、寺田屋之喜び世間之評判近頃無類之由也、

京都ニ於て屋敷四方之町家売家之分、尽く買上ニ相成申候、凡一倍半之価を増し被申候也、東洞院錦下ル所ニ日野屋徳兵衛と申者有之、近来内輪不如意ニ而、改革をも可仕相談之処、此度御憐愍を以五十貫匁之活券価之処、九十貫匁ニ御買上有之、誠ニ家内之喜び親類之大悦、日野徳は商業ニ勝手之場所江家をかひ、余り借財を返し、存外之大銀を得、元手となし候事実事也、同人より高恩忘却仕間敷、為永代御出入被仰付、何成共足手ニ相叶ひ

候儀ならハ、如何共相勤可申段敷願仕候処、神妙之心得也とて、永代二人扶持被下置候、又錦小路東洞院東へ入所、同屋敷之東隣りニ、二間半計りの桶屋有之、貧家ニ候へ共、薩州家屋敷取立より以前之旧家ニ候処、此度差上度段自分願出候処、四百八十金拜領仕候、此家は活券之価八十金よりハ、少も直打無之候処、存外之福を得、桶屋を相止メ外江移宅し、安心ニ外渡世を可致存居候処、薩侯より夫は心得違ニ付、外江参り候共旧業相改申間敷、格別之旧家ニ付残念ニ被思召候故、永代五人扶持被下、別段之御出入被仰付、新規御買上ケ之家屋敷之名代を相勤可申様被仰付候所ビツクリ致し、夢か現かと家内中難有涙而已ニ而、御屋敷之方を朝夕拜し居候由、是も実事也、

町家御頼之節、最初は御断り申上候所、此頃ニ而は了簡違ニ而、追々と御旅宿を願ひ出申候由、初は身重之方は一日ニ五十四、下部は菴朱と申御定之所、迷惑ニ致居候処段々承り候へは、朝夕は湯漬、午時計り一汁一菜ニ而、

炭・油・米・割木・茶等は薩家より被下候ニ付、丸でただ取同様之事也とて、弥難有がり大切ニ心を配り、実意を以宿相勤候故、薩州方ニも一分と休息被致候由、双方和合致し、家来衆ニも少も無体ケ間敷儀は無之、おとなしく慎被居候也、尤日々勘定ニ而貧なる者は商売を休ミ、薩家ニ而家内安心致し其日を送り申候、右様之処置有之候而、人心帰伏致し申候、洛中洛外は不申及、畿内近国迄薩州様之御蔭ニ而世が直り、夷船は打払ニ成り、諸色ハ下直ニなる由申候、都田舎ニ而も諸民之氣憤発致し、薩州様ならハ一命ハ少も惜からすと申、至而平穩人氣沈静也、此度江戸より役方上り不申は、何れ六ヶ敷有之候へ共、都は長州様・薩州様之御警衛故、枕を高くして寝られ候由、少も一向ニ氣ニ掛不申候、夫故米価も引上ケ不申候也、

薩州侯多分錢を持參有之、諸弘方正錢を以勘定被致候ニ付、私底之錢薩州近辺は錢多分ニ相成、町人共大ニ喜ひ申候、弘方は一両ニ付六貫八百文之立を以弘方ニ相成、

又宿を致し居候者、日々錢を払被申候ニ付、自然正錢多分ニ相成候故、薩州勘定方又は納戸方へ錢を売ニ參り候へは、壹兩ニ付六貫文之積を以買入被申候、凡壹兩ニ付八百文之利益有之候様取計被致候ゆへ、聊の事ニ而愚俗共喜ひ候杯人氣打合候也、

和泉殿は秀才之由衆人申候、何分人材多分有之候哉、都而之処置無抜目行届申候ニ付、薩州大明神杯と衆人申居候也、当時京地ニ薩州方は精兵千五百人は正ニ滞留致居申候高瀬川を引船を以、去ル四月中旬頃より今ニ運送相絶不申、大炮凡百挺余は持參有之、其余鎗・鉄炮は其数を知らすと云、国元より蠟燭師を多人數連レ被參、日々多分之蠟燭出来致し、刀鍛冶も甲冑師も大工并諸職人も其々連レ被參候事、

町家ニ止宿も、追々暑氣弥増相成候へは、難堪候ニ付、東本願寺境内を借受被申、逐日同地江小屋掛を致し、引移り被申候趣ニ相聞申候、

長州侯方も自分屋敷ニ凡七百人余り詰合有之、追々屋敷

内普請致被申候由、去ル四月廿八日ニは長州殿七貫目より九貫目位迄之大炮を車台共々七挺程、東洞院を四条へ、四条を寺町へ上ケ自分屋敷へ引込被申候、尤午前時分ニ而見物人多く、皆々愉快之色をなし申居候、立派なる事なる由、長州方は京都頭取は宍戸九郎兵衛と申人ニ有之、可然人物也と申、併ながら薩州とハ些滞り方行届不申儀も有之候由ニ申也、土州方より山内民部・同掃部之兩人去月廿五日頃自分屋敷江出張有之、多人数詰合ニ相成候処、大阪住吉陣屋江は国元より追々精兵渡来致し、武器も次第ニ運送有之候事、当時西国ニ於て、十八侯ハいづれも連合之由、右之内九侯は名代之重臣大阪へ出張有之候趣、筑前侯は去月十八日頃播州明石大蔵谷迄出張ニ相成候処、薩州より五人之早打参り候而、主人ニ相談有之候趣ニ付、右薩州之早打之士を召連れ直様本国江引取ニ相成候よし、

当時諸方之憤慨之浪士、いづれも入洛有之、公辺より探索も有之候へ共、長・薩・土杯唱へ居候事故、公辺ニも

致し方無之、勝手ニ差置被申候也、諸司代并九条家之評判殊之外悪敷、今ニも滅亡ニ及ひ可申様唱へ申候、

九は入道被致、若は割腹とも申風聞有之、家来島田左兵衛尉も永くは在命も有之間敷、血祭り之道具ニ遣ひ可申杯、有志之人は申居候、自分ニも少しは承知も致居候欤、武器杯用意致し、角力取を多人数抱置、警衛為致申候、彦根家永野義言儀主人上洛前より随従致し候所、当節も在京ニ而、密々紀州へ参り候由専ら風聞致申候、島田同様衆人悪み申候、対州屋敷も日夜修理有之候由、

長州若君去四月廿八日京着ニ相成、同廿九日自分屋敷ニ休息、晦日ニ御築地内廻勤之由、御内意を以山科之里ニ滞留致候様との儀ニ而、山科村西本願寺掛所を取繕ひ、本陣ニ致し、表向は病氣と披露致し滞居之事、是は長門守殿也、此勢凡精兵七百人計りと云、彦根家家之士も追々京都屋敷詰ニ相成申候、同人帰関後は、忽大津ニ於て壮大之陣屋取立ニ相成、江州ニ於て公料一万石過御預り

ニ相成可申内治定之所、機会を伺ひ機会ニ後れ、先當時は之の沙汰も無之候事、

日光宮入浴も道中ニ而滞留ニ相成、漸々四月廿八日ニ御着有之候、普通とハ行列違ひ、何欽心積りも有之候半と相見へ候へ共、是又機会を睨ひ、機会ニ後れ候て跡之祭りと相成、未タ参内も、勅許無之候由、又和宮様一件御取扱方之事ニ相係り候事也とも云、虚実は不知、

当月朔日総参内御退参は丑之刻ニ及候よし、

去四月廿五日頃彦根之留守居、諸司代江見舞ニ参り、主人ニ面会有之候処、若州侯は黒紋付次上下を着用致し、其下は腹巻・小手杯当て被申候、両袖又襟之辺より金物ちら／＼見へ申候故、彦根之留守居不怪只ならぬ御模様之由相尋候処、若州も初而自分之用意ニ気が付候哉、俄ニあり杯しめて両袖を引き手を入レ、是は其元入来迄調練致し居ながら面会ニ及ひ候連、赤面被致候也とぞ、是も浮たる事ニ非ず、如斯今ニ用心敵敷もはや死地ニ入居候由人々申喜ひ居候、九・若之両公は三歳之小児迄今も

打殺すべく、のゝしり居申候、

主上御英傑ニ而、去月中旬比より、御寵愛之御局杯皆々退けられ、奸婦之言路を忽ち御絶被遊候事也と、あなかしこ、去年三月比、御手許より黄金御下ケニ而御救ひ有之候一件、武辺ニ而相障へ、終ニ取用ニ不相成、都而御心得違ひ之由を申立、九条家へ返上等之事有之候、是が違背之終也と云、あなかしこ、

近来未曾有之一大愉快

去月廿九日頃之朝議ニ而、九条関白被召放、跡は近衛家江

勅任有之、当月朔日当時相国寺ニ於て、御籠居被為在候前栗田宮獅子王院宮様御事、即日御里坊江入御有之、即刻御参内有之、二日早朝以前之如く栗田青蓮院江御再任被 仰付候事、五年來之蓄憤散消、

近日中川侯も登京と申事、

勅命ニ依而水府九郎磨殿急登京可有之様被 仰付候との事、

四月廿三日伏見寺田屋ニ於て行違ひ有之候節、島津

家

有馬新七

田中謙助

柴山愛次郎

橋口伝蔵

橋口將助

森山敬右衛門

弟子丸龍助

西田直四郎

道島五郎兵衛

右九人即死

江仲右衛門

鈴木勇右衛門

同昌之助

森岡善介

山口金之助

大山格之助

右深手、外ニ一人奈良原喜八郎薄手、

是は秘密ニ而世間江は不知由也、

(裏ニ朱書アリ)  
「間違のみ多キ風説書」

冊子原寸 縦二四・三糎 横一六・五糎 二〇枚

三 京都伏見ニ於ケル隊伍編成及職分規程

御先手

一隊將御側役者人

但自身之手廻相付

一 相談役、御目付、御目付之間者人

一新番者人 旗預

足輕者人 旗持

足輕者人 貝吹

一 什長三人

一 戦兵三拾人

右、練銃之士たるべし、

御旗本

一 御側廻

御使番諸役者之外、惣而鉄砲相携へ、或得道具ニ而相

勤、

一 御小納戸者人、御旗預

持足輕兩人、

貝付与力足輕兩人、

一 御供目付、御目付之間兩人付足輕四人

御備立を檢察、下知し、且御軍使斥候を兼、

一中小姓

各鉄砲得道具ニ而相勤、

一什長三人

一戦兵三拾人

右、兼而大砲射方相心得候者御撰御持せ之大砲六挺御

預、若射手無之節は央ハ鉄砲ニ而可相勤、

御跡備

一御側役者人

手廻相付

一相談役者人

一新番者人、昇預

持足輕者人、

一什長三人

一戦兵三拾人

此内鎗長刀之練兵別ニ一隊組入べし、

游兵隊

一御小姓与番頭者人

手廻相付

一相談役者人

一昇預者人

持足輕者人

一貝付与力足輕之間者人

一什長三人

一戦兵三拾人

右何れ茂鉄砲

外ニ伏見江二番備

一隊将者人

御軍役奉行

一相談役者人

御仮屋守

一旗預者人

持足輕者人

一貝付与力足輕之間者人

一什長六人

一 戦兵六拾人

一 御小納戸奥御茶道頭取ニ而御徒目付、横目、夫々掛有之、御荷物并御膳所役人支配し、諸隊取払付足輕等相付、荷物其外賄方等迄を司る、

定

一 戦争可相成砌は、前以陪卒之儀、兼而大小刀帯居候者之外、惣而御国許江可差返、

但譜代之家来等ニ而無拋其身より戦場之供願出候者可

任其意、

一 諸人荷物之儀、銘々自負之外可焼捨、

但事緩ニ而随分可被持越砌は御荷物方、或取払之支配

たるべし、

一 行軍當中戰場共ニ我受持之場所を離れ、他之陣隊ニ入

交候者、雖有功不賞之曲事可申付、

一 進止之命令ニ背キ相働候者同断、

一 旗昇を始終之目当とし、貝ニ而繰出し、貝ニ而可引取事、

一 銃砲打出し、或切込候前、必折敷候而兵氣を令陰屈候

事、什長之見切たるべし、

一 勝敗之機存付候は善悪不相構間速ニ可申出、若私ニ人ニ語而衆聽を驚し候は可為曲事、

一 刀術精妙之輩たり共敵合遠、其業難相及間ハ鉄砲ニ而相働、既ニ得道具相用る場合ニ至而折敷強敵老人覘打其勢ニ而可切込、

右塩合ハ什長自身之働ニ而可命令、

一 隊將より以下戦兵輕卒ニ至而功否之品ニ隨而進退賞罰之式可嚴重、

一 陣場割渡之節、私之好悪不可申出事、

御手当

一 当御屋敷廻り并大坂御屋敷廻り等定府之内より為取馴者数多御撰、商人体其外色々形を變し四方ニ御差出し動静且世評時々申出候様御取計之事、

一 近火等之節為御逃場、四方余り不遠場所ニ三四ヶ所兼而より御借入相成度、東ハ本能寺、伏見街道ニは建仁

寺竹田通ニは地藏堂様之場所可然被存候事、

一出火之模様怪敷、其外何そ変事之節は、御供目付下知

ニ而両貝吹立、鉦・太鼓之間打廻らすべき間、聞付く

小屋くより得道具、鉄砲相提、兼而定之扣場ニ可馳

参、

但御先手は御本門前、御旗本は表御玄喚、御留守居玄

喚前、御側廻りハ表御玄喚より御中門内迄、御跡備

(稱荷カ)  
ハ荷稻前之御定、

一銘々御長屋より馳付候節は挑灯は什長老人ツ、ニ相限

候事、

一右同下人は荷物為支配、各跡ニ止め置、御徒目付等荷

物方之下知ニ任すべき事、

一繰出し合図ニは又々貝可吹立間、先陣より一勢ツ、可

行軍目当ハ昼ハ昇旗、夜ハ高張挑灯、巻隊ニ付巻張ツ

、

一惣勢繰出相済候後、時宜ニ從而御徒目付、横目、御小

人、足輕下知し御荷物を支配し、或諸人之荷物取払付

足輕、陪卒ニ持せ、又は人足江茂下知し而可相運、

右は至而尋常成出火之節成べし、

一方角ニ隨而御逃之場御定相成候は、御留守居并物頭兼

務、足輕数多引連先キ方取固め、且辻々ニ五人三人も

残置候様御手当之事、

一足輕之内丈夫之者御先ニ四人、御駕籠左右ニ兩人も棒

を突相付、御道払をなし、尚致邪魔候者は鉄砲ニ而可

相挫、

職掌

隊将

一自身之余勇を推而士卒之氣を激発せしめ、早ク勝負之

機節ニ通而旗昇具等之下知をなし、或我手廻ニ而諸士

之働を助る事も有べし、

相談役

一平日之要束、戰場之機會、真平隊将之參謀と成而諸士

之働を助、若隊将病氣、戦死等之節は自身代而士卒を

指揮す、

旗或昇預

一 押前ニは惣士之先ニ押立、足并徐疾ヲ令し、退軍ニは利地ニ主顯して衆之目当を示す、時宜ニ從而は隊將之下知を不待、自身之見切ニ而相決、旗は兵勢之大事關係する処故、仮ニも不亂様可相勤旨時々持足輕江下知シ、又は自身押行事も有べし、

貝付足輕

一 何時茂隊將相談役等之命令ニ從而可相勤、

什長

一 早ク隊將之下知ニ通し、自身之拳働を以組子ニ令する事を司る、

伍長

一 組中進退如一身相働事を司る、什長故障之節は老人關取ニ而其代可相勤、

軍使軍監兼斥候

御小納戸、御供目付  
御目付より可相勤

一 兵機勝敗之利を兼而心掛、能々主將之意ニ通して、間

ニは自身決断ニ而大事を議定し、且諸人之剛臆を見聞し、其情を審ニして後度之兵氣ヲ養べき道を言上し、斥候之節は賊之備立、人数之賦は勿論、其陽を見て其陰を察し、大将ニ言上して勝敗之機を助け、或は隊將戦死之節、其手不振興節は御下知ニ從而本陣より差越、残兵を下知して強敵を挫事を司る、

働前

一行軍中之変事は前後ニ非して左右ニ有べく、一方ニ非して二三方ニ有べし、故ニ変事差起候は其手近ニ有之候者共我一手之受持と心得、直ニ折敷覘打、或刀鎗ニ而相働、手ニ余り候様子候は外々より銃を以可相救、御側廻を空ニ成し、一方而已相助る事可為無用、將又行軍中之変事ニ而俄ニ利地見立、御逃相成候事も可有之筈候得共、先は掛り来ル賊を不殘打挫、尸中ニ御駕を奉安候心得肝要たるべし、

一 御先手・御旗本・御跡備三隊は一身如手足、游兵一隊別ニ横撃之備、伏見之一隊二之手之姿、所謂大小ニ從

而正奇要之御手配なり、

一御先手鉄砲廻合相始候間節ニ而御旗本、大砲組左右ニ張出し、一時ニ賊ヲ打挫キ乱るゝ処ヲ得道具隊ニ而切崩、或初より大砲隊は利地ニ備鉄砲隊と前後一時ニ賊を打御手配成べし、

但右外時々敵前ニ而勢節之御見定相付候砌、臨時御下

知可有之、

横帳原寸 縦一四・三種 横四二種 一四枚

〇六三 久光公京都滞在ノ勅書

右勅書拜見ニ付茂久公ノ仰出

二通

〇六四 大坂ニ於テ久光公ノ訓令

一五 毛利長門守ヘノ御沙汰書

薩藩ト協同尽力ノ事

〔編纂書〕  
「五月朔」

其元此度通行ニ付、暫於京邸滞在之様、頼 思食候儀は

元来其家之儀は、元就卿被重

朝廷候儀共ハ今更御沙汰も事新候、右等御由緒も有之兼々殊ニ思召も被為在候処、先達父大膳大夫戎夷跋扈、御国威逡巡之儀を被相歎、勤

王之志を主とし幕府を助ヶ至治之基本を被立度趣意ニ而柳營ニ申談之上公然と

公武之御問ニ被周旋、全く

叡慮之被為向候所、幾重ニも丹精可有之趣、以家臣長井

雅楽委曲之事情内々言上、国忠之段深

御満悦被為在候、然ル処雅楽儀俄ニ帰府ニ付而ハ大膳大夫建白之旨趣、未致徹底

御残念と

思召候処、幸其元上京ニ付而ハ父朝臣之深意ニ随ひ、程克周旋可有之

御依頼 思召候、此段内々可申達との

御沙汰候事、

但當時浪士蜂起鎮靜之処、内々島津江

御沙汰被為在候得共、其藩ニ属候輩も不少旨ニ付、同様取締并ニ方今非常之變、何時可生も難計形勢候、其節は薩州と力を合可、右鎮靜之計是又

御沙汰被為在候事、

文書原寸 縦一五・八糎 横一一三・八糎

### 一六 松平大膳大夫ヨリ幕府へノ建言

將軍上洛国是確定ノ件

外夷鎮撫 御国威更張之御処置ニ付而は、乍憚 公武御深意御合一ニ被為成、速ニ 御国是を被成御定、海内和協、御武威海外ニ輝候様被仰付之外有御座間敷と存付、越俎之罪を不顧、鄙意申立候処、猷芹之微志不被捨置、深重之 御内慮被仰聞、 御誠意を奉感戴、微志弥増不得止、於 京都堂上之御方々迄、前段之旨趣内々申上候処、恐多く茂被達

天聰、今般私儀上京仕候ハ、御沙汰之旨も可被為在由、

御密旨被仰下、冥加至極難有仕合奉存候、依之猶又熟考仕候処、不得止次第トハ申、私式外様之身分として、直ニ奉汚

天聰候段、甚以奉恐入候、箇様之儀自然列藩并草莽志士承及、天下之公論と存付候儀、事件ハ公儀を差置、直ニ朝廷江申上候而不苦様心得違、自己之了簡を以毎々上書仕候様成行候而は、識見之所及、人々小異有之、可奉感天聰、猶又 神州之御体は鎌倉以来幕府を被建置候付、列藩以下直ニ奉汚

天聰候而は、其事之得失は論ニ違無之、幕府を輕蔑仕候筋ニ相当、 御威光不相立候、幕府之御威光不相立候而は、列藩各

朝廷を戴き、 勅命を乞請、幕府を要シ、終ニ群雄割拠之勢を醸成シ、海内分裂、天下之公論も帰着する所無之却而外夷之侮を招き、御国威弥及衰弱可申候、乍憚 將軍之御職は、上

朝廷を御敬戴、下列藩以下を御鎮圧、天下之公論を被成

御総括候而、 叡慮御遵奉、御不悔之御手段被成御行届候様可被為在段、申上迄も無御座御事ニ付、今般 公方様御上洛、御国初之御先蹤を以、列藩予參被仰付、当時御初政ニ付、天下と御更始之思召を以、御国是如何相定候而可然哉、各存意申出候様被仰聞、列藩建白之旨趣御熟考、

叡慮被成御窺、 勅諭台命を以御国是御確定之御旨、列藩江被仰渡候へ、衆心和協御国威更張之御発端過之候儀は有御座間敷と奉存候、万一予參御断申上候欤、或は御国是御確定之旨違背仕候者有之候へ、 勅諭台命を蔑如仕候儀ニ付、無拠駭譴被仰付候は、申分有之間敷と奉存候、私儀速ニ上京仕、御趣意之大要申上ニ而可有御座候、重大之事件容易ニ申建候段、千万奉恐入候得共、神州御安危之境、此 御一挙ニ有之御事、且最前深重之御内慮をも被 仰聞置候儀旁ニ付、不得止申建候儀ニ御座候間、不惡被聞召分可被下候、以上、

五月二日

松平大膳太夫

〔朱〕  
「壬戌欵」

冊子原寸 縦二六・三糶 横二〇糶 二枚

二七 田中仲右衛門ヨリ小松帯刀へ

讃州高松侯入京ノ件

〔端裏書〕  
「五月六日欵」 「壬戌」

五月六日夜

壬戌

今日致承知候ケノ所上京之模様、早々手を付候処、讃州高松松平讃岐守様、来ル八日京都廻ニ而伏見駅江通行之段、表向先触へ無之候得共、伏見大津内々手当有之処、今日俄ニ水口より着京相成様、日限相替候由、右之關合致御付合、亦全体伊賀路かため、七条かたきと申陣屋兼而受持之由、先滞京之模様ニ聞得申候、罷出御届申上答御座候得共、風邪氣ニ而伏居候承得候形行早々申上候、余は追々手を付可申上候、以上、

五月六日

田中仲右衛門

小松帶刀殿

文書原寸 縦一六・五種 横一〇九・二種

〔六〕 諸大名ノ江戸参觀交代往来日限控書

〔端裏書〕  
「五月七日」

三月三日

豊前小倉  
一 小笠原大膳太夫様

江戸より御国江

同日  
長崎御用  
御目付

一 妻木源三郎様

江戸より長崎江

同日  
肥後熊本

一 細川越中守様

江戸より御国江

同日  
因州鳥取新田

一 松平伊勢守様

右同断

同日  
大坂町御奉行

一 鳥居越前守様

江戸より大坂江

同日  
肥前小城

一 鍋島加賀守様

江戸より御国江

同日  
肥前佐賀

一 松平肥前守様

右同断

同日  
雲州松江

一 松平出羽守様

御国より江戸江

同日  
肥後宇土

一 細川主米輔様

江戸より御国江

廿一日  
肥前唐津

一 小笠原佐渡守様

右同断

同日  
讃州多度津

一 京極老岐守様

御国より江戸江

廿二日  
予州宇和島

一 伊達遠江守様

右同断

同日  
播州三日月

一 森伊豆守様

右同断

廿三日  
予州小松

一 柳兵部少輔様

右同断

同日  
予州臼杵

一 稻葉伊予守様

右同断

同日  
日向高鍋  
一 秋月佐渡守様

右同断

廿五日  
肥州佐賀  
松平肥前守様御隠居  
一 松平閑叟様

江戸より御国江

同日  
和州柳本  
一 織田筑前守様

御国より江戸江

四月十一日  
摂州三田  
九鬼長門守様御隠居  
一 九鬼松山様

右同断

十六日  
阿州徳島  
松平阿波守様御嫡子  
一 松平淡路守様

江戸より御国江

五月二日  
豊後岡  
一 中川修理太夫様

右同断

五月三日  
紀州  
御名代  
一 堀田加賀守様

江戸より紀州江

五月九日  
豊後日出  
一 木下飛驒守様

江戸より御国江

右之通御座候、

同日  
讃州丸亀  
一 京極佐渡守様

右同断

同十三日  
備中岡田  
一 伊東播磨守様

右同断

同十五六日比  
肥前島原  
一 松平主殿頭様

御国より江戸江

五月九日  
播州赤穂  
一 森美作守様

江戸より御国江

五月十六日  
備中足守  
一 木下備中守様

右同断

右之通御座候、以上、

五月六日

文書原寸 縦一五・七糎 横一一七・一糎

又 勅使関東へ差遣ノ仰出

(端裏書)  
「五月六日夜」

頃日差懸不容易御用被為在候ニ付、当月中旬発足ニ而関

東江

勅使被差下候、此段早々可申達被

仰出候事、

但尋常之儀ニ候ハ、關東御往復之後被

仰出候得共、非常火急之儀ニ付、先文之通被

仰出候事、

文書原寸 縦一七・五糎 横四四・二糎

## 堀二郎ヨリ在国ノ重役ハ

幕政改革勅語ノ漢訳

〔端裏書  
五月七日堀〕

夫、謂 皇統之長与天壤無極、則祖宗之遺言、子孫之所宜繼体也、戎狄窺上国以来、幕吏失措置、变故四出、天下騷然、忠邪異位、因仍至於今日、旧冬從幕吏之乞、枉降和宮於關東、幕吏連著曰、十年内必成攘夷之功、然以往日觀之、未知其信然、日憂国体之傾、月懼金甌之欠、上恥於 祖宗、下愧於蒼生、昨臘 和宮之尚於關東也、使千種少將・岩倉少將、諭大赦之事、且告曰、国内之政仍於旧、一委於關東、至乎外国之事、則事件重大也、凡係

於国体者、咸問於 朕、而后取決、又示曰使撰外藩之諸侯二三人、管轄外夷之処置、而幕吏未施行之、夷狄日陸梁、国威就衰頹、焦思苦心、日又一日、何凶、近頃列藩頻獻密議、如薩長、則親来乞 命、而山陽・南海・西国、忠勇之浪士、雲集蜂起、窃奏曰、幕府之有司、奸徒日多、正議掃地、蔑如 王家、親睦戎狄、物貨濫出、国用困竭、今而不改幕府之政、則終有不量之殃、有請屠条城拔華城者、有請拋華城留 駕於函嶺、匡幕吏之罪者、或有請絕太平之脈、断然建義旗者、又有請不眷顧幕府、忽布掃攘之 命於五畿七道之諸侯者、衆議雜集、雖有如過激者、皆出於忠誠憂国之至情、 朕未決其可否、先使島津・毛利鎮靜之、於是乎、欲下大赦之令、且諭 朕意、召幕老吏久世大和守、然往復日滿、未告唯諾、反於關東、受昨冬之 命、行大赦之事、雖如頗可欣、 朕意固未滿、列侯浪士之怒未全和、夫大樹幼弱、何罪之有、幕吏苟且、撫馭失術、国体之頹、立而可待、 朕深憂懼焉、偷一日之安、而忘百年之患、非聖賢之遺訓、宜内修文德、外整

武備、決然謀恢復之功、朕於此斟酌衆議、取中道、欲使  
 徳川再興祖先之業、張天下之綱紀、窺觀覽宇内之形勢、  
 了察人心之偏向、而策決於二事、使市橋刑部卿為後見、  
 越前先中將為大老職、輔佐大樹、任内外之政、則無綱維  
 墜於地之憂、不然、則做豊臣秀吉之故事、使沿海之外諸  
 侯為五大老、咨決夷狄之処置、其人、則東伊達、西島津  
 而南北前田・山内、中国、則毛利、使此五国成鼎足之勢、  
 輔助幕府、則環海之武備、確然堅実必有掃攘夷狄、挽回  
 国体之期、朕意決於此矣、除此二事之外、雖有他日相  
 繼而乞命者、決不可許也、若做朝下命於某、夕變於某  
 之覆轍、則朝威不可立、而功業不可成也、故欲下勅使  
 於關東速施行此二事、汎詢諸群臣、公卿百官無所忌憚、  
 各沃卿心丹、速奏讜言、副朕意、

文書原寸 縦一六・一糶 横一五〇・七糶

一五 近衛忠房卿より島津和泉殿へ

近衛忠熙卿関白宣下之件

(包紙ウツ書②)  
一島津

泉州とのへ 忠房  
内密要用

緘

(包紙ウツ書①)  
一島津和泉とのへ

忠房  
内用早々

五月十日

(封紙ウツ書)  
一島津泉州とのへ

忠房  
内密早用

緘

尚々中山忠左衛門より承候条、承知仕候事、

弥御勇健珍重ニ候、抑過刻ハ中山忠左衛門入来ニ而、何  
 か承知仕候事ニ候、実以

前左府兎角御逆上強、唯今ニ御平臥と申様成御事、当職  
 辺之御沙汰、段々在之候得共、兎角之御所勞、自然弥御  
 逆上強御発ニ而ハ、中々御用御伺被成候事も難相成義、

忽

朝廷之御不都合ニも相成候義、且ハ両度迄以一封、言上

ニ及置候通之御次第ニ而、実々御痛心被成候事不一方、甚御心配ノ御事ニ候、乍去

朝廷よりハ御進、其元より茂是非ノ事、実々病根ニも可相成哉ト不一方御案思ニ候ヘ共不得止事、先弥御請可被仰上御様子、乍去兎角御逆上強、近来御所勞勝之御事兩三月ナラテハ御請モ実々難被成、其上達而トノ御事ニ而ハ御用ハ差置、不慮ニ御逆上強御発モ難計、是ハ於忠房モ痛心之事ニ候、何レニ三月ト申処、屹と正親町三条辺ヘ其之御出座ニ而、御歎願之程幾重ニも御頼申入置度、左無而ハ逆も御請ハ御陸ケ敷存候、不惡御組取被下御取計頼入候、且又前左府還俗被 仰付候ニ付而ハ、過日來も申入候通、鷹司前右府公モ同時ニ還俗被 仰付候辺ニ不相成ハ、全

朝廷御政事片手落ト申モノニ而、俗ニ申エコヒイキ之様ニ被存候候、是モ御申立之程御頼申入候、過日若州ヘ

御尋ニ相成候処、前右府公ハ還俗、久世上京之上ニ願候由、甚是モ如何ニ被存候事、夫ヲ

朝廷ニ而 御聞置其候ニ而ハ矢張閑東是迄之所置半分ハ御用ヒノ様ニ相成、衆人如何之御所置と脚而

朝廷御不外聞之御事、何卒篤ト正親町三条ヘ御申立御頼申入度、先ハ乱書ノ御推覽頼入候也、

五月十日

文書原寸 縦一八糶 横一七二・五糶

(別紙)

明日申刻頃ニ中山忠左衛門入來之程、御頼申入置候

也、

文書原寸 縦一八糶 包紙原寸 縦三一・一糶

横一四・二糶 横四二・七糶 二枚

一五 近衛忠房卿ヨリ久光公ヘ

忠熙卿閑白就任ノ件

本文書ハ一九一号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一七・二糶 横一〇七・八糶

一六 薩長二藩ノ奮起ニ就テ 筆者不明

(表紙)  
一奉呈

拙稿

廻天秘策

或処ニ有志ノ匹夫共寄集リ、外夷ノ類ニ跋扈シテ国威ノ日ニ衰弊スルヲ互ニ切齒扼腕シテ物語シケルハ、此頃薩州公人数若干人ヲ引連レ蒸氣船ニテ兵庫ニ至リ、上陸シテ江府へ趣ントスル折節、諸国ノ浪人共夥數大坂・京師・伏見ニ徘徊スル由、若ヤ輦下ニ於テ干戈ヲ動サンコトヲ遠慮シテ、天朝ヨリ薩州公ニ其取押方ヲ命シ、姑ク京師ニ逗留アラシムル由、長州侯ノ嫡子松平長門守此モ(毛利元徳)同ク逗留アリテ、清和門ノ警衛ヲ申受タル由、所司代酒井若狭守本国ヨリ夥數人数ヲ召寄せタル由、筑前侯參府ノ道中播州ヨリ引帰シタル由、其外諸説紛々、更ニ其実情ヲ得ス、併シ其述ニ就テ深ク此ヲ考ルニ、薩長二公依然トシテ京師ニ逗留スルハ、私欲ノ念アルニ似テ、天下後世ヲ憂ヘサル者ニ似タリ、子細ハ当今ハ天正以前海内割拠ノ時ト違ヒ、五大洲ニ群雄各区ヲ守テ互ニ盟主ヲ争

ノ形勢ナリ、然レハ当今有志ノ人々ハ、一己ノ欲ハ姑ク置テ、飽迄モ天朝ヲ尊ミ幕府ヲ助ケ、諸侯ヲ鼓舞シ、人傑ヲ興起させ、日本国威ヲ五大洲ニ耀セ、後世迄モ其弛ミ無ヤウニ籌策ヲ廻スコト肝要ナリ、夫故薩長二公誠実ニ天下後世ヲ心配アラハ、各国同盟ノ諸侯ヲ催促シテ、其中ヨリ有志ノ者ヲ出シ、此等ト申合せ、外夷ノ処置ト内地ノ改革天朝幕府ニ強ク歎願ヲ申立ヘシ、其大略ハ外夷交易此假ニテ、果ハ如何仕ル積リカ、国ヲ挙テ彼ニ付属スルノ積リカ、左モアラハ彼カ先鋒ヲ勤テ征役ニ従ハサルヲ得ス、又彼ノ注文ニ任せ、我必用ノ物ヲ海外ニ投ス、彼此以テ内地臣民必ス困窮ニ及ヘシ、爰ニ至テ窮民所々ニ萌起セハ、何ヲ以テ誅伐スヘキヤ、畢竟彼ハ過分ノ利ヲ交易ニ貪リ得テ、又過分ノ利モ他國ノ民心ヲ収ルニ施ス、故ニ我國産彼カ求ニ応シテ弥彼ニ遣セハ、其遣ス程ツ、我民ノ困窮ヲ増スヘシ、此窮ヲ待テ彼ヨリ財ヲ散テ我民心ヲ収ム、此ニ加ルニ耶蘇ノ妖教ヲ以テ且威シ且導ク、於是乎赫々

神州ト雖モ□クハ変シ□「有トナル、此□ニ及テ如何□  
置シ玉ヤ、若又姑ク彼ノ言ニ從ヒ、其間ニ我武威ヲ強ク  
シテ、遂ニ東海ニ独立スル積ナラハ、何故其仕向ノ手始  
ナキヤ、譬ハ裏町小屋ニ住居スル五合カ一升ノ米ヲ其日  
毎ニ求メ、炊テ其時々々ノ腹ヲ肥シテ世ヲ渡ル者ト、全  
ク同様ナルハ何事ソヤ、今ノ国体ニサヘ儒神仏杯ヲ頭取  
トシテ、色々様々ノ余流末派ノ宗門争ニテ喧嘩絶ルトキ  
ナシ、今又耶蘇ノ妖教浸入セハ、天下ノ人心分散シタル  
上ニ、又モ手痛ク惑乱シテ、必宗門ノ論ニ兵革ヲ用ヒ、  
万民ヲ苦メルニ至ルヘシ、故ニ当今ハ儒仏トモニ流派ノ  
数ヲ減スルトモ増スコトハ甚タ国家ニ害アリ、去レハ飽  
迄モ耶蘇ノ浸入ハ防ネハ叶ハヌ事ナレハ□「ヲ復興スヘ  
シ、其外ニ交易ノ品物□「和ノ頃ナレハ、戦国ノ後器物  
不自由ナ□「外国ノ物アルトモ、格別ノ害ニモ成マシ方  
□「二百余年用具玩器ノ類奇ヲ出シ、新ヲ競フテ其数ヲ  
増スコト、近ク申サハ我故郷ハ田舎ナリ、五十年前ハ  
百軒計リノ村中ニ吸物椀膳一組位ナリ、今ハ家毎ニ二組

ヤ三組ハ所持スル、少々富有ノ家ニハ七組ヤ十組ハ所蔵  
ス、其他ハ此ニ準シテ知ヘシ、此沢山ナル道具ノ中ニ、  
又モ外夷ヨリ無用ノ玩具ヲ受込テハ、甚以テ宜カラス、  
今書肆ニ何程金銀自由スルトモ、勝手次第ニ書籍ノ板行  
ヲ許サザルハ、此天下人民ニ正言善行ヲ勸メテ邪淫乱行  
ヲ禁スル所以ナリ、今外夷ノ品物勝手氣假ニ直売買ヲ許  
サルトハ、書肆何ニテモ角ニテモ勝手次第ニ板行ヲ許ス  
ニ同シ、此其一端ニテ諸事万端此ニ準シテ、取シマリ無  
ク成行テ、国ニ紀綱ト申者ハ有テモ無ト同様ナリ、国ニ  
紀綱ノアルハ、田地ニ畦畦アルト全ク相似タリ、夏ハ此  
ヲ以テ□「水ヲ畜□「食ク冬ハ外ノ水ヲ防テ麦ヲ作ル  
試ニ広野一面ヲ一枚ノ田地トナサハ、経緯ノ畦畦ヲ除テ  
格別畝歩ヲ増テ利ヲ収ムルニ似タレトモ、土地ニ高卑ア  
リ、水ニ順逆アリテ乾燥潤沢其宜ヲ得サレハ、五穀ヲ生  
熟サセルコトハ所詮出来ヌナリ、且又惣シテ人情ハ趨ク  
所愈広ケレハ、情愈分レテ薄クナル、此ヲ古ト今トニ徴  
シ、田舎ト都会ト照シテ分明ナリ、往古ハ人皆淳朴ナリ

ト云ハ、情ノ趣ク処狭ケレハナリ、後世程輕薄伶俐ナレハ、情ノ分ル、処広キ故ナリ、都会ト田舎ノ相違ハ今日世人ノ見テ知ル所ナレハ、此ヲ以テ人物ノ古今ト情実ノ厚薄トヲ計知スヘシ、故ニ淳朴ノ風ヲ起サント欲セハ、紀綱ノ咳哇ヲ嚴重ニシテ、中人以下ノ者邸内ヲ出ルモ又外人ノ入闕スルモ堅ク禁スヘシ、十歳ヲ歴テ其風必ス一変シテ淳朴ノ古風ヲ起スヘシ、殊ニ此頃ハ格別外夷ノ辺ヲ窺フ時勢ナレハ、格別ニ紀綱ノ咳哇ヲ丈夫ニ設サレハ、所謂冬ハ外ノ水ヲ防テ麦ヲ作ルコトモ、夏ハ内ニ水ヲ畜テ稲ヲ養コトモサツハリ出来ヌ也、去レハ前申通り邦内宗派ノ許多アル上ニ又モ耶蘇ノ浸入アリ、品物モ箇程汎山ナル上ニ、又モ外夷無用ノ玩具ヲ受込ミ、又趣ク処ノ多キ万民ノ人情ヲ、又モ外夷諸蛮ニ趨セテハ、所謂國々紀綱ト申者有テ無ト同様ナリ、是故ニ外夷ノ処置ヲ付テ当今ノ振合ヲ是非一變セテハ叶ハヌ也、此ヲ一變スルニハ、内地ノ改革ヲセテハ、所詮外夷ヲ威服スルコトハ出来ヌナリ、子細ハ將戲ヲサスニ盤ノ節目ナケレハ如何ナ

ル名人ナリトモ、駒ヲ使コトハ出来ヌナリ、仮令其筋目分明ナリトモ、王ノ場ニ歩ヲ置、飛車ノ場ニ桂馬ヲ置ク様ナルコトニテハ、此亦如何ナル上手ナリトモ、決テ將戲ハサ、レヌ也、サレハ 天朝 幕府天ニ代リ人ニ代リテ將戲ノ駒ヲ並へ、駒ヲ使ハネハ成ラヌ御職分ナレトモ、此モ諺ニ申通り、当局ニ失テ傍觀ニ得ルトアレハ、薩長二公如キ具眼ノ人々ヨリ駒並へ駒使ヲ手伝助言セスンハ有ヘカラス、先以テ飛車ノ場ニ飛車ノ働キ出来ル人物ヲ出シ、王ノ場ニ王ヲ置キ、角行ノ場ニ角行ノ働キ出来ル者ヲ出シタルコトナラハ、外夷ノ所置ヨリ内地ノ改革ハ他ヨリ世話セズトモ、其場ニ居ル駒ハ其場ノ働ラスレハ、自然弊政ハ一新スヘシ、是故ニ我等所願ハ薩長二公京師ノ警衛ハ暫ク所司代ニテモ、近境ノ諸侯ニテモ託シテ、此ヨリ直ニ出府アリテ、各国ノ諸侯ヲ催促シテ有志ト連判シテ 幕府ニ手強ク、外夷ノ処置ト内地ノ改革ナクテハ不叶ノ次第ヲ申立ヘシ、或曰、若薩長申合せテ諸侯ヲ催促スルヤ、曰、六十六余州許多ノ諸侯イカニ深宮ニ長シテ馬鹿物多キトテ其内三四ノ相応スル者無ヲ得ンヤ、弥以テ一人ノ相応スル者無トキハ、

薩長二公ハカリ  
ニテモ可也。

爰ニ至テ有司当路ノ人々固ヨリ斗筭ノ輩、婦人ノ脚上ニ  
生長スル者、其事ニ臨ミ変ニ処スル任ニ堪ヘサルハ、小  
児ニ重荷ヲ持セタルト同様ニテ、銘々切腹スルカ虚病ヲ  
構テ隠居退役スルヨリ外ハ詮方アルマシ、跡役ニ人材ノ  
出ルヲ待テ万事其人ノ心任せニスルトモ、又我存念ヲ呈  
露スルトモ勝手次第ナリ、或曰、若申立ノ筋聞入ナク、彼是姑  
再三押返シテ否ノ答ヲ語テ、若モ聞入ナキト見ハ、卒起突発シテ其巨魁  
ヲ殺戮シ、其余是迄外国掛リ夷人ト親ヲ通シ、他日彼方援兵ヲ借受テ、  
己カ威光ヲ張ント欲スル者ヲ誅伐シ、早々京師ニ馳登リ、天朝ニ其趣  
ヲ奏聞シ、幕府ニ異心ヲ狭ミ可申ノ訳ハ無之由ヨリ、公武御合体  
全国一心外夷防禦ノ手当ヨリ、諸有司各其任ニ堪ヘタル人材ヲ旗本家門  
三家中心外夷撥擲スヘキ旨ヲ天朝ヨリ、幕府ニ御指図有度由ヲ奏聞スヘシ  
浪人志士ノ仕業位ニテハ、仮令井伊、安藤ノ異変ニ勝ルトアルトモ、  
恐クハ小人位ヲ窃ム者自カラ退役シ、賢者徳ヲ積モノ進出スヘシ、何様  
諸説紛々、更ニ其実情ハ各国共ニ当路小人ノ密合計リ承知シテ、有志慷慨  
慨ノ聲ニハ決テ洩ラサナリ、畢竟手元ニ火ノ焼付迄ハ一日一刻ノ富貴  
ヲ貪ル姑息ノ風留ナレハ、今シモ国家烈火ノ灰ト成コトヲ知ラス、是故  
ニ此節ハ是非ニモ薩長二公骨ヲ折テ、周旋奔走有度事山々ナリ、況ヤ其  
臣下ニ連レ人々ハ、飽迄モ豹変龍変シテ主君ヲ輔佐セテ叶ハヌ時節ナリ  
且又所謂巨魁奸賊ヲ倒スモ惟此時為然、何則今ヨリ七十年ヲ歴テハ、幕  
府成人スレハ有司ノ輩自己ノ奸智モ、幕府ノ直命ナリトモ、詮方アル  
マシ、今一二年ノ間ナレハ、仮令其直命ナリトモ、未タ其乳臭ヲ免レサル  
ルコト、征夷ノ任ニ堪ヘサルコト、天下共ニ此ヲ知レリ、殊ニ井伊・安  
藤ノ前鑑モアレハ、有司威光ヲ振テ奸計ヲ逞スルコト能ハス、去レハ今  
ヨリ二三年ノ間カ有志ノ諸侯是非共ニ、去レハ薩長二公誠実ニ天

下後世ヲ心配アラハ、此位ノ周旋奔走アリテ宜シカルヘ  
キハ勿論ナリ、併「」年間ノ如キ内地ノ中ノ内地ヲ争フ  
小利ニ目ヲ付ケテハ、大ニシテ徳川氏ニ代リ小ニシテ日  
本半分カ三ケ一モ、暫時手ニ入レハ充分ナリ、所詮生涯  
ノ智恵ヲ振トモ、日本国威ヲ五大洲ニ耀スコトハ思モ寄  
ラス、悪クスルト内乱ノ釁ニ乗シテ、外夷大挙シテ来ラ  
ハ、彼賤キ吝嗇ナル者カ珍果ヲ得テ、自己ニモ食セス、  
人ニモ与ヘス貯置テ鼠ニ食ハレタルト同様ニテ、百歳ノ  
後ハ必ス鼠輩ノ正朔ヲ奉スルコト、唐山ニ相類スルハ必  
然ナリ、去レハ薩長二公天正年間ノ如キ細利小欲ノ念ナ  
キハ、最モ宜シ、仮令此迄其念アルニモセヨ、弥以テ天  
下後世日本ノ為ヲ思ハ、其念ヲ廢テ大公至正、天朝  
ヲ奉シ、幕府ヲ輔ケ諸侯ヲ鼓舞シ、人傑ヲ興起させ、所  
謂將戲ノ駒並ヘ、駒使ノ手伝助言有度事ナリ、聞、昨年冬幕府ヨリ五  
ヶ国へ使者ヲ遣リテ三年ヲ歴テ帰國スル由、弥実説ナレハ、其使者ノ婦  
リテハ彼臆病未練ノ蘭學者流、本邦ノ本邦タル処ハ不案内ニテ、只管彼  
ヲ稱揚スレハ、其煽帆ノ無キ間ニ有志ノ諸侯東西奔走アリテ、飽迄モ幕  
府、天朝ノ奸佞ヲ斬テ正義忠直ノ臣ヲ助ケ、内地ヲ改革シテ、予メ外夷  
ヲ処置シテ、五ヶ国へ巡勤スル、殊ニ此頃ハ、幕府幼年ナレハ、  
使者ノ婦ルヲ待度コトナリ、

「□」教育ヲ加ヘテ征夷ノ大本ヲ建ツヘキ時節「□」此佞因循姑息ニ成長サセテハ誠ニ日本ノ「□」甚以テ覺束ナク思ナリ、此モ寛永年間ナラハ本多正信カ秀頼ヲ段々婦女遊妓ヲ以テ、愚物ノ上ニ耳目ヲ愚ニシタル報ト思ヒ、打捨置テ其幼年ノ氣随ヲ養ヒ、暴悪ヲ強クシテ一挙シテ徳川氏ニ代ル計策ナラハ、源氏ノ平氏ニ代リタル同様ニテ、均ク日本ノ人同シ 天朝ノ皇胤ナレハ、何レノ命令ヲ奉スルトモ、格別ニ相違ハアルマシキ歟、方今ハ五大洲割拠ノ時勢ナレハ、日本モ國中ニ私欲ノ小利ヲ働ク者多ケレハ、外夷ノ正朔ヲ後世ノ天下万民ニ奉セシムルニモ押移ランカト遠慮ヲ廻セハ、中々一家一国ノ小利害ヲ論スヘキ時勢ニ非ス、若モ 幕府成長シテ、所謂物教奇杯ノ僻アラハ、外ヨリ駒並ヤ紀綱ノ助言指図ハ、所詮出来ヌナリ、嗚呼今ヨリ二三年ノ間カ大切ノ時節ナリト、兼テ窃ニ評議スレトモ、匹夫ノ我等如何ニセン、尺土寸壤モ無レハ、一処ニ永住シテ民心ヲ収テ報國ノ志ヲ達スルコトモ出来ス、上ニ向テ言路通セネハ、仮令千慮万思スル

トモ、何ノ益モナク、功モナシ、下ニ臨テ未タ妻妾トテモ無レハ、美婦人ヲ穿鑿スルニ、折節見当レトモ、浮浪ノ身分ナレハ婦人ヨリ情ヲ我ニ通スルトモ、其父母我ニ許サ、レハ詮方ナク、惟同氣相應シ、同声相和シテ、匹夫同士折々寄集リ、國威ノ時々衰弊シ、外夷ノ日々跋扈スルヲ、切齒扼腕スルハカリ也、扱以前ハ天下ノ諸侯士大夫ト申モノハ、深宮ニ生シ婦人ノ膝上ニ長スレハ、一段位階ノ上ニ升ル程、芝居狂言ニスル通り、丸テ馬鹿物ト思タルニ、此度薩長二公ノ所業未タ詳ニハ知サレトモ、殆將有為ノ明主ト見ヘタリ、其臣下ニ在ル人ハ、各其材智勇武ノアラン限リハ、其「□」受テ其力ヲ尽スコトヲ得ハ、実ニ我等浮「□」四海婦スル処ナキ身分ヨリ見レハ、誠ニ「□」思ハレタリ、去レハ我等モ此明主ヲ「□」頼ム方トテモ見ヘサレハ、唐突ナレトモ此「□」ニ謁シテ宿念ノ聊含蓄スル処ヲ吐露セント欲ス、併シ憚ル所アレハ筆ヲ取テ其趣ノ荒増ヲ書認タル頃ハ、文久二年戊夏五月上旬ナリ、

〇二四 近衛忠房卿ヨリ久光公へ

三郎ト改名ノ件

尚以近々ニハ面謁と待入候也、

唯今忠左衛門へ申聞ケ候心得ニテ申落シ候、然ハ前左府御事奉從

元 近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ

二通

久光公改名及忠房卿関白宣下ノ件

〔付札〕 文久二年五月十一日 忠房公ヨリ

二通 一通、唯今忠左衛門招寄候儀ハ、其元呼名和泉之処、於關東若中水野和泉守も有之、呼名御改ニ而ハ如何、殊ニ

三郎と被改候へハ尚更之事云々、

一通、唯今忠左衛門申聞ケ心得ニテ申落シ候、然ハ前左府御事從、勅約御請被仰上候事、就而ハ直様御住被致候

管ナカラ、家内之都合茂在之、且ハ桜木町隠殿云々、

」

家内之都合茂在之、且ハ桜木町隠殿モ出来ニ候へハ、当月十七日ニ隠殿へ一先転居被致、尚亦関白 宣下日限治定之上、御用辺ニ依テ、本殿へ当職中逗留と申者ニテ、帰住被致度御事ニ候間、為念右モ申入置候也、

五月十一日

文書原寸〔折紙〕 縦一六種 横四五種

〔包紙ウツ書〕 一島津和泉とのへ 忠房

一九五ノ二 〔封紙ウツ書〕 一泉州とのへ 忠房

〔付箋朱書〕 『三郎ト改名一件』

」

口述

一九五ノ一 〔封紙ウツ書〕 一泉州とのへ

忠房」

唯今忠左衛門招寄候儀ハ、其元呼名和泉之処、於關東老中水野和泉守モ在之、差当如何ニ被存候間、呼名御改ニ而ハ如何、殊ニ三郎と被改候へハ、尚更之事ト存候、仍

右之辺申入度、旁忠左衛門入来御頼申入候事ニ候、

五月十一日

文書原寸(折紙)

縦一六種

包紙原寸

縦二六・七種

横四五種

横三六・八種

一六 聖策三事ニ関スル漢文勅諭

一冊綴

其他清國長髮賊乱ノ件

朕惟、方今時勢、夷狄恣猖獗、幕吏失措置、天下騒然、

万民欲墜塗炭、朕深憂之、仰恥 祖宗、俯愧蒼生、而幕吏

奏曰、近来国民不協和、是以不能拳膺懲之師、願降嫁

皇妹於大樹、則 公武一和、而天下戮力、以掃攘夷戎、

故許其所謂焉、而幕吏連署曰十年内、必攘夷戎、朕甚喜

之、抽誠祈神、以待其成功、昨臘 和宮入関東、使千種

少將・岩倉少將諭天下大赦之事、且告曰、国政仍旧、大

概委於関東、至如外夷之事、則我國一大重事也、係其国

体者咸問朕而后定議、或使二三外藩臣、預聞夷戎之所置、

幕吏对曰、宸意事甚重大、難遂奉行、請暫猶預、既而頃

日、列藩有獻謀議者、如薩長二藩、殊親来奏事、且山陽

・南海・西国之忠士既蜂起密奏之、幕吏奸徒日多正義委

地、而蔑 王家、睦夷戎、物貨濫出、国用乏耗、万民困

弊之極、殆至受夷戎之管轄、不日而可知己矣、冀拳旌旗

奉 鸞輿於函嶺、誅幕府之姦吏、或曰、為除太平浸潤游

惰之弊、誅京師之姦徒、又曰、不願幕府下攘夷之令、於

五畿七道之諸藩如其衆議畢、雖出于忠誠愛国之至情事甚

激烈、使諭薩長之輩鎮庄其他召募先吏久世大和守住復歷

日、未告唯諾而先行昨臘所諭之大赦、夫大樹猶弱、何失

之有、但幕吏因循偷安撫馭、失術如是、則國家傾覆、可

立而待也、朕日憂懼焉、所謂偷一日之安忘百年之患、聖

賢之遺訓可鑑矣、当内修文德、外備武衛、断然建攘夷之

功、於是斟酌衆議執守中道、欲使徳川與祖先之功業張天

下之綱紀、因策三事、

其一曰、欲令大樹率大小名上洛、議治国家攘夷戎、上慰

祖神之震怒、下從義臣之帰嚮、啓万民和育之基、比天下

於泰山之安、

其二曰、依豊太閤之典故使沿海之大藩五国称五大老、為

咨決国政、防禦夷戎之処置、則環海之武備堅固確然、必有掃攘夷戎之功、

其三曰、令一橋刑部卿援大樹、越前前中将任大老職、輔佐幕府内外之政、当不受左枉之辱、此万人之望恐不違、朕意決于此三事、是故下使於閩東蓋欲使幕府選三事中之以一以行也、是以周詢群臣々々無忌憚各啓沃心丹宜奏讜言、

右

勅諭之趣真偽不定、若哉尊

王家と唱候者共之偽作ニ茂可有御座哉と申風説茂有之候得共、写取差上申候、

一東禅寺異人切害一条之儀ニ付、丹波守様御家来御徒五人、中間二人御吟味相成候、

二月十五日入港之仏国船「ヘロイス」船銘持越候上

海新聞紙抜萃翻訳

於上海千八百六十二年第三月六日 我二月六日

一当港及近隣之各港ニおゐて外国之貿易は当時殊更繁昌

ニ可相及処、去ル第一月二十二日之風聞ニ而、長髪之賊徒等当港を侵犯し、外国の商人及土地之商人差別なく其荷物を奪ひ取、不法を相働きし故衆人の難儀少からず、遂に商売も不景気になれり、

一当時外国之軍兵多勢当港を防禦する故に、賊徒初度之一戦に敗走して再挙之計策を廻らし、此度ハ尚更用心を加へて諸国より上海を向け進んで侵伐せん事を謀り

当港及び外国の居留所より五里十里或は二十里之内所

々々堅固なる塞柵を構へ、陣營を築けて其仇敵なる賊徒ハ上にいえ

る如く塞柵を構へ防戦し、手当行届けハ官軍是に敵対する事能ハす、且其中ニは外国の奸民有て賊徒と馴合、

其軍法を相助ると見へ陣法隊伍等随分美事なり、

一賊兵の形勢を見るに甚以強大なれハ、唐国之官府より

軍兵を配出し、亜米利加合衆国之副将「ウォールト」

人を相頼ミ、其軍兵を教導し、総而仏国之軍法を照して訓練を加え、遂に武勇なる一隊の軍兵を仕込めり、

然れ共憎むへきは其人教多勢ならされハ、仮令一同力

を合せ城池(地)を守るといえども、唐国の宮府ニおゐて賊兵を喰留る事ハ難かるへしと海陸の軍事に馴し諸君英之見込なり、

一此騒然たる形勢を見るに就而、英仏兩國之水師提督より良善なる計策を与へたり、其意ニは若訓練せし処の唐国の官軍に助力して賊徒の侵犯し居る地に近寄しを攻討せんには、第一に上海より四五里下手なる高橋と名付し村落およひ黄浦といふ河の近傍にある賊徒の塞柵に向ふて、彼の屯す所の多勢の兵を打破るへし、

一唐国之練兵及び副将「ウォールト」名人は英国の軍艦より一隊之海軍并仏国之不意之援兵を集て、共ニ勇猛を振ふて其塞柵を攻討、賊徒之防戦する者と大に戦ふて多勢を殺戮し、三百六拾二人を生擒し、其中は何れも官軍の逃兵多分にして、元よりの賊徒に降参せし者なり、依之官軍之逃兵は城下の刑場におゐて首を刎ね、其百姓等は長髪を剃落し食物衣服を与へて釈放せり、一去ル三月第一日我二月朔日におゐて賊徒と第二度の戦

争あり、此一戦におゐても英仏兩國の軍兵の一隊は其魁蹟をなせり、此場所ハ上海より二十里隔て黄浦路の上手に当り、村の名は涼堂といふ、其所に六千人の賊兵塞柵を構へ、池堀を通し、逆茂木を設け、十分堅固ニ防禦の手術を尽し、且外国之奸民ありて其指揮をなせしと見え武器等随分美事なり、是ニむかひし軍兵之内六百五十人は英仏の兩國ニ属し、七百人は唐国の練兵にして、朝八字より攻撃をはしめて半時程は炮銃を射立、其塞柵を乗取り、後ニは村中の往来ニ而銘々賊兵と再三わたり合えり、其英国の海軍ニは「ハイムヘリユス」名船之船将「ホルランド」名人「リュートストルト」名人、指揮役「ジフリン」名人「リッチャルトソン」名人及び水師提督なる「セームスホーフ」名人の諸君等なり大炮之軍兵を引率し、船将「ブライトジョー」名人共に多勢之賊兵を打取、其時におゐて唐国の練兵及び副将「ウォールト」名人におゐても少からざる人数を誅戮せり、此一戦におゐて七百人より八百人程の賊兵を討取、

三百人を生捕、其余の五千人は隊伍を乱して散乱し、構へ設し塞柵は火を懸て焼はらひ、此方之怪我人ハ仏兵一人討死し、拾五人手を負ひ、英国の海軍五人手を負ひ、并唐国之大将一人重手を負ひ、二十五人討死し、四拾人手を負へり、

一此一戦は賊兵の大敗なれハ、爰ヲ以て外国の武威の盛にして南京城を大砲ニ而攻打し事をも知へし、只望らくは諸君一同心を合せ、志を齊ふして唐国の官府之諸省を旧に仍而速ニ攻落す事肝要なり、勿論此大勝之期会に乗しあれハ、上海近傍之賊徒を討平くるにおゐてハ、誰か諸君子力を合せて其指揮に従はざる者あらん哉、

### 北京

一北京より第一月四日付之告知を請取しに、同所も諸事至而平安にして、当時官府ニおゐても重々賊徒征伐之評議ありて、国政を代理する宰相の主意ニ而賊徒侵犯せる諸省へ向満州の精兵を差下せし由、

一江蘇・安徽・鎮江三省之人民賊徒之ために逃散して災禍に逢へるを憐ミ、皇帝より特に上諭を下し、総而三省より可相納租税之類を差免して、深く人民の賊徒に劫掠せられ塗炭ニ座することを哀悼せり、

### 漢江

一商売は不景気なり、当春に及へとも未復古し繁栄の場に至らず、尤当年ハ茶の商売ハ繁昌すへし、

右は上海新聞紙中抜萃大意翻訳仕候、以上、

長崎通譯

兩人連名

唐国上海江被差遣候役々心得方之儀ニ付申上置候書付、

高橋美作守(和實)

有馬帶刀(則篤)

外国商法之様子見置旁貿易為御試、唐国上海・香港等江役々可被差遣旨先般被 仰渡候ニ付、出島在留之蘭人江商船借請方并商法之模様等及問合、尚勘弁茂仕候得共、御手初之儀ニ付不案内之地江御国旗相建罷越、

若御国体ニも拘り候様之義有之義而は以之外之儀ニ付  
 今般之儀は蘭船御雇切ニ而役々被差遣候とも御国旗等  
 不相用、平常之外武具類茂不持越、且商売荷物之儀は  
 俵物類・石炭其外積載候儀ニは候得共、上海近傍賊乱  
 之為商売向不景氣之様ニも相聞候間、商法被組候儀は  
 其場合次第機變之取計、貿易掛引其外右地一体之模様  
 柄得と内探、夫々見据付候上ニ而追而本船御仕出相成  
 候方御不都合も有之間敷哉と見込、右之趣を以て取調、  
 去西九月中岡部駿河守・高橋美作守連名を以相伺候処、  
 伺之通可取計旨同十二月中御書取を以被仰渡奉得其意  
 御下知之趣支配向江も申渡、右之趣ヲ以蘭人江も引合  
 手筈為仕置申候、然処彼地江被差遣候御勘定奉行・御  
 目付支配之者、去ル十一日着崎ニ付、夫々打合為致、  
 外国掛御勘定奉行・御目付連名之伺済書面をも一覽仕  
 候処、元来本邦と唐国とは唇齒之国柄ニ付、通商は勿  
 論此方より通信ニ相成候而も可然儀ニ付、其節之模様  
 ニより何となく彼方役人之心得方をも承札、且五港之

内英吉利ニ而租税を取候港も有之哉ニ候得は極而各港  
 各法共奉存候間、時宜ニより五港其外江も相廻り見置  
 候積、伺之通り御下知相済候趣ニ有之候得共、近来彼国  
 之儀英仏兩國より之戦争も有之、其上賊乱相起、國中悉  
 く襄乱致居候趣ニ相聞、右様之折から容易に通信等之  
 端を開候は如何可有御座哉、就而は唐国官吏江引合候  
 儀は枢機之取計ニいたし、外国商法之模様并輸出入荷  
 物之取締向、運上取立方、諸物価之高下、売先之様子、  
 貿易筋掛引、其外彼国之事情内探いたし、何れニも御  
 不都合不相成様申含差遣候様可仕奉存候、然処別紙唐  
 国風聞之儀も申上候通、方今上海近傍江賊徒共乱入い  
 たし、官軍と及戦争、英仏之軍兵共官軍江加勢いたし、  
 互ニ死傷不少哉と相聞、右等之場合渡海いたし、若不  
 都合之儀出来候而は以之外之儀ニ有之、且は御用便之  
 程も難計ニ付、何れも彼地動静を得と相札候上出帆為  
 致候積リニ御座候、依之立合御勘定申談、此段申上置  
 候、以上、

戊三月

高橋美作守  
有馬帶刀

一御目付妻木田宮殿、先達而登 城掛兩國辺ニ而狼藉者

ニ出逢、散々打擲ニ逢、半死半生之体ニ而被引取候処、

御役御免ニ相成候由御座候、尤右之者四人ニ而元召使

之家来ニ候哉と申風聞御座候、

右之通外国新聞世上風説之趣ニ御座候、以上、

戊五月六日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二七・七種 横一九種 七枚

一五七 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

議奏ヨリノ書付及久光公改名ノ件

(包紙ウツ書②)  
一島津

三郎とのへ 忠房  
内用

(包紙ウツ書①)  
一島津三郎とのへ 忠房  
内用

(封紙ウツ書)  
一島津三郎とのへ 忠房

演舌

昨夜忠左衛門入来之砌、御書付渡シ置候事、唯今又候從

議 奏中、此 御書付被出候、右ハ昨夜之 御書付ニ被

添被 出候筈之趣ニ而被渡候、早々可達及言上置候、尤

其元限、他見堅々無用、右之趣モ達シニ候、

扱亦三郎ト御改名、芽出度安心仕候、仍如此候也、

五月十三日

文書原寸(折紙) 縦 一六種 包紙原寸 縦二七・八種

横三四・四種

横三九・八種 二枚

一六八 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

久世大和守上京ノ件

(包紙ウツ書②)  
一島津三郎とのへ 忠房

乱書推覧  
内用早々

(朱)  
「戊五月十八日」

(包紙ウツ書)  
「島津三郎とのへ」 忠房

早々の内用

(封紙ウツ書)  
「三郎とのへ」 忠房  
乱書御免

尚以用繁取紛乱書、專推覽可給候也、

昨鳥中山忠左衛門江申置候久世和州上京御差止メ之義、  
今朝モ三条大納言入来ニ而、段々之咄共、一向御陸ケ敷  
由故、逆茂此上被申立候共、陸ケ敷存候間、来月四日和  
州上洛 御沙汰共同候而、当地出立之折柄、引続 勅使  
被差立、其元ニ茂下向ニ不相成ハ、甚役人衆之決談も甚  
陸ケ敷候間、和州上洛之上、尚又出立之節、其元ニ茂下  
向ト治定被致候様存候、逆茂幾度被申立候共、如何ト於  
忠房心配候、唯今忠左衛門来候間、可申聞候へ共、先以  
書中申入候間、早々御報御頼申入候也、

五月十八日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第七三号文

書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦二七・九種

横四〇・五種 横三九・九種 二枚

一 一 橋慶喜公ノ後見職松平春嶽公ノ政事総

裁職ニ関スル久光公へノ朝命

別紙幕府へノ朝命

右二通

(包紙ウツ書朱)  
「戊五月十八日」

一九九ノ一

(端裏朱書)  
「五月十八日承知」

方今之時勢不堪傍觀、島津家一同拳三國抛身命勅  
王攘夷之旨趣言上、不斜 御満足 思召候、今般関東江  
勅使被指向、偏ニ 君臣御合体、国内一致、攘夷之成功  
可有之、以深重之思召被 仰下候ニ付、  
勅使ニ引続三郎 出府可周旋、去ル十二日以書取被仰付候  
処、越前前中将国政關係之儀於関東取計候段、

觀意符合 御安心思召候、右ニ付猶又別紙之通

御沙汰候間、

觀慮之旨徹底候様尽力可有之、深御依頼思召候、右之段

内々

御沙汰候事、

忠能

実愛

雅典

通熙

定功

文書原寸 縦一七・六種 横九八・五種

一九九ノ二

(端裏朱書)  
「五月十八日」

一 橋刑部卿・越前前中将等之儀、御簡条書之通被

仰出候処、去十五日大樹年頃ニ付、田安大納言後見願之

通差許、越前前中将国政可關係被申付候由 言上有之、

就而は後見之儀強而被仰出兼候得共、何分内外不容易  
形勢ニ候間深被遊 御案痛、以一橋被登用候方可然

思召候、但名目之処可為輔弼欵、且越前大老職之事為家  
門之間、流例之辺ニ而は可差支候得共、先件非常之所置  
ヲ以テ可被申付

思召候、但是以差支候ハ、政事惣裁職ト称候而茂可然  
思召候、

但越前前中将儀

思召之通相成候上ハ、方今内外危迫之時節ニ付、今年

秋中上京有之國是之議論被

聞食度候、且同人弥上京之節は引統三郎ニ茂可有上京候

其辺相含可有周旋様ニト

思召候事、

文書原寸 縦一七・三種 包紙原寸 縦二七・三種

横 一〇七種

横 三九・二種

二〇〇 中山忠能卿ヨリ近衛忠房卿へ 二通

近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 一通

久光公出府及智恩院借用ノ件

(包紙ウツ書) 忠能

緘

二〇〇ノ一

(封紙ウツ書) 忠能  
「左大将殿 家司中

家司中

「

拝承仕候、御書之趣御尤ニ承存候、何分此比之所望ハ、

各武家へ所司代申通し候半てハ、不奉行事共ニ候間、兩役

申談ニ相成候、其内ニハ色々有之、実ハ昨日之論決 下

官等ニハ十分之精力ヲ尽し候事ニ候、流例之任来トハ余

程はつれ候取計ニ候ヘトモ、忠能等咎ヲ受候義ハ少も不

恐候間、精々取計候事にて、実ニ此上ハ当惑、所詮不行

哉ニ存候、併三条とも得と可談候、島津之誠忠少分なり

とも可扶勤心中にて、色々尽誠力候へとも、実ニ六ヶ敷

場合ニ及、苦心之至ニ候、且今朝堀入来之趣、書付ニ相

(仲左衛門)

見候へとも、其節ハ久世可被差止との事ハ一向不申居候、

委細ハ明朝可及言上候、少々痛所増長大ニ苦居、呈粗札

偏御有免奉希候也、

五月十九日

二〇〇ノ二

(包紙ノ裏ニアリ) 「寺院借渡候事ニ付而ハ、先日已来京師之意味白岩

倉得と申入候由ニ承居候、島家精勤ハ実々感佩之

至ニ候へとも、朝廷ニても何レ難被行義ヲ申候

てハ、いつ迄も埒明不申と存候、宜申上頼候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第七五号文

書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一六・三糎 包紙原寸 縦三六・六糎

横 四五糎 横四九・九糎

二〇〇ノ三

(封紙ウツ書) 「島津三郎とのへ 忠房

内啓

「

口述

中左衛門昨日持參之御書面、早速議奏衆へ差出置候処、尚篤ト熟覽可仕トノ由申來候、其后愚拙所存、議奏第一中山家へ申立候処、右之通中山家より返輸到來候、仍入覽候事、

五月廿日 辰刻計認

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第七八ノ一  
号文書ト同文ナリ)  
文書原寸 縦一六種 横四五種

### 三二 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

久世大和守上京ノ件

(包紙ウツ書)  
「島津三郎とのへ」 忠房  
内密早用

緘

(封紙ウツ書)  
「島津三郎とのへ」 忠房  
内密々々

尚以頭痛差発困り入、乍例尚更乱毫仁恕頼入候也、

昨夕忠左衛門來、其砌久世宰相入來ニテ御書付被渡候、仍直様忠左衛門江渡置候事ニテ、役人衆論判、実以何共平常之心得・非常了簡無之困り入候、仍忠左衛門ニも段々申立候趣ニ而、久世和州仮令半途ニ出ル共引戻シ、先上洛ニ不及旨被 仰出候様、尤非常之事ナレハ、尚更若州へ内々打合セ杯ハ決而不宜趣、巨細ニ申遣候処、正親町三条より、右様之返輸到來、逆茂中山家江申入候共、取計ハ如何可在哉ト懸念仕候、一向忠左衛門・治郎・市藏等三人之内誰成共、中山家并岩倉等へ來入ニテ、尚亦手厚ク及論談候而ハ如何哉、逆茂夫ニ而茂甚懸念ニ候間、何卒此上ハ久世上京之上、御沙汰共相伺、出立之節ニ至、勅使其元ニモ出立ニ可相成、勘考之方ニ被定無而ハ不相成哉ニ被存候也、

五月十九朝

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第七四号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一八・四種 包紙原寸 縦三六・六種

横五〇・二種 横四九・九種

三三 海賀宮門等ノ細島事件記事

合二通

日州細島之近事

二〇一七一

一去七八日之頃欵、細島港之水辺ニ都中之水辺と相見候士分三人切

殺され有之、多分舟ニ而逃去候哉、何れ御領分近所之

事故、若不審之者見当候ハ、召捕候様富高より申来

候、尤其場所ニ黒田家臣海賀宮門ト、引肌抵之物ニ書

付有之候由、此者ハ先年当所へ遊歴ニも参り候者之由、

弦太郎佐伯ニ而も存候者之由、其後風聞ニハ薩州之者

大勢細島上陸ニ而致帰国候、丁度其折柄ニハ病人ト申

候而、たごしニ乗り候者大分有之候趣、右切られ候者

二人ハ柳川之劍術修業者、一人ハ右海賀ニ而、大坂よ

り同船薩州一所ニ乗り、船中ニ而議論初り候而、細島

ニ而真剣立合候と申事、尤薩州ハ十七人ニ而即死も有

之趣、其節ハ昼之事ニ而、細島何れも戸を立候由申事

ニ候、錠とハ不相分候得共、薩州たごし乗大勢ハ当所

ニ而見候事故、間違ハ無之候、右承り候俣申遣候、

五月十九日

水筑小一郎

黒水鷲郎様

二〇二二

一聞薩州宗室和泉氏將六百余人護京邸、其他如阿波・土

佐・肥後諸大藩各数百人滿洛中、皆以守其姻家為名而、

其意不可測也、去十日富高牒藩府曰、日田管内細島之

浜有壯士三人蒙疵而死、其側有一巾、其色鬱金、其長

六尺、書曰、平生心志豈有他、赤心報国只此四字、筑

前黒田家臣海賀直求、不知何人所為、請廉問封内或有

殘疑似者逮捕以告焉、即日薩人四五十名至城下、取籃輿

者不下十人、謂船中患麻疹、或曰非病也、海賀と薩人

同船、誤踏薩荷物、薩人大怒曰、荷有寡君之標、此と

踏寡君之面何異、為人從者是可忍孰不可忍、請与決、

海賀謝過弗聽遂有此拳海賀即斃式人、薩衆辟易而去、

蒙疵者数人矣、海賀自殺、海賀即宮門、嘗過本藩、僕

知一面性、僕直好学、傍善鑪術、僕固重其為人果然、則知  
為不負吾知矣、

壬戌  
五月十九日

城 重淵

田村兵衛様

三好充遠様

文書原寸 縦二五糎 横三三・七糎 二枚

三三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

久光公出府延期ノ議

(包紙ウツ書)  
一 島津三郎とのへ 忠房

内要用

(朱・紙)  
□ □

(封紙ウツ書)  
一 島津三郎とのへ 左大将

内用

実々在体申入候、御密覽頼入候、入覽後投火く頼

入存候也、他見無用く

元来外夷一件不容易義ハ申迄モ無コト、其上幕府ヨリ去  
ル午年以来

天朝尊法之道理無之、唯以權威牽輕蔑、実以一朝一夕之  
次第ニ不在、深被惱 玉体、種々ト御配慮(而脱カ)已被遊、何共

有志之輩ハ悲歎ニ迫り候次第、然ルニ去申年ヨリ以来諸  
浪人共蜂起シテ、幕役人モ度々之損亡、夫ニ不心付、兎

角權威(而脱カ)已相震ヒ正論難相立、実以德川家長久モ無覺束、

唯々此上ハ夫々大國之大名國家之為抛身命、正論不相立

ハ後后如何ト懸念ニ存候処、旧臘(中山)尚之介、当春市藏被差

登、巨細ニ忠誠之心底被申越、実ニ感佩不過之事、乍去

前左府ニハ隠居、殊ニ落鋸迄被 仰付候身体、且參内モ

被止置候義、於愚拙ハ若年且短才未熟之仕合、其上天子

玉座ニ奉近候義ハ容易ニ難相成次第甚殘懷不一方、依正

親町三条へ内覽ニ及候義ニテ、前左府愚拙ニハ今度其も

と建白之条々当然之良策ト存込候、乍去過日来御承知之

通議 奏衆一致六ヶ敷、其上ニ久我内大臣・久世宰相・

千種・岩倉兩中将各姦佞之人物種々ト以偽、恐多モ主上ヲ奉欺、夫ヨリシテ

主上ニ茂国忠之者ト 思食被込、且又中山・三条等ニモ誠忠ト被存込、実以甚々悲歎無際渥

天朝之有様遺恨ニ存候、夫故当節前左府在職ニテモ、痛心而已ニテ是ト申功ハ無之哉ト、実ニ御悲歎之御事、且又和州上洛之上 御沙汰共同、夫ヨリ出立ト申節 勅使其

もとニモ出立ニ及候様、於半途行逢之節引戻し候様トノ事ハ余リ慕<sup>(慕カ)</sup>ニ相当、如何之事<sup>(事)</sup>逆茂夫ハ六ヶ敷、何卒篤ト

勘弁ヲ加へ、来月十日前後迄滞在之佩在度トノ評定之由、最早幾度被申立候共強上ニ相当、却テ如何ト被存候、智<sup>(知)</sup>

恩院之儀ハ是ハ於此方ハ非常ト存候節ニハ、何トカ勘考可有哉ニ存候へ共、是逆茂甚六ヶ敷次第之由、何卒此上

ハ表向武伝へ願立候カ、亦ハ所司代へ申込、知恩院借受候カ、兩様之内ナラテハ埒不明ト存候、和州モ引戻しニ

不相成上京ニ而ハ其元滞<sup>(滞)</sup>在ナクテハ、何共

朝廷御案事申上候事篤ト御深考ニテ、後刻忠左衛門入来

之砌、御報頼入候也、

五月廿日認

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第七八ノ二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸(折紙) 縦一六糎

横四五糎 三枚

包紙原寸 縦三一・六糎

横四二・九糎

三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

久光公東上ノ件

〔包紙ウツ書〕 一 島津三郎とのへ 忠房

内用

〔封紙ウツ書〕 一 島津三郎とのへ 忠房

要事

尚以御道中壮健之様祈入候、当秋上洛待入候、尚於

東武周旋慥ニ頼入候事、

弥御安康珍重候、扱昨夜野宮宰相入来ニテ、別段御書付

不被為在、御使ノ演舌ニテ被申渡候へ、明後廿二日 勅

使弥發遣御治定、就テハ三郎ニ茂引続キ出立ニ及候様、

且又久世和州ニ茂東海道通行之義行逢候節、穩便ニ可仕

様凡テ途中質素ニ可仕様被 仰出候事、

右被申渡候間申入候、御請書在之候様存候、且亦昨夕忠

左衛門江渡し置候両卿之書状、御返却頼入候事、

五月廿一日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第八一号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一六種

包紙原寸 縦 二八種

横四五種

横三九・九種

### 三三 將軍ノ上意振ト老中申渡之趣

士氣振興兵備充実

(端裏朱書)  
「壬戌欵」

癸亥欵」

(端裏付箋)  
「上意振」

五月廿二日

上意之趣

近来御政事向姑息ニ流、事虚飾を取繕ひ候より、士風日々輕薄を増、

御当家之御家風取失ひ、以之外之儀、殊ニ外国御交際之

上は、別而御兵備充実ニ無之候而は不相成、就而は時宜

ニ応し候御変革被取行、御簡易之御制度、質直之士風ニ

復古致し、御武威相輝候様被遊 思召候間、一同厚相心

得可励忠勤候、

申渡之趣

只今

上意之趣誠奉恐入難有御儀ニ候、何れも厚く相心得、

思召之行届候様一途ニ心掛、抛身命可被抽忠勤候、猶追

々被仰出候品茂可有之候間、心得違無之様可被致候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第八三ノ二  
号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・七種 横七七・一種

三六 久光公ヨリ

へノ書翰草案四通一紙

茂久公  
之助、周防、英之進、悦  
於治、於珍、於寛、於成  
ノ四公女  
留守家老喜入撰津

二〇六ノ一

向暑之砌御座候処、

弥御安康奉珍重候、然は拙者義無障

勅使大原左衛門督殿同道関東下向之

勅命を蒙り、今日京師致発足候、乍憚御安慮可被下候、

尤久世上京遅々ニ相及候ニ付、

勅使被差下、一橋・越前任職之儀被仰下度旨、先日書取

を以議奏衆江差出候処、御取用相成、右之次第ニ相運ひ

申候、折角精々尺力いたし、於関東

勅意尊奉いたし候様有之度奉存候、別紙差上申候間、函

書・周防は勿論撰津江も拜見被仰付奉存候、且先日は岸

良七之丞着致、其地之形勢細々承知いたし申候、殊ニ何

寄之御品々被成下、別而難有奉存候、御暇乞旁として

近衛様江参殿之節、進上用ニ相成、思召之程別而難有奉

存候、猶追々吉左右可申上候、以上、

御 尚々時候御自愛專一奉存候、爰許先月より麻疹之様

成病氣流行、供廻り上下臥居、側辺人数も減少いた

し込り居候、其地はいかゝと相考申候、入梅之時節

なから雨は相少く候、

拙者ニも老中水野和泉守差合ニ付、近衛様より三郎と

改名いたし候様被仰下、難有御受申上候儀ニ御座候、

是は御拜名候之御方ならてハ御用ひなき事御座候得共

近衛家より被仰下候付相改申候、

二〇六ノ二

一筆申入候、追々暑氣ニ相成候<sup>向</sup>処、弥無御障大慶之至ニ

候、然は拙者ニも無障候間、御安心可給候、今日

勅使同道京師発足、関東江下向いたし候、委細之儀は御

本丸江申遣置候間、登城之節拜見可被相願候、先度より書状且品々贈給り忝存候、先は此段申入候、以上、

尚々時候御自愛專一存候、入梅中ながら雨ふり不申

暑さ強く御座候、殊ニ先月より癩疹之様成病流行い

周、たし、供廻り上下臥居候次第ニ而、不自由之事ニ候

英、其地はいかゝ候哉と存申候、

真、悦・真望之墨且絵本遣候、氣ニ入候哉、又々何にて

も可被申越候、以上、

二〇六ノ三

一筆申入候、追々暑氣ニ向ひ候得共、弥御障なくめて度

そんしまいらせ候、拙者障なくニ無事ニ候間御安心可給候、

然は今日

勅使同道、江戸江罷下り申候、御安心可給候、先度より

たひ／＼文給り、殊ニ品々贈られ、別而忝存しまいらせ

候、先は右かた／＼申述度あら／＼申入候、

治、かへし／＼時に折角御いとひ專一そんしまいらせ候

珍、爰元は入梅中雨もふり不申、暑き事ニ御座候、殊ニ

寛、先月よりはしかのやうなる病氣はやり候而、供中上

成、下臥居候事ニ而、不自由之次第ニ候、其元はいかゝ

とそんし申候、

成望之人形先達而遣候が、あれにてよろしく候哉、氣

ニ不入候ハ、又々遣可申候、いかゝ之事ニ候哉、何

分承度候、かんさしのやう成物は、江戸より遣可申

候、京は不宜候間、江戸より遣可申候、

二〇六ノ四

一筆申入候、向暑之節、弥無障勤仕、大慶存候、然は

拙者事、

勅使同道関東下向いたし候様

勅命を蒙り、今日当地致発足候、右之次第は修理大夫

殿方江委曲申遣候間、拜見可被相願候、

一先日は岸良着致、其地之次第委曲承届申候、

一大島一条大心配いたし候、定而於其地色々異説生候由、

定而心配之義と致遠察候、実ニ逆心之者ニ而、死罪申付度程之事候得共、一等を減し一生不返之流罪ニ決し申候、尤当人口氣は讒口之哉ニ申候由、弥以不届至極之事ニ候、

一 伏見之混乱一条、別而大心配、紙上ニ難尽候、乍去其後平穩相成、別而之都合ニ御座候、是ニ而其地之形勢如何と至極懸念ニ候、尤浪人船ニ而差廻シ相成筈此義は深き意味深長之事ニ候、自から着船次第届可申出と存候、永田・道島兩人別而残多事ニ候、実ニ浪人之情意、後ニは臆氣相生し、先は仕合之次第ニ候、

一 其元同席中且書役之所如何ニ候哉、岸良より大概承候処、紛之由、定而大心配と察申候、養田再動之吟味も有之由、以之外之事と存候、書役中異説申立候者は不差置役儀被差免候事可然歟と存候、其外有川十右衛門・い東仙大夫等も同断と存候、

一 菱刈・汾陽之儀岸良より承知之筈由とは大心配いたし候、矢張滞坂申付置候、関東之模様次第、其地江差

下候考ニ候、

一 東郷源左衛門伏見より江戸江参り候処、いろく異説申立、屋敷中疑惑を生し候由、是以只ニは相済不申候、一 長野彦七如何ニ候哉、是も東郷同前歟と存申候、

一 其元江戸同役之処、大ニ仰天之由、しかし是は拙者着致候ハ、安堵歟と存候、

一 筑前播磨大蔵谷より引返し相成候由、其後之次第爰元江は不相分候、其地江相知れ候ハ、可被申越候、

一 南部家大ニ不平之由佐土原之処、此義は元より相考候事ニ而、今更驚くへきニあらず候、併

勅意通相運ひ候得は、何も如才無キ事と存候、

一 佐土原は半信半疑之模様、大坂江は家老樺山参り、爰許江は留守居能勢参り候、是はさして無子細と存候、

一 申迄も無之候得共、其地折角平穩候様被致度、幾重ニも申入候、拙者存慮不相分事も候ハ、猶又可被相尋候、

右条々以乱毫申入候間、よろしく御見分可給候、猶追

々可申入候、以上、

文書原寸 縦一六・九糎 横九二・五糎

ニ〇 近衛忠房卿より島津三郎公へ

島津石見上京ニ就て

〔包紙ウツ書②〕

一 島津三郎とのへ 忠房

内用

緘

〔包紙ウツ書①〕

一 島津三郎とのへ 忠房

乱書推覧

少々急用

〔朱・緘〕

□ □

緘

〔封紙ウツ書〕

一 島津三郎とのへ 忠房

乱書推覧

内々急用

〔朱・緘〕

□ □

┌

┌

┌

尚々昨烏折角帯刀ヲ以贈物喜悦仕候、其砌愚拙桜木町へ参上中、面会ニ不能、残心ニ候事、

弥勇健珍重候、先達来長ク滞在御苦勞ニ存候、先々今朝は発駕令安心候、石見義上京之由ニ承知仕、定而先達来段々之次第心得候、被申合候事ニハ候へ共、昨日来甚懸念起り候義ハ、石見事尤被申合候故、何カ承知仕候事ニハ候得共、和州上洛之上之処、甚懸念ニ存候間、先達来朝廷御模様辺議 奏衆之工合現在篤ト心得居候人残り居候へハ、大ニ安心仕候間、何卒帯刀・忠左衛門・小太郎・市藏右四人之内一人御残し置ニ候へハ、大ニ〳〵安心ニ存候、最早今朝各出立之事故、困り之辺ハ十分ニ察し入候得共、とふも能々愚案候処、一人ハ残り居候方ナラテハ、甚不安心ニ存候、何卒一人之処引戻し、滞在被申付候様仕度存候、呉々発足後之段気毒ニ存候得共、宜勘弁御頼申入度存候事、

五月廿二日

取紛乱書、其上書損モ可在之、推覧頼入候也、

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第八三ノ三号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一七種

包紙原寸 縦三一・八種

横八四・九種

横四三・三種 二枚

三〇、岩倉具視ヨリ堀小太郎へ

久世大和守上京云々ノ件

追日暑氣候、先以御主人ニも御安泰御旅行令恐賀候、各方ニも無事珍重存候、誠ニ一昨日ハ御主志之通御発足、万事御都合御同慶申入候、

一於大津駅家来江御念答忝存候、其後御請書一紙、本田ヲ以中卿江被差出、彼是御面働と存候、上ニハ御安心と恐悦存候、

一別紙之通関東より言上、誠ニ奇々妙々、全ク天助神慮と存候、一同安心之事ニ候、板倉迎も上京之御沙汰無之事勿論候、併元来火急之召段々運じも有之候処、右様言上何共不都合、御不審之旨、第一言可被 仰下哉ニ承候、今日表向披露ニ可相成哉と存候、

一右ニ付而も先日之御、若発足見合来り、四日後と申事ニ相成有之候ハ、実ニ面皮も無之次第ニ候処、御一

心ニ貫通、今日ニ至り候事、重疊此上もなく存候、併中村又兵衛江和州上京被留候得とも、若州言上之旨も有之、矢張御待之<sup>(出陣)</sup>ニ相成候杯云々申遣候、十七日迄ニ着之筈故、若哉右等之事よりニ無之哉と存候、

一大原江別段用事有之、本田江頼入、別脚差立候事ニ候、早々より御世話ニ成候事、多々世話而已気毒ニ存候、一肥州・因州・久留米等も正儀ニ相成候事ハ、勿論追々都合之咄し今朝承候、

一一・越両侯被出候ハ、諸有司帰服和平一致之方略、偏ニ人望之大事と存候、無御助才存候得とも尽力御勘弁と存候、

一和州上京無之ニ付而も御成功無疑存候ニも、役々之所深謀遠慮寛仁所置所仰ニ候、一かね而約定通り関東着候ハ、夫々来状通路頼存候、請書迄ハ何かと心配之事ニ候、

右荒々申入候、御主人ハ勿論中山・大久保等江も宜敷伝声頼存候、早々如此候也、

五月廿四日午刻過

富研

堀小太郎とのへ

尚以別紙不及返却候、且今度始ヨリ被下候御書被頼、  
和州上京無之ニ付、関東へ別段御内達ニ相成候、猶又  
大原方へ申入候条々も有之候間、内談頼存候也、

文書原寸 縦一六種 横八〇・七種

三完 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

伊勢桑名駅ニ於ケル会谈ノ件

(封紙ウツ書)  
「島津三郎殿 重徳

ノ

」

昨日ハ始而御面談辱存候、今日ハ意外之烈風之処、逾御  
安全無異御着珍重存候、陳は其砌段々無御復蔵御示諭被  
下、愚意も不残申述、明白ニ相分り安心之事ニ候、猶又  
事々宜御頼申入候、扱御咄し中追々激論ニ及、 叡慮之  
辺も何欵輕卒ニ申述、ちと申過ニて心配いたし候、決て

々々 叡慮之処ヲ輕々敷心得候ニテハ無之、十二部も十  
三部も勅忍のなる丈ハ元よりの儀ニ候へとも、逆もく  
勅忍もならぬと成候ても、夫でも鎮静ニテハ攘夷之場所  
へも到る間敷、左候へハ兼而之叡慮も立たセられぬ御事  
故、其時ニハと申事が余、激語過候故、何欵  
叡慮ヲ事もなけニ存たる様ニ相聞へ候哉と、其程誠々心  
配いたし候事ニ候、御面会申候へハ、其入訳ヲも可申解  
候へとも、旅と申もの自由ならざる物ニテ、困り申候、  
荒ましハ相認候へとも、巨細ニ難相認、尚中山ニ克々御  
聞取被下候様御頼申入候、仍早々要用已、不典、

五月廿六日

追申明日御面会之事、中山く能々申置候、御聞取

可被下候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七ノ  
十二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五種 横七三・七種

三〇 幕府へノ勅諭三箇条ニ付諮詢ノ詔

(包紙ウツ書朱)  
一戊五月

關東江被仰遣三箇条

但此第二箇条ハ御取止相成候事、

本文書ハ第一九六号文書ト同文ニ付省略ス、

三一 諸大名上洛氏名録

(端裏書)  
「五月二日」

然ハ夜前被仰越候、長家老長井雅楽殿ハ間違ト奉存候、  
浦鞆負殿ニ相違無之、去ル廿四日草津泊リ、廿五日坂下  
泊リ、飛脚番宿割兼廿三日被參候処、右日光宮様ニ差合  
延引、尤先触ハ途中迄之事ニ而、人馬不用、不残手人ニ  
而御越ニ而先触無之事、右之筈之処、止メニ相成申候、  
尤長州侯大津泊リニ京都より士分多分迎ニ被參、夫故御  
供方多人數ニ相成候事、  
一此節登リ方御大名計、下リ方ハ一切無之候、左ニ  
今日 中川修理大夫様御通行  
(久留 岡藩志)

明三日 高松様  
(松平頼聰)

四日 紀州御年忌御上使

堀田加賀守様登リ大津休  
(正誠 富川藩主)

五日 丹波柏原 織田様  
(信民 柏原藩主)

谷出羽守様  
(衛滋 山家藩主)

大津通り

七日 津山様泊リ  
(松平慶倫)

八日 郡山様泊リ  
(柳沢保申)

九日頃 三田九鬼長門守様  
(隆義)

綾部同 式部少輔様  
(隆節)

十六日 因州様 休

十八九日頃 御老中泊ト申嘸

十五日 越前福井 御帰国着

右之通御大名登リ計リ、下リ方無之候ニ付、通日雇江  
戸ニ老人も無之と申嘸、是も前代未聞之事ニ嘸仕候、

乍併御滞府相成申候も難計、

二百

九州大名ハ不殘国々御出之由、長州侯之親殿様丈ケ  
江戸と申事ニ御座候、只今問屋ニ御駕有之候鍋島早  
打登り、人足十人掛リニ御座候、

二日

文書原寸 縦一六・三種 横二六・四種

三三 幕府ノ情況及久光公守護職任命ノ尊等

一 五月七日、尾老公・一橋公御対顔、越前老公ニ茂御登  
城

御目見、御政事向御相談可被成候間、折々御登城有之

候様被 仰出、翌八日ニ茂御登城ニ而(久世正簡)関宿様と夜入過

まで御用談被遊候由、会津様ニ茂御同様被

仰出候由、

一 其砌より御老・若様方増供列之儀、都而御引取相成、  
此已前之通御召列ニて、諸事御変革之御模様候由、

一 御上洛

御名代は、弥一橋公と申事之由、

一 関宿様ニハ御上京之儀被成御承知候処、頻ニ 御辞退

ニ而御当職もすてニ御引被成候筋、御決心御座候処、

尾老公其外様御出会何欵之儀、御打合御吹込相成候処、

至極御差はまりニ而、弥御同所様来ル廿日比、江戸御

出立御上京之筋相成候由、

一 五月八日夜、酒井右京亮様御宅ニおゐて、安田轍三江

御沙汰相成候趣ハ、此節はいつれ京都所司代上ニ今一

人

禁裏守護職出来申筈、右は多分

和泉様江可被

仰出旨御咄御座候由、

文書原寸 縦一四・五種 横一一三・七種

〇三三 幕府ヨリ茂久公へノ御沙汰書

刀一口下賜

三四 久光公へ出府周旋ノ朝旨

二通

(包紙ツラ書)  
「此書付ハ不用

(朱)  
「戊五月」

二一四ノ一

今度関東江 勅使被差向候儀は、方今之時勢深被惱

勲慮、偏 公武御一和・国内一致・攘夷之成功可有之、  
以深重之

思召、別紙之通被決三事、速其一群議之所帰可有奉行被

仰遣候、天下之重事ニ候間、

叡旨徹底候様、周旋之儀、内々松平大膳大夫江被

仰合候、於島津和泉茂出府、大膳大夫申合、先件

御趣意相心得、為 公武宜有配慮頼 思召候事、

文書原寸 縦一七・六種 横六六・二種

二一四ノ二

別紙之通被為在

御沙汰候事、

文書原寸 縦一七・六種 横四三・二種

三五 幕府へノ勅諭三ヶ条

第一

大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ、

朝廷ニオイテ相共ニ国家ノ治平ヲ計議シ、万人ノ疑ヲ散

セシメ、

皇国一和ノ正氣トナシ、速ニ蛮夷ノ患難ヲ攘ヒ、上ハ祖

宗ノ 神慮ヲ慰メ、下ハ義臣ノ帰嚮ニ從ヒ、万民ヲ化育

シ、天下ヲ泰山ノ安ニ比セラレ度事、

第二

豊臣ノ故事ニヨリ沿海五ヶ国ノ大藩ヲ以テ五大老トシ、

(中山)

忠能

(正親町三光)

実愛

(飛鳥井)

雅典

(久世)

通熙

(野宮)

定功

国政ヲ咨決シ、夷戎ヲ防禦スルノ所置ヲ為シメハ、環海ノ武備堅固確然トシテ、必夷戎ヲ掃攘スルノ功アラント思召候事、

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前前中将ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ、戎虜ノ慢ヲ受スシテ衆人ノ望ニ協フヘクト

思召候事、

文書原寸 縦一七・五種 横八二種

三六 勅使下向ニ付テノ御沙汰書

(包紙ウツ書②)

(朱) 「戊五月」

此書付御請

浪人鎮静石見江申付、非常之節御所警衛同断」

(包紙ウツ書①) 「勅書」

今度 勅使被差向候

叡慮、偏ニ國中一致之御趣意ニ有之候間、龜暴之儀出来

候而は、深被惱

宸襟候事ニ候、元來是迄被屈

叡慮茂全く國中平穩ヲ厚被 思召候御事ニ候間、末々に到迄、右

御趣意不違様厚可申含候事、

文書原寸

縦一七・三種 横五八・九種

包紙原寸

縦二七・七種 横三九・二種 二枚

三七 島津凶書入京ノ朝命

(包紙ウツ書) 「内密」

浪士鎮静之儀、島津和泉江被

仰付置候処、同人出府被

仰付候ニ付、浮浪取押方之儀難行届、深 御不安心被惱

宸衷候、万一京師及動揺候而は、諸国可蜂起哉ト深被惱

叡念候、就而は修理大夫被 召登度候得共、差支茂有之

候は、島津石見率人数上京ニは有之候得共、猶又今一

人島津(久造)圖書將士卒、神速入洛有之、被安

愍慮候様可有尽力、早々申達上着之様被遊度 思召候事、

文書原寸 縦一七・六種 包紙原寸 縦二〇種

横六七・九種 横四〇種

三六 諸大名京都到着次第情報

(編纂書)  
「五月七日」

一 讚州高松五月七日上京、榎木原持場江着 上京之儀ハ

道中ヨリ触渡ニ而日賦も一日早日ニ着京、

高松藩中去月中旬ヨリ二三十人ツ、幾度も国元ヨリ

上伏いたし候、

一 因州五月十八日着京之賦、

一 松平大膳太夫様五月十五日江戸御発駕之賦、長門守様

ニハ下伏之様子、

一 藤堂家老廿日計前上京之処、内実ハ和泉守之由巷説ニ

候、

一 土州近日上京之賦、於伏見申上候通、

一 萩武器取寄相違無之、彦根鞍馬口持場江新古交代人数

留置、於国元二番手迄上京之手当相成居候、大砲等十

挺程取寄有之候、

右京地諸候方之次第大概右通ニ候、

文書原寸 縦一六・一種 横四三・六種

三九 大原勅使下向ニ付随従者名簿

(表紙)  
一 御勅使御下向御供名簿

大原殿

役所

御雑掌

堀内典膳

同御道中之間  
御用人

岡本將監

御用人御道中之間  
御目付

喜多川大膳

同御道中之間  
同加番

岸本丹後

医師

桃生亮作

御側

川合大進

同

石崎主水

御用櫃差添	山本掃部	御打物	土山今助
御近習	田中藏人	同	中村徳三郎
同	松本源吾	下目付	和久田喜右衛門
同	柴山弾正	宰領	近藤清吉
同	矢盛式部	同	村井新助
同	中村織部	同	高橋徳兵衛
同	寺元内匠	同	中川弥兵衛
御青士	宮原左門	同	高島吉兵衛
同	榎本左近	馬宰領	山本源之助
同	遠藤主馬	御輿之者	清助
同	三宅造酒	同	政吉
同	中村斎宮	同	重助
同	和田兵衛	同	源助
小頭	橋本岩吉	先手廻り	弥吉
同	橋 市之助	同	三五郎
同	水本孫七	跡手廻り	喜兵衛
		同	熊吉

御雜掌

津村治作

又吉

同

岩倉久四郎

浅七

權之助

御側

和助

幸吉

乙吉

御用人若党

原 与三郎

御近習

徳右衛門

原 数三郎

十助

弥三郎

万吉

安兵衛

御用櫃差添

吉兵衛

御目付若党

木村平兵衛

御青士

乙松

同

原田捨吉

兼吉

半兵衛

庄吉

太助

板元

吉田吉五郎

御医師若党

木村嘉兵衛

同

勝間弥兵衛

同

横轡原寸 縦一六・三種 横四五種 五枚

与助

三〇 京都守衛ノ件

合三通

御加番若党

青山平兵衛

三〇〇ノ一

當時不容易世上御在京ニ付而は、万一禁中陽明家等非  
常之御警衛被為蒙 仰候儀茂難被計候ニ付、御手配之  
次第、只今直ニ御出来被成候処と、又は追々御手相付  
候処、差分取調可申上旨、御内分被仰渡候趣承知仕、  
先ツ衆寡之御用筋勘考仕候処、只今之御人数ニ而は、  
迎も御手配出来兼可申故、追々左条通人数御召寄相成  
度奉存候得共、事変到来は何時茂難被計御座候得は、  
先ツ間ニ合、急変応卒之御備無之候而不相叶候故、左  
之通御内定相成居度奉存候、

一 相国寺辺江物主耆人・相談役耆人・昇預耆人・持足輕  
耆人・貝吹・与力・足輕耆人・取払四人・足輕四人・  
兵糧方・兵具方・作事方・荷物方兼務仕長六人・戦兵  
六拾人・鉄砲隊陪卒相付、常ニ居住し而、急事当番と  
相定、拾日ツ、ニ而跡勢と交代、次ニ御先手三拾人、  
仕長・物主・相談役等如御定相付、練銃一隊、次ハ御  
側廻中小姓并仕長三人・戦兵三拾人、其次ニ仕長三拾  
人・戦兵三拾人・物主・相談役等相付、以上三隊を御

旗本とし、本能寺より北或

近衛家桜御所辺内裏ニ不遠場所ニ而、可然利地ニ御引  
移相成候欤、其儀相調迄之間、暫時は当御屋敷中ニ而  
も可然御座候、別ニ戦兵三拾人・仕長三人・物主耆人、  
取払・昇預如形相付、御旗本近憐ニ止宿、何方ニ而茂  
危急之場相救候様、御手配可然奉存候、

但勢ニ從而は迎も是迄之御手当人数迄ニ而は相濟間  
敷候間、長州其外諸藩之守兵合従、或十津川之人  
敷御招相成、又は比叡山江鳳簾之御供相成候事茂  
可有之候間、地形人勢等御探索相成居度御座候、

一 夫当所は四方江之通路大途七口・小路十一口と有之、  
御警衛之儀とても、小勢ニ而出来兼候は、前文通之訳  
御座候得は、可相成は早ク三陣拾八隊之人敷御召寄、  
一陣六隊は惣物主耆人・物主五人、内大砲一隊・小銃  
五隊・戦兵三百六拾人は

禁裏近ニ相備居、御旗本は一陣六隊、内大砲一隊建仁  
寺辺ニ相備、外ニ浮勢一陣分數同断ニ而、不遠利地ニ

相屯、何時ニ而茂一変次第御所守衛人数ニ力を合、馳続キ様御手配有之度御座候、

但惣物主は御三役以上、或島津若狭一列より物主は御直触以上、或寄合より人柄次第、

一禁裏近之備場ニは、臨時之御使番四人ツ、昼夜共馬上ニ而相詰、変事模様之一々速ニ御本陣江相通候様可有之奉存候、右差当御見合可相成事共大略相認申候、何分四通五達之当地、御人少ニ而御固之儀ニ候は、備組数多ニ不分散様、肝要之場所へ而已に御陣取奇正之勢不相拔様、御手配専要と、乍恐奉存候、以上、  
戌五月

横帳原寸 縦一四・三糎 横四二・三糎 七枚

二二〇ノ二

一大坂御在合之大炮四挺、当地江御取寄相成度御座候、  
但玉薬同断、  
一蒸気船御備付之大炮并玉薬六挺分、当地江御取寄セ相

成度御座候、

一六封度以上式拾四封度長熾迄八挺、玉薬四百発分ツ、相添、御国許ヨリ当地江御取寄相成度御座候、

一右同八挺、玉薬四百発分ツ、相添、大坂迄御取寄相成度御座候、

一右同所迄雷帽銃三百挺・玉薬四百発分御取寄相成度御座候、

一御兵具方御格護之四匁筒百五拾挺并雷帽銃百五拾挺、玉薬四百発分ツ、相添、当地江御取寄相成度御座候、

一干飯都合五拾石位御取寄相成度御座候、

一布屋御在合程御取寄相成度御座候、

一火薬壱万斤・鉛同数御取寄相成度御座候、

一守衛戦兵三隊百八拾人・什長拾八人・物主三人御取寄相成度御座候、

但御城下・諸郷より割出、然は只今之百八拾余人と六隊屯陣之御治定通 御旗本分数出来候賦、

一先ツ差当り御手許之分、右六隊一陣御備有之度候得共、

勢ニ從而は七陣一軍、或三軍之御治定通無滞繰出候様、

御国許ニ而屹と内定相成候様、屹と内定相成居候様被

仰遣度御座候、

一御国許より又々守衛人数御取寄被成候砌は、成田家并

荻野天山流銃炮打手御撰相成度御座候、

一大坂表艦船八艘水手共御備相成度御座候、

文書原寸 縦一四・二櫃 横一四八・七櫃

二二〇ノ三

北郷作左衛門

樺山休兵衛

伊地知正治

什長

拾人

守衛人数

七拾老人

取払

四人

一

医師

三人

守衛方人数之内  
病氣

式拾六人

内什長老人

守衛人数

欠跡

拾三人

文書原寸 縦一四・二櫃 横四五櫃

三 將軍ノ上意振

老中ヨリノ令達

(端裏朱書)

「壬戌六月朔日」

(端裏付箋)

「上意振」

六月朔日

上意振

近来不容易時勢付、今度政事向格外ニ令変革候間、何茂  
為国家厚相心得心付候儀共可申聞、猶年寄共可申談候、  
今日

上意之趣誠以厚

思召、国家之御慶事無此上難有事ニ候、昇平殆三百年其  
流弊綱紀茂相弛ミ、武備御行届ニ相成兼候折柄、近來外  
国之事務頻ニ御差湊ヒニ相成、右御取扱振より自然天下  
之物情ニ差響、終ニ奉惱

叡慮候ニ至り深く恐入

思召候、素は

公武之御間柄、聊茂御隔意被為在候御事ニは無之候得共、

何となく御情実

御通徹ニ相成兼候故より之儀ニ付、速ニ

御上洛万端

御直ニ被 仰上度との

思召ニ而、則御内々被 仰出ニ相成候、併

御上洛之儀は寛永以来御慶典ニ相成候御式ニ候得共、万  
端之取調急速ニは御行届ニ難相成候付、暫く之処年寄共  
より御猶予相願候処、此度之儀は御旧例ニ不被為拘格外  
御省略、御行粧等万端御易簡ニ被

遊候

思召ニ付、急ニ取調次第と被

仰出、甚御急

思召御事ニ候、万事御誠実ニ

思召 御直ニ被 仰上

御合体御熟算之上、従來之幣風御一洗御武威被遊

御振張

皇国を世界第一等之強国と被遊候、

御偉業を被為 立、各

天朝之

宸襟を奉安、下は万民を安堵為致度との

思召ニ候得は、何れ茂厚奉得其意

御政事向御変革之筋等各見込之儀茂可有之候得共、聊茂

不憚忌諱、国家之御為第一ニ相心得、心底を尽し可被申

上候、猶追々被

仰出候儀茂可有之候間、飽迄茂其意を体し可被抽忠誠候

也、

六月

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第九三ノ二  
号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一五・七種 横二三九・六種

三三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

近衛忠熙忠房兩卿身辺危殆ノ報告

〔包紙ウワ書②〕  
「島津三郎とのへ 忠房

極秘用

(朱・紙)

〔朱〕  
「戊六月三日」

〔包紙ウワ書①〕  
「島津三郎とのへ 忠房

極秘密独覽

(朱・紙)

紙

〔封紙ウワ書〕  
「島津三郎とのへ 忠房

極秘密々

尚々時氣專保護ノ祈入候事、

向暑ニ候、弥平安旅行尚承度候、抑去ル廿九日、鷹司御父子・前左府等還俗被 仰出、畏々存候、即時御請被 仰上候、近々当職 御沙汰之 御時宜、此上ハ御沙汰次第、即時御請之思召ニ候、於忠房モ畏々候、其元御安心可被下候但先月其元発駕後ハ、若州より親敷堂上へ、殊外ノ手厚取入別懇之由、風聞歎ケ敷存候、実以若州へ親敷堂上ニハ困り入候、実々何カ岩倉杯あやしき事共ニ候、御洩し御無用と存候、九条殿下此頃之成行大立腹、是ハ全近衛家より開発之義顯然ニテ、甚違恨疑惑顯然之由、若州ニ茂大疑念之由、極内々有志之堂上より被洩候、且亦島田・長野其辺之邪物申合せ、事ニ寄レハ前左府・愚拙等途中之折ヲ見合セ、以人狼藉不方之義ニ可及哉、甚種々風聞共承候、自然狼藉ニ出逢候節ハ、龜輕何之手覚無、家臣召連、甚あやうき事心配ニ存候、乍去右辺論シ候ハ、必竟小人之論、仮令不意之狼藉ニ出逢候節ハ、甚迷惑、夫限り之事ト決心、且亦天下国家之御為ナレハ、元ヨリ抛身命候了簡ニテ、更々論スルニ不足候、尤々詛無邪論、

愚拙ヨリ御咄シ申入候義ハ、更ニ御洩し御無用、全億心

ニテ其元江勘考杯頼込候様ニ聞え候而ハ、全九条関白参

内杯之節ニ、彦根・酒井之人夫召連警衛之義、実以億心

不進退不外聞末代之恥辱、朝威ニも拘り候義不面白事、

且又薩州より人夫召連堅固ナラテハ出兼候様ニ相聞え候

而ハ、天下へ之恥辱不好候、尤々小人之論ト聊懸念不仕

候へ共、余り之風聞故、誠之御一笑迄ニ申入候、且亦東

武追々正義相立候様子、精々御周施在度、折々存居候、

脇坂再役之由、是ハ定而正論哉ト存候、尚御承知之事共

ハ、速ニ御注進被下候ハ、安堵仕候事ニ候、要用

已如此候也、

六月三日二更過認、乱書御免可被下候也、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第九四号文

書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦 一六糎

横四五・三糎

包紙原寸 縦三一・八糎

横四三・二糎 二枚

三三 大原重徳卿より島津三郎公へ

勅命伝達之件

(封紙ウツ書) 一島津三郎殿

重徳

ノ

」

日々御無異御旅行芽出度存候、陳ハ従今朝被差向候内藤大久藤

市蔵、於程ヶ谷駅四半比面会、何欵承り候御存意之趣、

御尤ニ存候、何ニもセヨ、上洛ニテ大変革之事ハ、大樹

公被申出候とも、夫ハ大樹公之了見、尤 叡慮ニも被為

有候へとも、夫ハ先御止ニ相成、一橋・越前之事不被相

改候事故、夫ハソレニ致置、何分於 叡慮ハ一橋并越前

之事ヲ難し、以 勅使被 仰下候儀故、先被 仰付候通

リヲ可相達と存候其上下様被読聞候事ハ、小子ハ不存候事故、申達候事も無遠慮と存候、其申達候

砌、従大樹公右大变革ヲ致シ、上洛之積り読聞セ、 禁

中へも言上いたし候と被申答候ハ、小子答ニ、其大変

革ハ於大樹公ノ御了見、是ハ兼而 叡慮之趣ニ候間、御

上洛之儀ハともかくも、何分此儀御請ニ相成候様ニと存

候、左なくてハ即今 勅意立不申候、 勅意立不申てハ、

六月五日夜

矢張諸人不服ニ候、諸人不服ナレハ、又々浪士共ノ蜂起

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七ノ

四号文書ト同文ナリ〕

いたし、暴発いたし候本と存候、ケ様之次第ヲ以可申張

文書原寸 縦一七・四糎 横九四・三糎

と存候、ケ様ニ申張候処ニテ 禁中より御差止ノ 勅詔

とも有之候ハ、其時ニ可相止候欵、夫も不都合ニ候ハ

三言 越前士大道寺等ヨリ薩士半田等ヘノ返

書

、只今内々承り候処ヲ以、内々以急便 奏聞江御返事之

久光公越前邸訪問ノ件

御模様ニテ、夫とも一橋・越前之事ヲ可申達御沙汰ニ候

〔封紙ウケ書〕  
一 半田様

ハ、断然と可申達候、其かわりニ御返答有之候迄、暫

西 様 大道寺

所勞と欵申て、登城致ぬと申もの欵、此辺如何可有之哉

堀 様 草 尾

且又其上案し候ニハ、上洛之事も内々ハ 叡慮ニ被為在

候事ヲ差含、何程夫てもと申御返事ニ基キ、如何様ニ申

貴翰拜見仕候、如仰向暑之御御座候得共、弥御安泰被成

張候とも、一円不被聞入時ハ、如何可有之哉、即違 勅

御勤仕、珍重奉敬賀候、然ハ

と申ものニ候故、更ニ違 勅之罪ヲ被正と申もの欵、ケ

其御許様御実父 島津三郎様、明七日御当地御着府被成

様ニ仰山ニ相成候も、実以心配なる儀ニテ、其後迄之儀

候御積り、弥明七日被成御着府候へハ、翌八日御隱居春

ハ、小子一向勤考付不申、何分ニも六ヶ敷次第と存候、

嶽様江被成御逢度 思召候間、御逢被進候様、依而御刻

賢慮聞セ願入候、猶巨細ハ大久保ニ能々御聞被下度存候、

限等之分否哉、被成御承知度、委細御紙面之趣承知仕候、

早々、以上、

右之趣申上候処、御逢之分被成御承知候、然候処(松平春樹)

御屋敷御住居向之分は至而御手狭ニ而、御不都合之義も

御座候間、常盤橋御屋敷ニ而被成御逢候間、明後八日四

時比迄ニ此御屋敷へ御出御座候様思召候、尤御先代

修理大夫様ニは格別御懇意被成候間、御出之節西之方通

用御門より御内玄関江向御出被進候様思召候、右昨日之

貴答旁此段の可得御意如此御座候、以上、

六月六日

猶以御請書之趣是又承知仕候、且又只今も御再書被

成下、取調中之処彼是貴答延引、御用免被成下候、

対御使へ貴答御渡申候、以上、

〔文書原寸 縦一五・八糎 横一一三糎〕

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ

勅使江戸着勅命伝達ノ件

〔封紙ウツ書〕  
「島津三郎殿 重徳  
内啓」

今朝は巨細之御答書辱拜披候、殊之外之快晴、御旅行も

御都合逾御安全珍重存候、陳は今日無滞御着芽出度存候、

扱小子も無滞八ツ半刻計着いたし無異、乍憚御放念可被

下候、扱例之城使板倉周州来入、如例にて相濟候、扱又外

老中も面会如例、更ニ四老中面会、御用談可致との事ニ

候故、子細とも聞入候かと存候へハ、左ハなく御用御急

き候哉、御対顔と申てハ御式も有之、明日・明後と速ニ

もまいりかたきニ付、先へ御用小子ヲ被差向候程之御事

急かぬにてハ無御座候へとも、左レハとて今日二日遅

きとて、夫か御差支と可相成にても御座有間敷哉、談次

て御対顔と申様之御事にてハ如何哉と申候ニ付、我等申

ニ、扱ハ御用談御役方テ御聞取之御積リニ候哉、小子

御前にて承り候ニハ、大樹公直ニ老中方も出席之処にて、

可申達旨被 仰付候間、御直ニ申入候積りと申述候、扱

ハと申内ニ又小子より御対顔ニハ御式等も御座候ハ、

先御用談ハ御用談にて相仕舞、扱初登城御対顔とハ別日

ニ被成候てハ如何と申候へハ、夫ハ却て六ヶ敷候故、何

分御直ニ申上、御対顔ハ御対顔て仕舞、更ニ御用談と可仕候よし被申候、左レハ一日も早方可然存候間、中二日和宮江御進物取計故也置ニて申セハ、来十日と申辺ニハ相成間敷と申候へハ、左様ニも相成間敷哉ニ候へとも、何分直ニ相伺、明日御返答可申入と云テ相分レ候、此段一寸申入候、越ニ御面談之間も有之候て可宜哉とも存候、何レダラ々々延日ハ御急のよし申候へハ、四人一同左様之儀ハ決て有間敷と相對候、此段一寸申入置候、幸、山科御召之由ニ候間、同人ニも篤と申置候間、書面御分りなき事ハ御聞可被下候、早々、以上、

六月七日

追而申、今日堀わさく被下、何も巨細ニ承り安心いたし候、同人大苦勞、乍憚宜御申可被下候、以上いつとても大乱書失礼御免可被下候、以上、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七ノ九号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・四種 横九三・六種

三六 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

將軍対顔ノ件

(封紙ウツ書)

「島津三郎殿

内々

重徳

」

口述

唯今高家兩人宮原授津守 来入ニ而、来ル十日大樹公 御対顔可有内々噂ニて、自然差支共無之哉被尋候、尤過日ヨリ之心組ニ候間、速ニ御請申置候事ニ候、自然越公御面会之御都合も可有之哉と存候間、早々申入候とをか、今日ハ御面会之様ニ承り候へとも、為念ニ候間申入候、早々要用、不典、

六月八日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七ノ五号文書ト同文ナリ)

文書原寸 一七・四種 横三九・八種

三三 中山忠能卿より島津三郎公へ

京都ノ形勢ヲ報ス

(包紙ウツ書)

島津三郎殿

中山大納言

(朱)

□

□ 『壬戌六月』

(封紙ウツ書)

一 島津三郎殿

忠能

内用

緘

追而風土も相違之義、一入時候、御自愛專一存候、

中山忠左衛門始致面会候人々へも、乍憚宜御伝声可

給候、何レも苦勞千万ニ存候、下官少々時邪困居甚

乱書々損短札高免御推覽可給候也、

追日向暑候、先以

禁中御始弥御機嫌克被為渡候、貴公無御滞御旅行、去七

日御着府之儀と珍重存候、段々御苦勞之程令恐察候、

勅使ニも定而無難下着、何かと御世話之義と存候、尚又

宜に御頼申入置候、然は今日宜敷御便有之候由ニ付、此

間已来之次第荒々申入候、

一 老中上京ハ弥御差止ニ相成候、

一 酒井若州去月廿八日自大樹被召候由、今月四日言上、

同七日御暇參 内之処、因所勞不參、九日発足も所勞

御理之旨ニ候、此佩辞役願候後々聞候、

但 当人御役不任之由伝奏へ申来候、

一 酒井雅楽頭帰国掛ヶ京都在留、当地御取締被申付候由

申来候、併末京着無之候、

一 御所付武家従来二人之処、今一人被申付候由申来候、

若ハ一人町奉行へ転役哉ニ候へとも、差当趣意難分候、

一 長門守尤在京、御安心之御事ニ候、父朝臣ニも此比

上京之旨ニ候、此朝臣之説ハ、第一大樹上洛ヲ被庶幾

候由ニ候、夫も宜候へとも、陽明云々御噂之通一橋・

越前弥在役之上ニ致度事ニ存候、右大膳大夫上京ニ而

被申立候とも、精々其辺差含御掛合ニ可相成候、一・

越之処無御助才候へとも、何卒御周旋ニ而一日も早く

役付ニ相成候様致度候、何レも奉為

皇国丹誠之義故、夫々之見込之辺も失望ニ不相成候様、

御所置無之候而ハ不叶事ニ候間、深致心痛候事ニ候、

一陽明前左府御出仕之義、実ハ度々被固辞心痛之処、再

三押而之御沙汰ニも相成御勸メ申入、漸七日御還俗、

同日於 御前閑白以下 御内意申渡相濟、先々一事ハ

致安心候、表向 宣下ハ同日拜賀先例ニ候、装束料地

紋も替候ニ付、今月下旬 宣下被相願候、日限ハ未定

候へとも、先々御安心可給候、

一御家来本多弥右衛門・藤井良節面会、何かと申談、皆

々苦勞之義ニ存候、

右等絶而無益之義ニ候へとも、申入置度如此候、暑之

比苦勞之段、毎々

御沙汰被為在候御事ニ候、追々御都合宜敷義共示給候

事と相例申候、呉々も広大之御丹誠深以令感佩候、猶

々宜御頼申入候也、

六月十日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第九七号文

書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一八・三糎

包紙原寸

縦 二七糎

横 一七九・八糎

横 三八・九糎

三六 大原重徳卿より島津三郎殿へ

將軍へ勅諭伝達之件

十日晴辰刻比出門登城

先殿上ノ間ニ而 宮ノ御言伝物目六相渡シ、其次第如例

之よし、夫より大廊下上ノ休所、対顔ヲ待、扨高家来り

御用談対顔之砌、会津・越前出頭候ても宜哉ト申候付、

コ、ソト存大平尤政事ニ預ル人ニハ誰ニ而茂不苦候と相

答候、扨帶刀之事、

勅使伝奏衆とも被撤候故ニト申ニクソウニ申候間、一向

不存候、伝奏衆も左様之儀ナラハ是ニ可拔置候、併我等

左衛門督在官故

主上ノ御前へも帶劍之身分、大樹公ノ前撤シハ如何ニ候

得共、御仕来りとあれは其事ト申候、少時其方様ハ武官

ノ御事御尤、其候にて不苦と申出候故、帶刀ナリニ対顔

出頭候、一笑く、先白書院対顔如常御言伝物口上目六直ニ相渡、拜戴丁寧也、猶帰京ニ而可申述自分礼了て家人目見へ、引続人払、直ニ同所ニテ

勅詔申述、至極晴ケ間敷候得共、コ、カ一番大事ト誠心ヲ勵し随分静ニ分ル様ニ申述タル心持也、其口状ハ先年以來外夷一条ニ付、兼而被仰出候通 神宮御代ニ被為對被為恐入御事故、往々ニ候得共くるし時宜故時々

叡慮ニ不被為叶事のミニテ御憂苦絶サセラレス候、何卒外夷拒絶ニ被為遊度被 思召候へとも、公武御一和ナラテハ相成兼候付、何卒

和宮ヲ御降配被為遊、御一和ヲ天下ニ表シ候得は、十年内ニハ必掃攘可致との願ニ付、天下ノ為トナラハト被 思召御治定被遊、則去冬御入城被為在候故、十年内ニハ必掃攘可有ト被安 叡慮候御事ニ候、扱当春毛利大膳大夫公武之間ニ立入、為天下周旋いたし候事有之、御満足ニ而往復ニ相成候処、豈料也、西国筋中国辺之浪士共蜂起いたし、不容易事共相唱、已ニ天下擾乱ニも可至形勢

ニ候処、島津三郎程好鎮静いたし、先治り候得共、元来外夷一件より之事ニ候へは、外夷之事イカニモ方付不申てハ、実ニ治リタルト申者ニ無之候間、国難之増長いたし候を深歎キ被思召候、国難ハ天下ノ不幸、国難なきハ天下ノ幸、天下ノ幸ハ則徳川家之幸ニ而、徳川幸ナレハ

朝廷ノ御安心被遊候御事申迄も無之候、右故深被回

宸衷数々御廟算被為在候内、人選登庸之事、最上ト被思召候故、則此趣被仰出候と申て、一紙ヲ懷中より出シ大樹公へ相渡シ候、大樹拜見いたし戴キ被納候様子故、一同江拜見可被為致と申候得は、其俣会津へ被渡、会津請取、扇を開ケ可置様子之処、越前御台ヲト申候故、宸筆ニテハ不被為在旨申候得共、

勅詔故ニと申て、三宝を取寄、其上ニ乗セ上段ニ置、下より各拜見、会津・越前・老中四人・若年寄等ニ候、其中ニ拜見了候ハ、又可申述事アリト申て待候中<sup>○印</sup>に拜見了、大樹公手元へ返却、其時ニケ様ニ被 仰出候事、禁中より御勢ヒを以 仰ラルニテハ決テ不被為在、只々

公武御一和、国内一致ナラデハ外夷掃攘モ不相成事故、重徳御実情ヲ被仰達候故、必心得違無之様、何分公武御一和、国内一致ニシテ、外夷掃攘、天下大平ノ基源ヲ開カレ候様ニト思召候、且又一橋後見ノ事、頃日大樹公年頃ニ付田安大納言(徳川慶頼)被差免間もなく、又今日後見も如何ニ候得は、名目之処輔弼タルベク、其実ハ後見政事御談合可有之候、又大老ハ家臣之事、越前ハ家柄故名目之処差支候ハ、政事総裁職ト称シ候テモ、是以其実ハ大老職ニテ政事可被取計事、右等之事徳川家二百余年ノ事、何卒中興ヲト思召サレ候故ニ 聖慮ヲ回サレ、一橋・越前之事を被仰出候間、自然差支之儀候とも、非常出格之儀ニテ登庸セラレ候事、速ニ御請ニ相成候様ニト云々、右申述候得は、大樹公自口ヲ開、段々之仰承り、猶篤ト勘考いたし、迹より御請可申上旨被申述候、夫ニテ一同退去、小子も退キ候、

○印ノ間ニ、一橋モ度々登城ニ而隔意無之、又越前も日々登城にて政事相談いたし候と被申候、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第九号文 書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・二糎 横二四一・三糎

三三 正親町三条大納言より島津三郎殿へ

久光公之尽力を謝し京師の状況を報す

〔包紙ウツ書②〕 島津三郎殿 三条大納言

(朱封)

〔包紙ウツ書①〕 島津三郎殿

三条大納言

内要

(朱封)

〔朱〕 壬戌

六月十日已剋認封

追日暑威相加候処、御平安珍重不斜奉存候、弥御旅中も御勇健、七日ニは定而御着府と遠察仕候、関東動靜も追々御都合之趣ニ承知仕、実ニ

皇国之大幸

天朝御洪福、是全御忠誠之令然処ニ而、誠以

御満足、於如小生も雀躍之至ニ存候、猶段々御周還を以

神洲安泰

聖上被安 宸衷、万民娛樂之御時節到来、偏ニ御尽力奉仰

候、於左金吾も無事到着と存候、道中以下万々御扶助給候

事安悦存候、尚宜冀存候、於当地も近衛前左大臣殿ニも去

七日還俗、即日御礼参 内之処、直ニ関白職 御内意被

仰下、速ニ御請被成、当月下旬ニは、表向 宣下被奏、慶

賀候事ニ而一同安喜之事ニ候、獅子王院宮ニも六日参

内、被召於

御前、至極 御懇話共被為在候而、先年来聊御違却之義

共全御水积、於宮も大安心被成候事ニ而、於拙子も大慶

仕候、右等之義共も定而御煩慮と恐察仕候間、為御休意

申進候、姫路上京之義ニ付而も彼は心配も仕候処、於同

人は全正義之趣御探索、猶又於途中 勅使尊敬之義共御

示教被成下段、藤井良節より委細伝承仕候而、大ニ安心

仕候事ニ厚御配慮感伏仕候事ニ候、藤井・本田ニも厚心  
懸無透間周旋有之候、於当地も鎮静之段、御安心之様と  
存候、右等之趣乍荒涼啓上仕度、呈愚札候、猶又万々期  
後音候、恐惶頓首謹言、

三条大納言

六月十日

実愛

島津三郎殿

呈帳下



尚々何分ニも御堅固ならてハ難相成候儀、追々大暑  
之候ニも相成候間、折角御敵衛被成、御安健ニ而万  
々御成功吉左右 勅答被仰上候期奉待候、拙筆之上  
乱雖不敬之段御有恕可被下候、以上、

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸①縦二七・三糎 横 三九糎

横一七三・四糎 ②縦二七・五糎 横三八・六糎

三三 大原重徳卿より島津三郎殿へ

登城用談の件

(封紙ウツ書)  
一 島津三郎殿

重徳

今日ハ快晴暑さも強候、逾御清康珍重存候、陳は過刻高  
家来臨、明日未刻為 御用談登城可致との事ニ候、此段  
御心得迄ニ申入候、何ニても可相心得事も候ハ、御示  
教可給候、此段申入候也、要用耳、不乙、

六月十二日

追而申、昨日ハ中山御遣候、何も申承り候、御返答  
催促之事、堀ニて越へ御申之事ハ如何候、若哉其辺  
之移リニ候欤とも存候、何分明日 御用談と申儀、  
如何様之事哉と存候、内々越公へ御問合被下候ハ、  
様子も可相分哉、左候ハ、心組ニも可相成と只今存  
付候、不苦候ハ、明早朝ニても御問合給間敷哉、  
此段御頼申入候、越公屋敷何レ欤不存候へとも、帰  
りかけニ立寄被具候ハ、重畳と存候、早々、以上、  
(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第九九号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・四種 横四三・五種

三三 大原重徳卿より島津三郎殿へ

京都へ書状之件

(包紙ウツ書)  
一 島津三郎殿 重徳

(朱封)

□ □

(包紙ニアリ)

口上

京都へ之文、只今書了候故、別ニ書申上不申、委細使之  
人ニ御聞可被下候、以上、

六月十三日

包紙原寸 縦二七・二種 横三八・九種

三三 大原重徳卿より島津三郎殿へ

後見職大老名義之件

(封紙ウツ書)  
一 島津三郎殿 重徳

□

御返書拝誦候、連日快霽暑氣も強難凌候、逾御平康珍重

存候、陳ハ堀被遣(伊地知貞鑿)、御書外ニも承り安心之事ニ候、尤越前之所存愚案ながら見貫候、大老之所作致間敷にてハ決而なく候処明白ニ候、一昨夜申入候ニも何欵奥底有そふニ存候処、堀ニ承り候へハ、果して見込之通少々存意有之由、併尤之事にて、名計にて実ハ何もかも仕組タル上にてハ、詮ノなきハ元よりニ候、其上心ニ落ヌ事ニても、越前様も御承知となり候てハ、実迷惑なる事勿論、左レハとて一々不承知とも難被申節ハ、実ニ御迷惑察入候、何卒堀小太郎、板倉方へ行向、用人何ト欵云清論人ニ説得有之、周州納得にて、何事も組立より越公掛り合、一も不承知無之事ニシテ、後ニ小子登城其事ヲ可申述候間、堀ニも篤と申含置候へとも、猶周州の処承知否相分り候ハ、速ニ被仰下可給候、夫迄ハ登城申来候トモ、所勞申立登城へいたさず候、扱又一橋之事ハ如何相談勘考相付候哉、是も何欵有そふニ相見へ候へとも、越公も承知之事也、大樹公、小子江直ニ、一橋も此間より、日々登城、はなしもいたし、隔意無之と御噂ニ候事故、御請被成かた

き廉も有之間敷、若被申立候とも一家ノ差支ニ候半、夫なれハ桑名駅にて申候通り之存意故、聊も迹へハ寄不申候、何分一橋之勘考付候ハ、小子ヲ可被招候、夫迄ニ周州之処程好堀よりこしらへ、又脇坂之処、貴所御親族御行向御面会之事故、程好御申解ニなり候ハ、可然存候、其辺篤と落合候ハ、所勞快と申て登城いたし可相談候、越前之事、一橋之事兩人とも若名之処不落候ハ、後見同様、大老同様との事巨細ニ承知いたし候、御尤ニハ候へとも、今一案候へハ、後見ハ輔弼とし大老ハ差支候ハ、政事此比後見相止又と云も不都合なるへく候半、圓輔と総裁職と差支ぬ様ニ被、仰出有之候事故、本人の処承知ニ候ハ、右輔弼・政事総裁職にて両三度ハ押て可申と存候、是則 朝命ニ候、乍併唐らしくて請られぬと達テ被申候ハ、後見同様、大老同様と申処へ落付、夫にて承知ニ候ハ、以脚便 叡慮可候候、其御返事次第、又々可申入と申ヲ切ニ可致と存候、右故板倉・脇坂ノ辺分り次第、早々為御知願入候事、勅使重徳旅館江御出可被成之事、高家へ可申入之事承知いたし候、乍内々御頂

戴之御書取脇坂江被為見候由、重疊之事ニ候故、從小子可為見候、併三通之内何レヲ御ミセニなり候哉、昨夕大久保ニ尋置、今朝御答待居候処、堀右書取落シ宿元ニ失念いたし候由ニ候故、此人立寄セ折歸り之上、高家へ可申通呼寄可致応対候間、明日之事ニ相成候、左様御承知可被下候、前条大老之事共、御直ニ咄し申度存候事ニ候、相分り候ハ、早々可申入候間、何卒早々御出御頼申入候、何も天下之御為と存候、全体越公ニも私ニ面会いたし度事ニ候、此辺も御勘考願入候、又々乍毎々京都便り御家来へ相頼候、何卒早々達度存候、子細長ク候故、此使ノ人ニ御聞取可被下候、早々、要用耳、大乱書失礼御免御推覽可被下候也、

六月十四日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七ノ七号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・八糎 横一一〇糎

三三 久光公ヨリ脇坂閣老へノ呈書草案

勅諭奉行ノ件

(端裏朱書)

一 壬戌六月十六

(同朱)

「閣老」 「脇坂江遣候書翰」(破損)

一筆致啓上候、日々暑氣相加申候処、愈御壯健被成御座奉恐賀候、然ハ先日は旧来御親睦之一筋ヲ以、御役御離れ御面会被成下、別而忝奉存候、殊ニ随實意存慮無腹藏申述候処、何モ御異論無之致安堵候、夫ニ付猶又致熟考候処、何レ天下之御為と奉存、僭踰之罪ヲ不顧、左条之義申述候間、御都合次第御同列方江御談合被成下度、伏而奉願候、

一 此節

叡慮之趣被為 在、久世氏上京之儀被

仰出候処、御請及遲滞候ニ付不被為得止事

勅使被差下

公武御一和、御国内一致之処無之候而ハ不相濟被

思召、就而一橋・越前之両侯已下有志之人心帰嚮スル処

故、御後見御大老ニ御登庸有之候様トノ御趣意、誠に恐  
悦至極之御事ト奉存候、然処先日粗御咄致承知候得は、

名目之処御評儀甚御六ヶ敷由、其節は愚意何共不申出態  
と差扣罷在候得共、退而致勘考候得は存付候義致黙止候  
而は、却而不忠と奉存不得止事申上候、遑遁

勅使被差立被

仰下候 御趣意、纔名目計ニ被為拘、御評義御決定無之  
候而は、乍恐優柔不断と可奉申欵、当時不容易折柄、旧  
格先例ニ御拘泥被為在候而は、以之外之御大事と奉存候、  
ケ様御評義御遅延罷成候而は、又々人心疑惑ヲ生シ、異  
説紛々致流行、浪人共致蜂起候義も可有之哉と、甚以懸  
念至極ニ奉存候、若其次第二相成候而は、迺も御国威御  
挽回之期も被為在間敷、実ニ恐入奉存候、何卒非常之時  
節御出格之訳ヲ以、一日も早く御評決

勅諭御遵奉被為在候様伏而奉希上候、尤一橋君御後見之  
義は近比田安君御後見御免ニ相成候故、際々之所如何ト  
ノ御評義ニ被伺、御尤之御事ニは御座候得共、不容易時

節、殊ニ被為惱

宸衷態々

勅使ヲ以被

仰下候御事ニ御座候得は、快ク御請被 仰上候ハ、

公武御一和之御実情御通徹被為在候御義ニ而、天下之人

心も此御一条ニ至極奉感服、

御国家御安泰之基と乍恐奉存候、越前君之儀は御家門之

故聊御故障之訳も被為在候ハ、御大老同様御政事総裁

有之候様、屹と被 仰渡一統江も右之趣承知仕候様御達

被為在候ハ、御国内静謐人心一和罷成、無此上御美事

と乍恐奉存候、

一長州之事粗申出候処、御答振不分明致承知候、此儀は

先比脇方より当五月二日大膳大夫より之上書致落手、虚

実は難量御座候得共、愚意聊致疑惑候、尤御上洛之御一

条は実ニ寛永以来之御盛挙は申上迄も無御座候得共、先

日も申上候通何そ当年中不被為行候而も、天下之人心紛

乱仕ニも有御座間敷、来秋より先ニ被為行候ハ、可御宜

欽と奉存候、貴所様ニも其御趣意と致承知候、然ルニ長州は頻ニ此義催促申上候姿ニ相見得、甚無心許奉存候、方今之所ニ而は

勅命通越候御登庸之上、当秋上京被<sub>レ</sub>命外夷御処置、国是之御議論言上有之

叡慮御同相成候方可然欽と奉存候、急速ニ御上洛被<sub>レ</sub>為在候而、御道中宿々及迷惑、且於京師種々御評義決兼候御事共被<sub>レ</sub>為在候ハ、以之外之御大事、却而

皇国混乱之基欽と乍恐奉存候、大膳大夫爰許江罷在候ハ

、小子面会直談いたし候所存も有之候得共、着を乍存

道を替、前日発足之次第何共不審千万心底難量御座候、

長門守出府之由ニは實得共、相成義ニ御座候ハ、家督ニも無之決兼候義も可有之候

ニ付相成義ニ御座候ハ、只今之内再大膳大夫被<sub>レ</sub>召返、

小子と深厚致談合候様被<sub>レ</sub>仰下候義は相叶申間敷哉、左

様御座候ハ、趣意致一致

公武之御為別而可然御事と奉存候、

右之趣家督ニも無之候得共、亡兄遺言之一筋ヲ以不得

已事、不肖之身ヲ忘<sub>レ</sub>所存十分申上候間、若忌諱ヲ犯シ、僭踰之罪御糺シ有之候ハ、何様共可奉畏候、小子此節国許致発足候より抛身命

公武之御為周旋仕候義ニ而、敢而功名榮利ヲ貪り候趣意ニ無之、

公武御一和、御国内一致相成候得は、愚身は如何様罷成候共、曾而遺憾無御座候、此趣深ク御汲取被<sub>レ</sub>成下度伏而奉願候、以上、

六月十六日

島津三郎

(脇坂安宅)  
脇中務大輔様

文書原寸 縦一七・一 横二七三・四 種

三言 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

長州上洛ノ件其他

(封紙ウラ書)  
一捧酬 重徳

7

「

口上

御細書之趣何も承候、此御趣意ハ小子之存意ト同事ニ候間、能々心ニ入候、必御案し被下間敷、御写ハ抑留いたし置候、長州上洛一件、御所ニも強テ御望ハなく、中山殿よりも一・越之処可申聞と今日文ニ有之候、且又御書之一件ハ、大久保ニ申聞置候、能々御聞取可被下候、早々、以上、

六月十六日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷五六七ノ六号文書ト同文ナリ)  
文書原寸 縦一五・九種 横四三・七種

三三 大原重徳卿より島津三郎公へ 二通

勅使久光公ト面会ノ件

二三五ノ一

方今之時勢不堪傍観、島津家一同拳三國抛身命勳王攘夷 御承知之事故下略ス、

前書之御次第ニ候得は、島津三郎ト直面談不致而は、不

相叶儀有之候、右ニ付御馳走所江相招度存候得共、御差

支之有無不案内ニ候間、御尋申入候、御用便ニ候間、来入相成候様御取計被成下度存候也、

六月十六日 重徳

老中

御中

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第一〇三号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横四〇・六種

二三五ノ二

(封紙ウツ書)  
「島津三郎殿 重徳

於御承知必不及御答儀、

ノ

口状

別紙之通りにて、只今高家衆へ差遣候、左御承知可被下候、扱昨夜堀小太郎来入之処 小子最早いね候故、遠慮ニ

て直ニ被帰、不得面談残心ニ存候、遠方氣之毒ニ候へとも、不承てハ不相叶義ニ候ハ、今日御遣下され候様願入候、早々、不典、乍例実ニ乱書失敬御免可被下候也、

六月十六日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第一〇二号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・八釐 横三五・二釐

〇三六 一橋越前任命ニ付久光公ヨリ脇坂中務大輔へノ書

三三 京都ヨリ因許へノ情報

今大路民部権少輔ヨリ西尾土佐守へノ書

状写添

合二通

久光公上京一件、島津石見病死ノ件

当時京都之風説承合候処、左之通御座候、

一今般

三郎様御上京被遊候処、洛中洛外とも人氣相和一統難有狩、是迄之難渋之時勢茂相直り、安堵之渡世可致なと申触し、

天子茂 御満悦被遊

御安心候趣 御沙汰被為

在候由、

御所ニ而之噂之由御座候、

一御所江典葉大允山本大和守典葉少允高階安芸守参

内仕候節、 御内々

御咄ニは、関東表暴政を憤り諸国之浪人共可及騒動聞

得有之、折柄

三郎様御出府之筈ニ而

御登被遊候於 御途中 御取鎮置、猶不相用者有之

御滞在中既蜂起可致所を則 御取鎮被遊候儀、此節

御縁談之儀ニ付

陽明家江近衛様

御越被遊候節、右之趣御届被遊、則中山大納言様・久

(志熊)

(通照) 三位様等被召呼御相談之上、堂上方五十三人被召呼

御評定之上 奏聞ニ相成、則

三郎様ニは 御在京被

仰付候由ニ承得申候、

一三郎様より被 仰上候御書付、下々之者江為認候而是

万一茂

叡覽相成候而是恐入候付、乍悪筆 御直ニ御認被遊候

趣被

仰上候由ニ而入

叡覽候処、則 御筆勢と申、墨色 御覽之上

御英雄御方外ニは有間敷と 御内沙汰之趣、極内承知

仕候、

一三郎様最初

近衛様江 御越被遊候節、中山様其外議奏衆御越ニ而

種々御対談被遊候処、中山様は是迄御発明之御方と

御承知被遊候処、頓と物毎御移り不被成由、徳大寺様(公純)

正親町様能々御得心ニ而御応答御出来被成候由、右付(実徳)

中山様は態と取繕不分姿ニ而御入候哉と、堂上方ニ而

風説之由御座候、

一將軍様を御呼登之事余之儀ニは無之、関東老職中亦是

殿下と所可代申合、品々取繕、全

將軍様之 御耳ニ不入様子ニ付、

御上洛被為在候ハ、

御直ニ委敷被

仰論、是迄之形行を茂被

仰達候は、急度御得心茂可被成、最早子供之様ニは有

之間敷、十七ニ茂相成居候ハ、事情相分可申哉と被

存候、いつれ後々ニは異船打払可被

仰付、無左候而是諸国一統不穩事ニ而、兼而

御心配被為及候付、曰々

天を祈、万民平和、物之潤沢ニ相成候ハ、おのつか

ら諸色も下料ニおよひ、安堵之渡世可致哉と精々御心

掛被為遊候御儀ニ而、

幕府之役々は迄利欲を専一として

御政事を執行ひ、甚以不可然事ニ被為 思食、実以

天ニ対し急度不相濟事ニ而、ケ様之ものは相除不申候

而は

御国体ニ相拘候、今般

將軍様御上洛有之候ハ、大坂之御城ニ止メ被置、

和宮様を御呼登ニ而被召置、江戸 御城は一橋刑部卿(徳川慶喜)

様御守護被仰付、越前前中将様を御大老職ニ被仰付候

ハ、

御政事向茂行届、左すれハ諸国共ニ安心相治可申哉之

趣

御内慮之趣ニ御座候由、

御所ニ而之噂之由御座候、

一 此度関東江

勅書被為下候付

三郎様江御渡

御出府之答

御内勅有之候処、何卒誰ニ而茂

勅使を被為下候様被

仰上候処、

御聽届御尤

思召、則夜中俄ニ御撰家方始堂上方之内五十三人被為

召參

内有之、此節出格之御訳ニ而関東江

勅使可被遣候間、誰ニ而茂御受則用意可致旨被仰渡候

処、誰一人茂御請被仰上候御方無之、暫有而徳大寺様

私江被仰付候ハ、御受可仕、今一人副使は久世三位様

江可被 仰付筈之処、大原三位様末席より乍恐私江被

仰付被下度、此節之

勅使は出格之訳ニ茂御座候間、若將軍家ニ御受茂無御

座候而は其假寵帰候儀も難調程之事ニ候得は、一大重

事ニ奉存候、其上私事も最早老年ニ茂及び惜キ命も無

之、尤是迄何そ急度

御用茂相勤度奉存候得共、相応之御用茂不被為在候付

何卒格別之以御評議私江被仰付候様奉願候旨被仰上候

由、徳大寺様・久世様ニ茂学才有之御方御座候得共、

先此節は御見合ニ而以後何そ之節可被遣、此度は大原

三位様江

勅使被仰付

三郎様は副使之場ニ而被 仰付候事之由承申候、

但

格別之

勅使被差立候節は、正使と副使御両人之由ニ承申

候、

一 今度大原三位様江格別成

勅使被 仰付候儀ニ付而は、此御方は学才万端衆人ニ

越候御方ニ而、関東江被遣候而茂 京師之恥辱を醸出

候茂決而有之間敷と之

叡慮之由ニ承得申候、

一 右付格別之以

思召、從二位左衛門督

御推任御推叙被

仰付候由、

一 先比よりは是非久世(広聞)大和守様上京之儀、関東江度々被

仰下候得共、此比は別而御用繁ニ而中々旅行等不相調、

依之内藤紀伊守様上京可仕と之趣被仰上候由、於(信親)

御所は大和守様是迄之御取扱之品々

御聴届被遊度、是非上京可致と之御事候得共、右次第

ニ付逆鱗被遊候由御座候、

一 千種少将様(有文)・岩倉少将様(具視)は兎角何致之事関東江御内通

被成候哉、

御所之御評儀等相洩、不容易御事之由、関東ニ而は被

相用候御方之由、於

御所は不評判之由承得候、

一 九条様御事茂別而不評判ニ而、いつれ軽くて御落飾と

申事之由、

一 何品ニよらず都而之事

御所より関東江被仰下候義

殿下と若州侯御相談之上之由、関東江は不相通、又同

所ニ而も取繕候もの茂有之哉ニ而

逆鱗被為在候由、右ニ付

將軍様御上洛被遊候ハ、事實相分 御安心被遊候

思召之由御座候、

一 此度以

勅使被仰下候三事之内、一事関東ニおゐて御承知被成

候ハ 御安心被遊候儀ニ候得共、若此儀御不承知御座

候ハ、九州・中国・四国之諸藩召列

御直ニ箱根山迄

御出張被遊、異船御打払等之御指揮可被遊

御考ニ被為在候間、彼是御掛念之儀茂候ハ、是非

將軍様御直ニ

御上洛被成度、左候ハ、

御直ニ可被

仰渡と之御事、

勅書之外ニ極内被

仰下候由ニ風聞承申候、

一 近衛(忠實)前左大臣様当六月七日 関白職 御内意被為 在

候処、達而 御断被 仰上候得共

御聞濟無御座、一条様(忠孝)江御進め被仰進候得共、御同所

様御事も御病後之御事ニ而是又御断被仰進、尤御一統

様被仰候ニハ、是非近衛様ならてハ御承知茂不被成由

無抛御受御座候哉之趣ニ承得申候、

一 前左大臣様来ル廿三日

関白

宣下之由御座候、

前左府殿、来ル廿三日関白

御拝賀被相催、且

左大将殿同日大将

御拝賀被相催候付、当日已刻参上可有之由

仰候、已上、

六月十六日 今大路民部権少輔

西尾土佐守殿

一 今般

内裏御築地外江御住居之公家衆、都而御築地内江御引

入被成度、往古は

大内裏ニ而候得共、此節は

中内裏ニ被遊度

思召之由、右付而は

公辺御物入ニ不及、都而

薩州様と長州様と被仰合御造管被為在筈之旨、專

御所ニ而之評判之由御座候、

一 將軍様御上洛有之候ハ、以來京都御警衛向之儀は、

公辺御近親之御方様江被仰付と之御評議之由御座候、

一 今般

三 郎様御上京被遊候処、

御所ニ而茂別而

御安心被遊候由御座候、

一 右付

御所女中方ニ而茂

此御方様御事而已御尊御座候由、御威光之御事と皆々

奉称候、

一 島津(久曾)石見殿遠行之儀、達

御内聽候由ニ而、典藥大允等被為 召様体等 御聽届

之処、典藥少允より申上候は、疫症之上麻疹ニ而診察

之節最早様体無御座、迎茂藥力之届候所ニ而は無御座

旨申上候由之処、是迄

御安心被為在候処、右次第誠御残多

思召、乍恐 御落涙被遊候由、是は未極内之事故他言

は致間敷と之

御沙汰茂被為在候由、実以残心之至と

御所ニ而之尊御座候由、

右之通承得申候、此段申上候、以上、

六月十七日

文書原寸 縦一七・七糎 横四七九・四糎

三六 和蘭松木弘安ヨリ長崎八木称平へ

蒸汽船買入ノ件及欧州事情報告

(包紙ウツ書)

「長崎薩摩御屋舖

八木称平様

急用

和蘭王城ガラヘンハーグ

松木弘安

六月十七日発

先度龍動より寸墨拝呈仕候処相届候哉、御地は炎暑甚敷候半、愈御安康奉賀候、此地今以冷氣不除、二裏衣を着無事逆旅消光仕候、乍憚御他念可被下候、借洋曆去ル第四月二十三日長崎ボムペ氏より一書相達、再三熟読仕候、右ニ付即日ヘルデスにも相談仕候、右書落手之日は我曆六月某日にして、翌日直ちにロツトルダムに参り製鉄局一見仕、同十一日アムステルダム江参りネードランド・ハンドル・マートシカッヘイの局江参り候処、出島之マートシカッヘイ之名代よりも、ボムペ之書と同文之写参り居候ニ付、右仲間の頭取ト申者も直ニ承引仕候、右ニ付小生より書面相認差遣候、其文略云 吾薩摩公の内命を受け、鉄或ハ木製之汽船、長六十四エル、二百五十馬

力、其余ラントマシン類十五種を三十三万ギェルテンにて買入へき旨を命せられたれども、久しく此地に留ること能わす故に、ヘルデスをして吾名代たらしめ、マートシカッペイより吾か名を以得たる借用金手形を以て、右船及諸器を買入しむへし、右委任の証として、如是云々、又マートシカッペイ之頭取より小生ニ送る書之大略云、薩摩公之命を以、足下船及諸器を買入らるゝに就て、吾社中より三十万ギェルデンを借り、足下滞在久しからざるを以て、此事をヘルデスに托して買ハしめんとす、故に吾等総て此事を承引せり、但右之金高は唯船と諸器とを買ふの価のみなれば、此を日本に送るは其余之入費なれば、是亦吾社中より出銀して、足下の望に叶ふ様ニ取計へし云々、

右ニ付鉄船木船いつれか善なる由を、ヘルデスに議し候処、鉄船は云々之利あるに就き鉄之方可然、又二百五十馬力ニ而はケートル甚大にして、軍船ならでは荷船に便ならず云々ニ付、書翰を以ヘルデス江申送りたる文面

に云ハルデスは一昨日其故郷に帰り此地ニ在ラス、吾君命を以船を買んと欲すれども其船を点検スルノ時日なければ、足下をして吾名代たらんことを願ふ、右は過日吾よりネードルランド・ハンドル・マートシカツヘイに贈る所の書面之如し、但船は鉄船にして、六百トン積<sup>九十五斤許</sup> 百五十馬力とす、右は荷船なるかゆへに馬力此上に出つれば、船甚大にして限りたる三十万ギェルデンを以て、船と諸器とを残らず買ふこと能わさるか故なり、其他之鉄器はホムベより余に書通せるか如し云々、○ハルデスはロンドンに至りて、鉄汽船を買んと云、但再度表向の命を受け、いよゝ速に買入たき由を申し送れる之後、右マートシカツヘイより金子を受取、船及諸器を買入、御地江相廻ス之手筈ニ致置申候、○儲日本使節はロントンを去ル五月十四日出帆、十五日カラヘンハーク江着、既ニ今日ニ至ルまで一月余逗留、来ル十九日此地出立、フロイセン都ベルリン江差越、其より船路ニ而魯西亜都府江差越候積り也、○談初メに帰る、○此地より汽船送り方ニ就而は、猶六七ヶ月

相掛可申由、此カヒテインは先年長崎江参り居候測量方伝習致候ウイツヘルス乗込参り度由、水夫は二十人も有之候ハ、十分なるへし、然ルに蘭人は先年より御国之恩を感じ居、長崎江参ル事を嫌居、直に鹿兒島江乘入らんと申居候間、今より早々此由を公辺江御願出ニ相成居候様、御申出可被成候、否ザレは一旦長崎江入津、其より請取ニ相成候而は、手数甚面倒ニ御座候、右之通直ニ鹿兒島へ参り候而宜しければ、其段ボンベ之方より御申送りニ相成度奉存候、尤鹿兒島へ直ニ乗入候義、公辺より御免無之様子ニ見へ候ハ、一旦蒸氣船買入方御免ニ相成居候事なれば、長崎江持来ルへしと、御註文ニ相成居候へとも、蘭人共強而鹿兒島へ乗入候と、後ニ知らぬ体に御届有之候而も可然存候、又蘭人を鹿兒島へ留置、諸器相備付させ候義も可宜存候、ハルデスも頻ニ此事を願居候得共、大抵阿久浦ニ而宇宿杯見竟居候間、備方出来可申、其蘭人を留置候義、公辺より御免有之間敷、且其者之給金も貴かるへく存候間、居付候義は御免無之ト、ボンベ江

御断可被成候、○却説、歐羅巴其外之方今之形勢不宣、米里堅は未戰爭穩ならず、イタリアも折々風波を起し、仏はメキシコを攻め、安南は既ニ奪ひ、又来年は朝鮮を攻

Eergisteren werden wederom met zeer veel Succes te Shoeburness proeven genomen met den nieuwen 300 ponder van Armstrong tegen de schijven van de nieuwe gepantserde schepen.

De ijzeren platen van die nieuwe fregatten zijn 5 ½ duim dik, dus 1 duim dikker dan die van de *Warrior*. Bij het eerste schot drong het projectiel oogenblikkelijk door de eerste plaat, zonder evenwel het ligchaam te beschadigen.

Het tweede schot brak de bovenplaat en drong geheel door het ijzer en houtwerk; het derde brak de onderplaat en drong door de schijf.

Bij het vierde barstte het kanon aan stukken, waardoor aan de proefnemingen onverwacht een einde werd gemaakt.

De admiraliteit is, naar ik verneem, oer het resultaat der proefnemingen bijzonder voldaan.

るの下心有之、英は益船を増さんとす、昨十六日之新聞紙、英信と申条にゲパンチエールデシキップ之試有之、即但パンチエールは鎧之義也、アルムストロングゴンは鍛て製したるライフル大砲也、和蘭ニ而も、近日より取掛り一艘のゲパンチエールデシキップを製する由、其鉄の厚サは四寸五分、之を造る価二十万三千ギルデンなり、但和蘭領之海は皆浅キ故、輪ニ致し候へとも、御国ニ而はスクルーフ可然杯承候、方今アメリカ之戦争ニ而、此鉄張を船を用ひて勝利甚多し、故ニ歐羅巴諸競て此鉄船を作らんとす、○仏は英魯ニ先立、日本を握ル之内心有之候由、仏人ニ知己有之、秘ニ其危心を明し申候、甚恐るへし、何分懦弱に過ぎられぬ世上ニ御座候間、頻ニ武備有之候様、御国江御勧め可被下候、英ニ而も此地ニ而も、武庫或は調練杯見候処、至而敵重驚入候、右ニ就而とても俄ニ敵備なり難き事なれば、せめては偷安之弊ニ而も除候様有之度、外国を知らぬ人は、世間も我國同様ニ無事ならんと存候得共、此地ニ参り見候得バ、いかに

も恐れざるを得ず、生曾テ食物之事と草履之事を心配いたし居候、食物はとも戰場ニ而めしを食すること能わす、履は稿藁を用ひ難し故に、早く乾飯或ハ堅麦餅を製し、牛皮をなめして、便利なる履を作り、平日之を諸士に配分すへし、雖然是等は生が即座ニ思案せることなれば、更に過分之改革あるへし、委細は帰朝之上可申上候得共、猶御國中練兵有之候様、御申出可被下候、○右は生か本業ニ非されは、外ニ病院貧院等之探索を詳にせり、是又寸楮中に載すとも益なれば、帰朝之上可申上候、恐惶拝頓、

六月十七日 洋曆六十二年七月十三日 松木弘安

八木称平様

昨日之新聞紙ニ云、無人島は既ニ日本領となりたりと云、水野築州之功なるへし、○此地和蘭は二百年來之(忠徳)交際なりとて、恰カモ祭礼の如くに日本人を取扱へり  
○吾輩之帰朝は当年十一月ニ相成可申、存外処々ニ而手間取申候、

文書原寸 縦一七・二種 包紙原寸 縦 二二種

横五三・七種 横二八・八種

三 大原重徳卿より島津三郎公へ

後見職及政事総裁職之件

(封紙ウツ書)  
一 島津三郎殿 重徳

今日も暑氣甚敷難凌候、誠昨日ハ遠方御苦勞ニ相成候処、何之風情も無之御氣毒千万、嘸々御草臥察入候、逾御平康珍重此事ニ候、陳ハ今日登城之処、(松平彦四郎)越公不参残念、様子如何と存候処、何之子細も無之、政事総裁職ニて御請ニ相成候、尤越公出席なく候へとも、御請之趣各被申述候、則内々可及

奏聞旨申述候処、承知ニ候間、早速書状飛脚へ差出候、扱先一事ハ御請大ニ心安心、全一昨日之御文、又昨日之御書が重疊間ニ合候と深々辱仕合ニ候、扱一橋殿儀ハ(慶喜)一事案外之事御座候、子細ハ禁錮ハ被免候へとも隠居被

申付有之、隱居之身分之由、右ニ付依

勅諭一橋再職被申付、<sup>(慶應)</sup> 搦田安殿同様ニ相成候、此隱居之事ハとんと不存事ニ候、夫ハ更再職と有ハ夫て宜敷候、処て一事申事有之候、子細ハ先比田安殿後見被免、又コ、テ後見と申、輔弼と唱候とも其命御座候てハ、主人ハ互ニ異存も有之間敷候へとも、又家来向何と欵有之候テハ、如何と甚心配いたし候由ニ付、再職ニて後見同様と申処と申事ニ候旨、各被申候ニ付、輔弼ならてハ、勅命も立かね候振合ニ存候へとも、再々貴所も御咄シ之通りニて同様ナレハ宜、且ハ田安殿との事も何欵見トメタル子細も可有と存候ニ付、後見同様ニて可然旨相答候処、大ニ安心之様子ニ候、然レハ後見同様と申儀、更ニ御書取ニても御所より可被下旨申述候処、只再職被申付候ニて、後見同様田安殿と御一緒ニ、何欵御相談有之候ニて宜様子ニ各被申述候ニ付、夫てハ何と欵御請の廉なくしてハ、畢竟徳川御一家丈御承知之事ニ相成候故、夫てハ重徳も御宜とハ難申候と申述候へハ、成程と申事ニ候間、

其辺能々御勘可被成、何分後見同様可相心得、蒙

勅御請申上候と申様之事ニならずてハ不相濟旨ニ申述置候、右様ニてなくてハ小子宜とハ難申と存候、如何可有哉御相談申入候、乍御面働御存意も候ハ、御答可被下候、仍早々如此候也、

六月十八日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一〇四号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一九種 横一〇三・八種

二〇 大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ

老中へ交渉ノ件

〔封紙ウツ書〕  
島津三郎殿

重徳

口述

扱々敵敷暑さ、何之御障り無哉、珍重ニ候、昨日ハ中山

ニテ御示諭之条致承知候、則昨夜申遣し候処、返答如此候間、今日ハ何とか可申述、其節屹度可申入と存候、扱又掛御目候御書付、乍御世話敷申出候、早々、要用耳、不乙、

六月廿二日

文書原寸 縦一七・七糎 横四二・一糎

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ

老中招致勅命奉行督促ノ件

(封紙ツラ書)  
「三郎殿」

重徳

ノ

「

過刻兵部ヲ以申入候書取ハ、差越し候書取ノ不日ニ後見と申下ニ張候積リニ候、昨日ハ御申越之儀承知いたし、又御心切ニ御書取とも辱、大ニ力ヲ得候、然ルニ御示諭之通、先方被越候書取ニ、此假御示諭之文面ハ難差出ク存候ニ付、勘考いたし御相談申入候事ニ候、能々御覽御存意も候ハ

、必々無御遠慮朱ニテ御加書可給、呉々御頼申入候、扱御答次第ニ老中相招とをも、輔弼御請ニ不相成テハ、出格被立候。勅使ノ詮不相立候間、尚以勘考御請可有様ニと存候、右ニ付書取之趣ハ一覽候へとも、付札之いたし候次第ニ候間、能々熟考御請有之度存候、且又全体ノ趣意も差述候て、昨日御遣し之書取朱書之様ニいたし相渡し候ハ、如何哉と存候、此儀便ニ御勘考御示教可給候事、今朝兵部ニ為持可上之処、大急キ此文認候間なく候故、従迹掛御目候、御勘考御示諭可被下候、御返事次第ニ老中相招申聞出書取も相渡し、猶御勘考早々御返答承度と可申と存候、早々、以上、

六月廿四日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一〇五号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・七糎 横五〇・二糎